

わらしべ長者で宇宙海  
賊

岸若まみず

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

書籍化を期に『わらしべ長者と猫と姫　く宇宙と地球の交易スキルで成り上がり!? 社長! 英雄? ……宇宙海賊!?!』というタイトルへ変えたものを、Ver. 2としてバージョンアップ投稿し始めました。

この小説はVer. 1として、完結したものとして残しておきます。

わらしべ長者的なスキルで宇宙船を手に入れて、地球に来てしまった猫型宇宙人を故郷に帰す話。

主人公はスキル『ジャンクヤード』を通して宇宙のどこかの誰かと物々交換ができま

す。

交換の規模を大きくして宇宙船を手に入れるため、宇宙の物を使って地球のお金を稼  
ぎます。

なろう、カクヨムにも投稿しています。

# 目次

第1話 ミカンと猫と宇宙海賊 | 1

第2話 焼き芋と猫とバリア布 | 27

第3話 カニチップスと猫と銀河警察

39

第4話 迷宮と猫と抱っこ紐 | 52

第5話 タバコと猫と缶コーヒー

65

第6話 神社と猫とホームセンター

80

第7話 トイレと猫と引き戸の実家

87

第8話 猫と猫とナンパの結果 | 103

第9話 豆と猫と体重計 | 118

第10話 暗闇と猫と気合いビンタ

132

第11話 期待と猫とデカイもの

145

第12話 鱗と猫と力場神拳 | 155

第13話 サイバネと猫とサングラス

172

第14話 眼鏡と猫と壊れたテレビ

184

第15話 コードと猫と有料放送

194

第16話 童貞と猫とキラキラネーム

	208	第17話	ワインと姫と日焼けマシーン	219
		第18話	起業と姫と出席日数	232
		第19話	広告と姫と換毛期	244
		第20話	釣り餌と猫とパワードスーツ	252
		第21話	コーヒーと猫とマットとジエ	257
		フ		
	264	第22話	ふりかけと猫と化粧水	
279		第23話	正座と猫と隈のおねいさん	
		第24話	部長と姫と男の夢	288
		第25話	エアコンと猫と誘い文句	303
		第26話	歌と猫と金頭龍	314
		第27話	曹長と姫と配達野郎Aチーム	324
		第28話	粕汁と姫とスキルオーブ	336
		第29話	ドーナツと猫とコールセン	351
		ター		
	362	第30話	実家と姫とロボの足首	
		30話までのまとめ・資料集		373

第31話	地図と猫と映え効果	—	394
第32話	手巻きと猫とサードアイ		
408			
第33話	カラオケと姫と音声認識		
418			
第34話	無謀と猫と怪獣退治	—	429
第35話	姫と猫と宇宙海賊	—	449
第36話	都会と猫と地殻変動	—	483

## 第1話 ミカンと猫と宇宙海賊

アイテムボックスという物を知っているだろうか。

かつて創作の世界にしかなかったもの。

ダンジョンからスキルオーブが発掘されるようになった今でも、庶民には手の届かない高級なもの。

そのアイテムボックスという物は、何でもかんでも入れておける便利な倉庫の事だ。剣でも銃でも住民票でも、そこに入れときやいつでもどこでも取り出せる。

雨が降れば傘を取り出し、喉が渴けば水を取り出し、終電逃せば自転車を取り出す。「あつたら便利だなあ」と、誰もが夢見る超絶神スキルの一つ。

そんなアイテムボックスが、ある日突然頭の中に来た。

といつても、頭に穴が空いて物入れができたってわけじゃない。

思考の片隅に、方眼紙型のゲームのアイテム画面のようなものが浮かんで見えるようになったのだ。

俺以外の誰にも見えないこれには、一マスにつき一種類のものを入れることができ

箱や袋に入れておけば、別々の物でも不思議と一マスに収まるようだった。

「いらつしやいませ」

「揚げ鳥クンレッドください」

「かしこまり」

俺は実験のために朝のコンビニでお茶とおにぎりとお揚げを買って、全くやる気のないバイトのエルフお姉さんから袋を受け取った。

昼に大学のベンチで取り出した唐揚げは、今買ったばかりのようにホカホカだった。

どうやらこれは時間停止系のアイテムボックスらしい。

こんな力がなぜ俺にあるのかはわからないが、あるものはあるのだから仕方がないよな。

誰に迷惑かけたわけじゃなし、返納する先があるわけでもなし。

俺は降って湧いた幸運にポンと身を任せ、毎日手ぶらで重いもの買い放題の最高の暮らしを始めたのだった。

そんなアイテムボックスに異変が起きたのは、使い始めて三ヶ月ほど経った冬の日の



事だ。

骨まで凍えるピザ屋のバイトから帰り、なんとなくゲームの電源を入れたらあつという間の午前二時。

遊んでいたテレビゲームをメニュー画面で止め、ちよつと一服しようとした時の事だった。

「あれ？ ミカンが箱ごとなくなってる」

腐らないようにアイテムボックスに入れていた、実家から貰った箱入りミカンが、どこにも見当たらなかったのだ。

その代わりにアイテムボックスに入っていたのは、まるつきり入れた覚えのないオレンジ色の缶ジュースだった。

冬だから熱々の缶コーヒーぐらいは二、三本入れてあるが、見るからに炭酸飲料っぽい色合いのこの缶ジュースは買った覚えどころか見た覚えもない。

俺はコタツの上の雑多なものをかき分けるようにしてどかし、空いたスペースにそれを取り出した。

ごろんと転がるオレンジの缶を手にとってみると、それはずっしりと重く。

不思議な事に表にも裏にもプルタブが見当たらない。

「なんだろうマジで、ジューズじゃなくて缶詰？」

表面に書かれた文字は日本語でも英語でもないようだ。

スマホで翻訳してみようと思い、それを机にトンと置いた瞬間……  
カシユツと軽い音がした。

置いたはずみで栓が抜けたのかと思ったが、そうではなかった。

それは変形していたのだ。

缶ジュースの腹の部分からは水色のピストルグリップが飛び出し、飲み口に当たる部分からは同じく水色の銃口が飛び出していた。

「おもちゃか……っ？」

銃の形に変形した缶ジュースのグリップを掴んで壁に向ける。

インターネットでこういう色合いの銃のおもちゃを見た事があった。

これもあれと同じように吸盤付きの弾が飛び出すのだろうか？

興味本位で壁に向けて引き金を引くと、銃は『ヴンツ！』つというモーターが回るような音と共に一瞬だけ振動した。

「あれ？」

弾が当たったような音はしなかったのだが、なんだかアイボリー色の壁紙の一点が黒くなっているような気がした。

「やべ……弾めりこんだ？」

慌ててコタツから立ち上がって壁を見に向かうが、弾はどこにも見当たらない。

そう……弾はなかったんだ、弾はな。

俺がこわこわと壁紙にできた黒いシミに顔を近づけると……

壁にぼつかりと開いた二センチほどの穴からは、キラキラと瞬く冬の星空が覗いていた。

まさかの実弾発射に怖くなった俺は、缶ジュース銃をアイテムボックスにしまつて布団の中で震えていた。

「これ、やべーんじゃないの……」

もしかしてこの力、アイテムボックスとは全然違うんじゃないか。

そう思った俺は眠る事もできないまま、アイテムボックス（仮）の画面を弄り続けていた。

「おっー」

震えながら頭の中でアイテムの順番を移動させて整理をしていた時、唐突に画面に変化が起こった。

アイテムの画像の隣に説明文が浮かび上がったのだ。

コンビニで買ったお茶の隣には『カントリー ブレンド玄米茶』という文章が表示されていた。

お茶の画像から意識を外すと説明文はフツと消える。

「どうやったたら出るんだ？」

うんうん唸っていると、今度は菓子パンの隣に『カワザキ マヨタマソーセージ』と文章が出た。

どうやらアイテムボックスの画像を凝視すると説明が出るようだ。

さっきの缶ジュース銃を凝視すると、そこには『パラス 分子置換波射出装置』と書かれている。

「射出装置……？ 銃じゃないの？ もっと情報は……」

詳細情報が折りたたまれていたりしないのかと画面を弄くり回すと、説明文の下からボタンがポップアップしてきた。

「KEEP？ なんでここだけ英語なんだ？」

KEEPと書かれたボタンを凝視すると、黒色のボタンは赤色に変わった。

「うーん……わからん」

時計を見るともう三時だ。

俺は無理やり目を閉じ、アイテムボックスの画面も無視して思考を止めた。

心臓がバクバクとうるさかったが、バイト後の体はしっかりと疲れていたようで、俺はいつの間にか眠りに落ちていた。

恐怖のSF銃発射事件より一週間後の事だ。

うちの玄関にはネット通販で届いた訳あり品のミカンの箱が三つ置かれていた。

訳あり品とはいえ、六キロもミカンを買うと学生の懐にはちよいと痛い。

だが俺は、どうしてもこのアイテムボックス(仮)の秘密を解明せずにはいられなかった。

あまりにもよくわからない物をずっと使い続けるつてのは、正直怖いからな。

目を閉じて深呼吸し、俺はまず一箱をアイテムボックスに入れてKEEPボタンを押した。

そしてもう一箱をアイテムボックスに入れ、そのままにした。

最後にもう一箱を開け、中からミカンを五、六個取り出した。

これは俺が食べる分だ。

前回アイテムボックスにミカンを入れてからも五日ぐらいは無事だったのだから、多分こうして準備をしたってすぐに動きがあるわけではないだろう。

そうわかつてはいても、逸る気持ちは抑えられない。

俺はコボルトの女芸人二人組のコントが流れるテレビと、視界の隅に浮かんだアイテムボックスの画面を二窓で眺めながら監視を始めた。

ネットオークションで物を競り落とす時のような気持ちでドキドキしながらミカンを剥いて食べていると、なんとアイテムボックスの方にすぐに動きがあった。

「マジかよー！」

ミカンが一箱なくなり、代わりに見慣れぬ長方形のものが追加されていたのだ。

「なんだこりゃ……」

それはアイテムボックス画面では単なるカラフルな棒にしか見えなかった。

凝視すると『ヤパプリンカ(34g)』と説明が出る。

どういう事なんだ？

疑問に思いながら取り出してみると、机の上に色とりどりのプラスチックの棒のようなものが数十本出てきて乾いた軽い音を立てた。

手に持つてよく見てみるが、見た目はまるで麻雀の点棒のようだ。

表面に刻まれた見慣れない文字をスマホの翻訳アプリに読ませてみるが、残念ながら認識しないようだった。

「価値があるのかないのかもわからんな」

プラスチックの棒をアイテムボックスに移し、ついでに机の上にあつたミカンの皮もしまう。

ゴミなんかもこうして全部アイテムボックスにしまっておけば匂いもしないし、後でデカイゴミ袋の中に出すだけでいいのだ。

俺が編み出した横着なアイテムボックスの使い方だった。

もう一度アイテムボックスを確認するが、もう一箱のミカンはなくなっていない。



やはりKEEPボタンには物を留めておく効果があるようだった。

「おっ！」

謎が一つ解明した事に安堵したのもつかの間。

俺はまたアイテムボックスに見知らぬ物が入っている事に気づいた。

「今度は何だよ……」

なくなっていたのはさっき入れたミカンの皮。

そうして入ってきたものは……

『ポップテ 雄（冷凍）』と書かれた、氷漬けの茶トラ猫だった。

「つまりあんたが俺を解凍たすけてしてくれたんだ？ ありがとうね！」

人語を喋る茶トラ猫型の宇宙人。

そう言う他ない生き物が、俺の眼の前でコタツに座っていた。

俺の枕の上に重ねた座布団に尻を置いて天板の上にぴよこつと体を出したこいつは、アイテムボックス（仮）に入っていたあの氷漬けの茶トラ猫だ。

「まあ、自然解凍でだけど……」

「乗ってた船に海賊の次元潜航魚雷が着弾したつとこまでは記憶があるんだけどさあ。冷凍されてたつて事は、うちの身内から身代金取ろうとして取れなかつたんだらうね」

なんて事をニヤツハツハと笑いながら話す猫型宇宙人は、片手の肉球に湯呑を吸い付けるようにして持ち上げてお茶を飲んでいる。

一体どうやってるんだらうか？

「いやー、しかし助けられたのが汎用言語脳内転写インプリントで会話できる相手で良かったよ」

「インプリントって？」

「口頭言語つてのは思念言語に比べてパターンが少ないからさ、船乗りになる時にみんな脳に知識として焼き付けるんだよ。どこ行っても会話できるようにね」

「へえ〜」

そりや羨ましい、俺も大学で講義取ってる言葉だけでもいいから焼き付けてほしいもんだ。

「しかし自分で言うのもなんだけどさあ、よくこんな見知らぬ怪しいポプテを助けようとしたよね。しかもこの星、まだ銀河通商機構ギルドに加盟してないんでしょ？ ポプテ見るのも初めてだったんじゃないの？」

「見た目じゃ宇宙人かどうかとかわかんなかったし。背中の模様が前に飼ってた猫に似てたからさあ、なんかほっとけなくて……」

そうなのだ。

アイテムボックスの中の画像で見たときも、どことなく似ているなどは思っていたのだが……

実際冷凍状態の彼を外に出してみたらもう、大きさから毛並みから、背中にある火星みたいな丸い模様に至るまで。

最近まで実家で飼っていた、マーズという猫にしか見えなかったのだ。

その瞬間から俺はこの猫がどうしても他人、いや他猫とは思えなくなっていた。

実家のマーズは餌も食べられないぐらいに弱った後フラつといなくなつてそれつきりだったのだが、俺はこっちのマーズは解凍してからちやんと庭に埋葬してやろうと思っていたのだ。

ぶつちやけ解凍したら生き返つて風呂場でにやあにやあ騒いでいたのは完全な偶然だ。

「そのさあ、猫って何？」

「君……いやポプテ？　によく似てる動物なんだけど」

俺がスマホの待ち受け画面になっていた今は亡きマーズの写真を見せると、彼は肩をすくめて首を振った。

「これがポプテと似てるって？　全然違うじゃん」

「そっくりだろ」

「いやいや、無理があるでしょ」

冗談はよしてくれと言うように、猫にしか見えない生き物は目を細めて肩を揺らして笑った。

正直俺はポプテと猫で違うところを見つける事が難しいぐらいなんだが、本猫からすれば大違いなんだろうか？

「あんたさあ……あ、個体識別名とかある？ 原語類型的にそういう文化圏でしょ？」

「俺、川島翔坊<sup>トシボ</sup>」

「ふんふん、カワシマトンボね」

二十年もこの名前で生きてきてもう慣れたが、俺はいわゆるキラキラネームだった。

「そっちの名前は？」

俺が聞くと、彼は前足で髭をしごきつつ、鼻をヒクヒクさせて答えた。

「ポプテの個体識別情報は全部匂いに紐づいてるんだよな。銀河の中じゃ数も少ないから、他種族にも『ポプテ』以外の名前と呼ばれる事はほとんどないんだよ」

「じゃあ名前ないんだ」

「発音できるのはね。ま、トンボは好きなように呼んでいいよ」

「それじゃあマーズって呼んでいい？」

もしかしたら俺の知る猫のマーズよりも、目の前の彼の方が年上なのかもしれないが  
……

俺にはもう、彼が猫のマーズの生まれ変わりにしか思えなかったのだ。

「トンボが飼ってたっていうポップテ似の動物と同じ名前か、いいよ」

彼は机の上に置いていたスマホを小さな手に持ち上げ、待ち受け画面をしげしげと眺めた。

「ポップテには『毛皮十ペン』って言葉があつてね、同じ魂は同じ毛皮で十回生まれ変わるっていうんだよ。トンボの飼ってたマーズも次はポップテに生まれてくるかもね」

「へえ〜」

「あ、そうだ、これって情報端末でしょ？ 星図出してくんない？」

「星図って?」

「銀河系の地図だよ、銀河通商機構未加入の辺境だったってさすがにそんなぐらいはあるでしょう?」

俺がスマホで銀河系の星図を検索してマーズに見せると、彼は肉球で器用に画面を操って渋い顔をした。

「これもしかして……この二次元図が一般的な星図?」

「そういうのしか見たことないけど」

「一つ聞くけど、仕事でも旅行でもいいんだけど、宇宙って行ったことある?」

「ない。昔は月にまで行ってたらしいけど、最近は宇宙開発も下火だって聞くから個人が宇宙に行ける日はまだまだ遠いだろうね」

「軌道上に宇宙港とかないの!? 地上からの短距離転移装置は!」

「そういうのは地球じゃあまだまだお話の中の事だなあ」

「マジかよ……」

マーズはわかりやすく落ち込んで、机の上うつ伏せで寝転がった。

呼吸とともに上下に動く毛皮を優しく撫でると、手を尻尾ではたかれた。

「もしかしてこの星、銀河通商機構未加入どころか……異星人との邂逅も果たしてない？」

「そうだけど……」

「マジかよっ！」

叫びと共にマーズの尻尾はピンと天を突き、しなしなと力を失って机に垂れた。

「……トンボはさあ、なんで異星人にあんまり驚いてないの？」

「驚いてるよ」

「宇宙進出直前ぐらいの未開地の人間に捕まったら、解剖されて標本にされるって聞いてるんだけど」

そういう認識も二、三十年ぐらい前だったらあながち間違いとは言えなかったのかも  
しれない。



「まあポプテって種族は猫にそっくりだしさ、それにダンジョンができてから異種族の人達はいっぱい地球に来てるから」

「そう言いながらテレビの電源を付けると、ちょうどやっていたお昼のワイドショーの狼<sup>ワウルフ</sup>人のコメンテーターが映る。

「マーズはごろんと横を向いてテレビに顔を向けた。」

「彼は何星人？」

「ダンジョンの向こうから来た異世界人だよ。帰化した狼<sup>ワウルフ</sup>人の米山フガジさん」

「こういう人がいっぱいいるからびっくりしなかったって事？ あっ！ 彼らの世界に宇宙船は……」

「うちの世界が一番科学技術が進んでるって話だったけど……」

持ち上がりかけたマーズの尻尾は再びぺたんと机に落ちた。

「そーいや俺って、どうやってこの星に来たの？」

「そりゃあ俺のアイテムボックスの中に……」

「アイテムボックス？」

俺がマーズがここにやってくる事になった経緯を最初から詳しく説明し始めると、コタツに入り直した彼はそれに静かに耳を傾けた。

アイテムボックススキルの発現から様々な実験、銃の暴発事故からマーズの解凍に至るまでを話す途中、彼は俺に一切の質問をしなかった。

そうして全てを話し終えた時、マーズは難しい顔で目を閉じ、額を肉球で抑えていた。

「まあだいたいこんなところかな」

「トンボのそれ、アイテムボックスって異能スキルじゃないよ」

「えっ？」

薄々そうじゃないかとは思っていたが、やはりそうだったのか。

「それは多分、銀河キ通商ル機構のお偉いさんや銀河キ総合ラク商社ンの創業者一族が持つてるって  
いう……超絶ヤバい異能……こつち風に言えばレアスキルかな？ それと同じものだ  
と思う」

「それって？」

「詳しいことは知らないけど、そのスキルを持つ者だけがアクセスできる市場マーケットがあるとか……」

「俺のは入れといた物が別のものになっただけなんだけど……」

「じゃあトンボのスキルは制限版なのかもね。出品だけができる……フリーマーケット……いや、ポプテの死体捨てに使われるような場なら、ジャンクヤードかな？」

ジャンクヤードか……どうせなら好きな物が買えるスキルなら良かったのにな。

それならコツコツやっていけば、いつかマーズに宇宙船を買ってやれたかもしれないし。

「俺の他に交換された物ってどんな物だった？」

「えっと、この銃と、この点棒」

「銃に……点棒……？　これ、マジ？」

マーズは点棒を肉球にくっつけて持つと、嫌そうな顔でそれを見た。

「銃の方はよくわからんけど、これパハブリンカでしょ?」

「ヤパブリンカって書いてたけど」

「なお良くない、クソヤバイ麻薬だよ。銀河一般法では所持だけで死刑。一生ジャンクヤードに入れてた方がいい」

「げっ!」

俺は急いで点棒と銃をジャンクヤードの中に片付けた。

「これでわかったよ。トンボのジャンクヤードにアクセスしてるのは海賊だ」

「海賊!」

「ああ、偽装銃に麻薬に、身代金の取れない冷凍ポプテ。いかにも海賊が持つてそうな物ばっかりでしょ?」

言われてみればたしかにそうだ。

「でも逆に言えば……」

マーズはニヤリと笑って短い短い指をピンと一本立てた。

「海賊なら海賊船も持つてるって事でしょ?」

「海賊船!」

宇宙の海賊船を想像して、俺はドキツとした。

小さな子供の頃の夢を思い出したのだ。

あの頃の俺の夢は、左手に仕込まれたマシンガンで敵を倒し、宇宙の美女のピンチに颯爽とかけつける、カッコいい宇宙海賊になる事だった。

人は夢を忘れて大人になる生き物だ。

だが、その夢を本当には忘れる事ができないのもまた、人という生き物だった。

「ねえトンボ、そのうちでいいからさ、もし船が手に入ったら最寄りの銀河ギ通商ル機構ド加盟星まで乗つけてよ。地元に戻れたらお礼に美味しいもん死ぬほど送るからさ!」

「あ……ああ、いいよ」

マーズの肉球とギユツと握手を交わした。

だけど、俺は別にお礼なんてなかったって送ってやるつもりだった。

喋る猫だろうと、異世界人だろうと、俺には彼が川島家の愛猫マーズの生まれ変わり  
としか思えなかったからだ。

それとは別に海賊船にも興味津々だったが。

「そーいやさあ、この星の人らって何食ってんの？ 俺どうも腹減っちゃって……」

マーズは小さなお腹を手で抑えながら、すまなさそうな顔でこちらを見上げた。

「逆にポプテって何か食べれない物あるの？ 地球の猫はネギとかチョコとか駄目なん  
だけど」

「まあ船乗りは何でも食うよ。でも、石食うのは避けたいね」

冗談のつもりなんだろうか、マーズは得意げに口の端を曲げながら言った。

まあ猫に見えるとはいえ宇宙人だしな。

一回人間と同じ物を出してみ、駄目なら猫缶でも買ってくればいいか。

「袋ラーメン……炭水化物ならどう？」

ジャンクヤードから取り出した袋麺をマーズに見せると、彼はフンフンと鼻を鳴らしながらパッケージ裏の成分表を読んだ。

「酵母エキスつてのが何なのかわかんないけど、多分これなら転化装置なしでも食える。もちろん……炭になってなきやだけどね」

「またも得意げにそう言った彼をコタツに残し、水を入れた鍋に火をかけて換気扇を回す。」

「どこからともなく冷たい風が流れ込んできて、俺は裸足の右足を左足で踏んづけて暖を取った。」

「あ……マーズ！ 醤油と豚骨どっちがいい？」

「美味しい方で」

豚骨味の麺を鍋に入れ、シンクの上の窓をちよつとだけ開けると、外では太陽が隠れ

て雪がちらつき始めていた。

「ああ、今日バイトどうしよっかな」

雪を伴った風が吹き込んでくる窓を閉じると、また別のところから風が吹いてくる。

家賃四万、1LDK、隙間風の吹きまくりの貧乏アパートで。

ジャンクヤード使いの俺と宇宙猫のマーズ、一人と一匹の奇妙な暮らしはこうして始まったのだった。



## 第2話 焼き芋と猫とバリア布

「形はレーシヨンみたいだけど、なかなかいけるね。中の肉もいい感じ」  
「これ、中に入ってるのはタコっていう海の生き物なんだよ」

猫型宇宙人のマーズを伴って役所に行ってきた帰り道、俺達はたこ焼きを食べながら雪降る町を歩いていた。

マーズの仮帰化申請、というか仮国民登録といった感じだろうか。

成人男性の俺が後見人になる事によって、マーズを日本に住んで働けるようにしてもらってきたのだ。

異世界と地球がダンジョンで繋がってからこれまで、幾度もの混乱を乗り越えてきた日本の役場の異世界人課の手際は早く。

良く言えば融通無碍、悪く言えばガバガバな対応で全てを爆速でこなしてくれた。

なんせ二十年も前から毎日毎日、国交も結んでない国から代わる代わる人がやって来ては住み着いたり帰ったりするのだ。

いちいち全部精査してはいっつまでたっても仕事が終わらないのだろう。

ブラックリストに入っていない国や種族、危険そうに見えない異世界人はほとんど素通りで仮帰化申請を通してようだった。

国内にはまだ見つかっていないダンジョンも多いしな。

地方では自分たちの身を守るために自警団ワイジラントを組んで異世界人狩りをやっている所もあるそうだが、都会では概ね異世界人を受容して税金を取る方針で固まっていた。

「そんでトンボ、ジャンクヤードの動きは？」

「ああ、昨日交換されてた謎の部品は今日また謎の布と交換されてたよ」

俺のスキル『ジャンクヤード』はヘンテコなスキルだ。

物々交換のできる無人販売所のようなもので。

何かを入れてしばらく放っておけば、運次第で別の物と交換されているのだ。

ミカン一箱から始まった物々交換はだいたい半日に一度ぐらいの間隔で進んでいた。

ミカン一箱 ↓ 麻薬 ↓ 宇宙の貨幣 ↓ 食料用プラント（の部品）と来て、今

は謎の黄色い布になっている。

「やっぱり麻薬ヤスプリンガの後に交換されてた金の量から見ても、多分トンボのスキルは等価交換

なんだと思うんだよね」

「等価交換ねえ、正直宇宙人の価値観は全然わかんないんだけど……まあ損してないんじゃないか」

ていうか等価交換って事は、ミカンの皮と交換されたマーズはゴミと等価だったって事になっちゃうけど……

さすがにミカンの皮と人一人が本気で釣り合うって事はないだろう。

そこらへんはもしかしたら、スキルを持った人自身の価値基準が関わってくるのかもしれないな。

そんな事を考えながらザクザクと音を立てる雪道を歩いてみると、隣のマーズが「あっ！」と声をあげた。

「トンボトンボ！ あれ何？ なんか音出してるけど！」

ピヨコンと尻尾を立てたマーズが指差した先には、客引きの音声を流しながら低速走行する石焼き芋のトラックがあつた。

「ありや石焼き芋だよ。甘い芋」

「芋が甘い!? なんだそりゃ!」

「食べてみる? 高いから半分こだけど」

「食べたい食べたい!」

二人で走って焼き芋屋を追いかけ、一本四百円もする金色の焼き芋を半分に割って分ける。

マーズは甘党なんだろうか、昨日食べたラーメンや今日食べた焼きそばやたこ焼きにはあまり興味なさげだったのだが、焼き芋の甘さにはつぶらな瞳を見開いて大喜びしているようだった。

「あんまあく! なんだこりゃ!」

「おお、こりや当たりだ、甘いなあ」

「兄さんわかっているねえ。当たりも当たり、大当たりよ。うちは芋にこだわってるのよ。なんつったって紅はるかだからな」

焼き芋に齧りつく二足歩行の猫が物珍しかったのか、焼き芋屋のオッサンが窯に薪を

足しながら得意げに話しかけてきた。

「猫の兄さんは最近日本に？」

「ああ、つい最近ね」

「日本は焼き芋に限らず色んな美味しいもんあるからさ、良かったら楽しんでつてくれよな」

「楽しむ楽しむ！」

本当に美味そうに芋を食べるマーズに気を良くしたのか、焼き芋屋のオッサンはちっこい芋をサービスにくれて去っていった。

「トンボ、これジャンクヤードに入れといてよ。後で食べるから」

「ああ、いいよ」

俺がちっこい焼き芋を収納すると、マーズは持っていた芋を口いっぱい頬張ってゴロゴロと喉を鳴らした。

改めて見ても本当に猫そのものだな。

俺が芋を食べながらマーズの喉の音を聞いていると、またどこからともなく移動販売の音楽が聞こえてきた。

「あつ！ また音鳴らしてる車が来た！ あれもなんか甘い物売ってるの!?!」

「ありや灯油……燃料の移動販売だ」

大興奮のマーズが見つめる灯油の移動販売車の反対側からは、低いベース音を響かせたVIPカーがやってきた。

「あっちの背の低い車は!?!」

「ありやヤンキーの車」

今日はじめて町に出てきたマーズは、色んな物に興味津々なのだった。

「うーん、こりゃ凄いな」

夜も更けたり午前零時。

マーズは俺がバイト先の廃棄のピザ生地で勝手に作って持って帰ってきたピザを齧りながら、フンフンと鼻を鳴らして片手の肉球で黄色い布を揉んでいた。

この布は俺のスキルのジャンクヤードでミカン一箱から四回の交換で辿り着いた物だ。

一応説明では『力場伝導性熱結合ポリジ布(620%)』とあったが、正直意味不明だ。

「それって何に使うもんなの?」

「こりゃ力場を伝導する布なんだけど、それだけじゃなくてブースターにもなるって代物だよ」

余計にわからなくなったな。

俺はトマトソースだけのピザを第三のビールで流し込み、もう一度聞いた。

「どう使うわけ?」

「まあ待って、力場ってわかる?」

「わかんない」

「引力ってあるでしょ？ その逆が斥力と言って……」

「待った待った、どう使うのかだけ教えてくれればいいから……」

俺が解説を遮るとマーズはちよつと困った顔をして、こちらにグツと布を突き出した。

「これを身に纏えば強力なバリアが張れる……ただしバリア発生装置がないから今は使えないって感じかな」

「あ、そういう事……」

「正直これは実用性があるから、残しといたほうがいいと思うよ」

「じゃあ残しとこう」

詳しく説明してくれようとしたマーズには申し訳ないが……

俺はどうも昔からゲームのややこしい説明とかが苦手で、全部飛ばしてしまうタイプなのだ。

とりあえず布も残した方がいいならば残しておこう。

交換用の冬ミカンもまだあるしな。



「しかし、今回は当たりが来たからいいけどさ。こうやって交換待ちしても同じぐらいの価値の物がグルグル回るだけだろ？」

「たしかに」

マーズは小さな指でこちらを差し「そこでだ！」と続けた。

「いい感じの物が来たら、こつちの金に変えてみない？」

「宇宙の物を地球で売ってこと？」

「まあこんだけ技術力が違ったら売って金にできるような物はなかなかないかもしれないけどさ、金儲けの種ぐらいなら色々あると思うんだよ。この布とか」

小さな肉球が黄色の布をちよいと摘んだ。

「まあたしかに、金にできるなら言う事ないけどさ。たまには具のあるピザも食べたいし」

俺が上にトマトソースしか乗っていない廃棄品のピザを掲げてそう言うと、彼は深く頷いた。

せつかく便利な力があるんだから、もう少しいい生活がしたい！ とは思う、正直な話。

「あつちの物がこつちの金にできれば、ジャンクヤードでももつともつとデカく交換できるし……金が入ればさ、焼き芋だって一人一本食べるわけでしょ？」

「焼き芋ぐらい……とは言いたいけど、たしかに焼き芋屋見かけるたびに一本づつ食ってたら生活キツイかもな」

「この変な味の酒も飲まなくてよくなるしね」

マーズは俺の第三のビールを勝手に全部飲み干して、変な顔をした。

「そう思うなら飲むなよ！」

「ま！ ま！ とにかくさ、せつかくいい感じの力があんだからさ、セレブに！ とは言わないけど、食うに困らないぐらいにはしようよ。仕入れはトンボ、目利きは俺で……」  
「そんでもって目標は宇宙船だろ？」

「昨日は気軽に言っちゃったけどさあ、本当にいいの？ 宇宙船は高いよ？」  
「俺だって一生に一度ぐらいは宇宙に行ってみたい、目標は宇宙船だ！」

別に海賊行為する予定もないけど、かつこいい海賊船ならなお良しだ。

ぶっちゃけ宇宙船が手に入ったって、一人で宇宙に行く勇氣も知識もないしな。

マーズはプロの船乗りだって言ってたし、動かし方ぐらいわかるだろう。

「改めてよろしく、マーズ」

「おお！ 稼ごうか！」

深夜零時のI.L.D.K、コタツ机の極貧ピザと第三のビールの上で、俺と猫型宇宙人は二度目の握手を交わしたのだった。

「あ、そーいやトンボ、昼間の小さい芋出してくれよ。デザートにするから」

「ああ……あ、ごめん交換されてる」

「えっ!? キープしといてくれなかったのかよ!!」

「いでっ！ ごめんって！」

手のひらに突き刺さったポプテのマーズの爪は、猫のマーズの爪と同じぐらい痛かったのだった。

## 第3話 カニチップスと猫と銀河警察

「甘い！ 何だこれ！」

「何って……温州みかんだが……？」

朝日射し込む部屋の中、コタツに入った俺と猫型宇宙人はミカンを食べていた。

昨日の夜間違えて交換に出しちやった焼き芋の代わりというわけではないが、お詫び兼朝ごはんとして出したミカンに、マーズは何やら大感激しているようだった。

「これ砂糖足してるよね？」

「足してないよ。木からもうだままだと思う」

「なんでこんなに甘い果実が木になるの？」

「ミカンってこんなもんだと思うよ」

普通の猫は柑橘類が嫌いなのだが、どうも宇宙の猫はそういうわけでもないようだ。

マーズは目尻の下がり切った表情で、皮を剥いたミカンを丸かじりしていた。

「これを一箱も出したんでしょ？ そりゃあ640万リンドはするわなあ」

「その640万……リンドだっけ？ ってどれぐらいの価値なの？」

「俺の去年の年収がだいたい600万リンドぐらいかな」

「えっ!? ミカン一箱がマーズの年収より高いの!?!」

マーズは口の周りをペロリと舌で拭い、わかってないなあと右手の小さな指を左右に振った。

「この味ならそんなぐらいいは……いや出す奴はもつと出すね。俺も色んな星回ったけどさ、こんな上品な甘さの果物食べたことなかったもん」

「そんなに美味いかな？ これでも訳あり品で、一箱で俺の時給三時間分ぐらいだよ？」

「貿易つてのはそんなもんだよ。普通、距離つてのは離れれば離れるほど物の価値が高くなるのさ」

「そんなもんか……」

「まあ地元の味つてのはどうしても食べ慣れちゃうからね。本当のありがたみつてのは、星を離れてみなきゃわかんないもんだよ」

「マーズの星は何か名産品あったの?」

「カニの殻を油で揚げたお菓子が有名だよ。最近ギャラクシーマーケットは銀河総合商社の流通にも乗ってて各星系で食べられてるんだぜ」

マーズはミカンの汁まみれの鼻を高々と上げ、毛並みのいい胸を張ってそう言った。ティッシュで顔を拭いてやろうとすると、ニヤツ! と手を尻尾ではたかれてしまった。

しかし、蟹の殻の揚げたやつ……本当に美味しいんだろうか?

大学で講義を受け、徒歩やバイクでピザ屋のバイトをこなし、発売前の新作ゲームのために旧作をやり直したりしているとあつという間に日々が過ぎる。

ここ一週間ほど、マーズは日本に住む申請の続きのために役所に行ったり保健所に行ったりと忙しそうだったが、昨日ぐらいにようやく一段落ついたようだ。

俺も一応平凡かつ忙しい日々の合間を縫って、スーパーや道の駅で買ってきた色々な物をジャンクヤードに出品したりしていた。

交換が起きるたびにマーズに価値の確認を取ってはいるのだが、その週の成果をまとめて日曜日の夜に今後の方針を決める会議をやる事になっていた。

「さてと……」

「……ん……おく、やるう……？」

俺がゲーム機を切ってチャンネルをテレビに変えたことに気づいたのか……

首までコタツに突っ込んで、二つ折りにした座布団を枕にして爆睡していたマーズはしよぼしよぼした目を瞬かせながら起きてきたようだ。

「ちよっと待ってね」

晩飯のもやし鍋の残りを台所に下げ、お茶のペットボトルを持って戻る。

「この国、水は美味しいのにペットボトルのお茶ってのはなんでこんな味なんだろうね」

「そんなにマズい？　ちゃんと用務スーパーで買ったやつだよ」

「俺もだんだんわかってきたけど、そのスーパーってマジで激安のところでしょ？」

「大丈夫大丈夫、外食産業も頼りにしてるスーパーなんだから」



釈然としない猫の顔というレアな物を見られた俺は、意気揚々と机の上に物を取り出した。

「まず今朝から動きがあつた分として、これなんだけど……」

俺が取り出したのは、ランタンのようなものだ。

スイングする持ち手から本体が伸びていて、なんだかいかにも光りそうな見た目をしている。

説明は『ユオ 空間転写装置 銀河ネットヤカタ別注モデル』だが、例によって全くわからん！

これは柿一個 ↓ 断熱材 ↓ 宇宙船用塗料 ↓ 絵画 ↓ ランタン と交換が進んだものだ。

どうも交換も必ず半日に一回行われるというわけではなく、物によって時間が違うようだ。

「あ、これ実家にあつたわ」

「え、そうなの？」

「古い普及型のホロヴィジョンだけど、ベストセラー商品だし一個持つといってもいいんじゃない？」

言いながら、マーズがちよいとランタンを肉球で押す。ランタンはグラグラと揺れるが全く倒れる様子がない。

「ほら、安全機能付きで子供が触っても大丈夫なの」

「へえ。何に使うの？」

「あれといっしょ」

マーズは部屋のテレビを指差した。

なるほど、宇宙のテレビか。

とりあえず確保。

「そんでもって次はこれ！」

俺が取り出したのは、長方形の黒い電源アダプタのような物だ。

これはずーっとジャンクヤードに入れっぱなしにしていた雑多なゴミのどれかと、いつの間にか交換されていたようだ。

『ナラカパ イリキWZ お楽しみ 詰め合わせ』と書いてあるが、マジでわからん。

「あー、こういうのあるよね」

「え？ なになに？ 何に使うもの？」

俺が聞くと、マーズは苦笑いで頭を掻いた。

「地球にあるのかわかんないけどさ、古いゲームとかをライセンス取らずに勝手に詰め合わせて売っちゃうの」

「いやそれ地球にもめちやくちやあるよ」

「あ、そうなんだ？」

「ていうかゲーム!? 宇宙のゲームってどんなのか物凄い興味あるんだけど！ あのラントンのテレビに繋いでやれないの!?!」

「地球のゲームみたいにコントローラーとかないけど、トンボって思考操作できる?」  
「できるわけないじゃん……」

「俺もできないんだよね」

俺は机の上に突っ伏した。

宇宙のゲーム、やってみたかった……

「それよりさ、他のは動かないの？」

「あとは今朝話したまま動きなしだね」

「まあでも今週はデカイ成果が色々あったからいいか」

そう言いながら、マーズは肉球を上に向けた手をちよいちよいと動かす。

はいはい。

俺が机の上に三つの物を取り出すと、彼は満足そうにフンフンと鼻を鳴らした。

「まずは力場伝導布」

「バリア布ね」

力場の伝導率が凄くて力場ブースターにもなるという謎の黄色い布だ。

「それと、マスターチャンネル安定化マオハ2Kg」

「結局それって何なの？」

机の上に置かれた、青紫に発光する長方形の板を指さして聞くと、マーズは大げさに手の平を上げて肩をすくめた。

これはストックしていたミカン一箱 ↓ 首が三本ある人用のアクセサリ ↓ ヤバそうな記憶媒体 ↓ 『純マオハ化物質 100%』と交換されてきたものだ。

「だから地球で言う金塊みたいなもんだって、今使い道はなくても貨幣リンクドが通用しない相手が出てきた時にこれで取引できるの」

そりやあいけど、どうせならすぐ金になるものの方がいいなあ……

とは思うが、青紫色の延べ棒を嬉しそうに撫でるマーズにはそうは言いづらいのだった。

「あと、今週の目玉は何と言ってもこれだよな、ギョラフシーボリス銀河警察横流し品の生体維持装置」

名残惜しそうに延棒から手を離れたマーズがポンポンと叩くヘッドホンのようなそれは、ところどころ塗装が剥けていて謎の文字がステンシルで吹き付けられていた。

「そういうえばそのステンシルの文字って何て書いてあるの？」

「893—33—4 オイカゲって書いてある、元の持ち主の名前じゃない？」

「宇宙海賊から流れてきたって事は……」

「ま、殉職か横流しかだけど。生命維持装置が残る死に方ってかなりレアだから、多分横流しでしょ」

「だよね、そうだよね！」

宇宙の幽霊がくつついてたらおっかないぞ。

塩じゃあ成仏してくれないだろうしな。

「とにかく、これがあれば力場伝導布と組み合わせて力場が張れるってわけだ。持つて  
るねえ、トンボは」

「それ手に入れた時も言ってたけど、本気でやるのかよ？ 迷宮潜り」

「いいでしょ？ 役所の隣にある図書館の情報端末で色々調べただけだし、多分これさえありやあボロ儲けできるよ」

マーズは背を伸ばして首をポキポキ鳴らしてから、ビツと俺を指さした。

「トンボさあ、男には命の張り時つてのがあるんだよ。トンボが駄目なら、俺だけでもやるよ」

猫のマーズの真剣な目が、男としての俺を見据えていた。

彼は猫だが、宇宙の船乗りでもあるのだ。

わかつてはいた事だが、単なる学生の俺とは肝の据わりが全然違っていた。

「待て待て待て、ほんとに戦わないんだな？ 奥に潜って行商するだけなんだな？」

「そりやそうだろ。トンボは学生、俺だつてただの船員さ。銃の撃ち方は知ってても、戦いなんかまともにできやしないよ」

マーズはビビりまくる俺に「でもさ……」と続けながら、小さな猫の手で机をトンと

叩いた。

「海賊のビームランチャーや火炎榴弾すら防ぎ切る銀河警察ギャラクシーポリスの力場バリアに守られた上で、自衛しながら物資を輸送するぐらいならできると思わないか？」

「迷宮ぼうけんしや潜りの連中は金もたんまり持つてそうだしなあ……」

怖いのは、もちろん怖い。

めちやくちや怖い。

でもジャンクヤードの実験のために色々買ったせいで、俺は今月ちよびつとだけクレカのリボ払いにも手を付けていた。

正直、現金が稼げるのならばありがたいというのも事実だった。

「行くか行かないかはトンボが決める事だけどき……俺は明日の朝、行ってくる」  
「待った待った、明日は第二外国語の授業があるから、明後日にして」

うん、最近は大学のサークルなんかでもレジャー気分でダンジョンに潜ってるらしいし、そんなに深くまで行かなければ大丈夫だろう。



多分、きつと、恐らくだけど。

「よし、決まりだな！」

にかりと笑ったマーズがお茶の入ったコップをこっちに掲げたので、俺もお茶のコップを持ち上げてそれに合わせる。

こういうのって、宇宙でもやるんだ……

不思議に思いながら見つめた透明のコップの向こう側では、ちよつと横に太って見える猫のマーズが、マズそうな顔でお茶を飲み干していた。

## 第4話 迷宮と猫と抱っこ紐

「ひっ！ なんかいいる、なんかいいるよ」

「いても大丈夫だって、<sup>パリア</sup>力場があるんだから」

別にわざわざサボらなくたってもう年末ですぐに大学も冬休みだというのに、俺はわざわざ講義をサボって冷たい地下の底にいた。

「ほんとに、ほんとにだいじよぶ？」

「動く物を弾くように設定してるから、矢でも鉄砲でも、真っ赤になったカミソリ蟹でも大丈夫だって……ビビって泣くのはいいけど鼻水つけないでよ!？」

俺は今、ヘッドホン型のギアを装着して黄色い布をローマ人のトーガのように着こなし、その上からマーズを収納した動物用の抱っこ紐を装着していた。

控えめに言っためちやくちや不審者だと思う。

だってこれまでですれ違った人、みーんなこっちジロジロ見てたもん。

「もうここらへんでいいんじゃないの?」

「まだニキロぐらいしか来てないよ、情報ではもう五キロ先にでつかい広場があるらしいからそこまで行こう」

「うー、自転車か何か持ってくればよかった……」

「意外と地面は整ってるけど、段差も多いし無理があるんじゃない?」

ダンジョンにも繋がってる異世界によって色々タイプがあるらしいのだが、ぶつちやけ俺の家から近い東京第三ダンジョンは自然洞窟とほとんど同じだった。

ごつごつした岩肌のダンジョンの中には大量の照明が吊るされているとはいえ、ぶつちやけはまだまだ薄暗くて正直怖い。

バリアで防げるとはいえ獰猛な野生動物、いやダンジョンの中の生き物は魔物と言われてるんだったか……がむちやくちや飛びかかってくる。

たいていの魔物はバリアに弾き飛ばされた時点で逃げていくのだが、たまーに勇猛果敢に挑みかかってくる奴もいて、そういうのは必死で物干し竿で殴ったり石を投げつけたりして撃退していた。

「またあの犬来たらどうしよう、十回ぐらい棒で叩いてもピンピンしてたよな」

「トンボ銃持ってたろ、あれでやっちゃえよ」

「人に見られたらどうすんだよ、日本には銃刀法つてのがあってだな……」

「あの銃、偽装されてるから宇宙じゃ違法だけど、地球なら問題ないでしょ。実弾が出ないんだから」

「そ、そうかな……?」

「そうだよ、でも地面に向けて引き金引き続けるとマントルごと星削っちゃうから気つけてね」

「ひっ！ やっぱヤバい銃じゃん！」

宇宙の物は全体的にヤバすぎる。

できるだけ頼らなくてもいいように何か対策を立てようと、俺は心に誓ったのだった。

都合十キロ近くの道のりを歩いたり登ったり降りたりして辿り着いたダンジョン内の広場は、なんとも寒々しい感じだった。

体育館ぐらいの広さがあるのに、いるのは座り込んで休んでいる五人組と三人組の

パーティー二つだけ。

二組ともきちんと戦闘服を着て、しっかりとしたクロスボウや槍を携えた人達だった。

「トンボ、挨拶に行こう」

「あ、ああ……」

まずは近くにいた五人組のパーティーに近づこうとすると、まだ三メートルもある距離で全員が立ち上がって武器を構えた。

「ひいっ!」

「おいおい、こっちは丸腰だよ兄さんたち」

ビビりまくる俺をよそに腹のマーズが陽気な感じで話しかけるが、相手の表情は全く変わらない。

「何か用か?」

リーダーなんだろうか、プレートキャリアをつけた眼鏡の男がクロスボウを地面に向けたままそう言った。

「俺達物持ちでさ。飯困ってないかい？ 飲み物は？ タバコもあるよ」

「必要ない。向こうへ行け」

「へいへい」

ポンと抱っこ紐の中でお腹を叩かれたので、俺は五人組にペコペコ頭を下げ、後ろに下がった。

「あっちの三人の方にも行こう」

「マジかよ」

結局三人組のパーティにもけんもほろろに追い払われ、俺達は広場の壁を背にして座り込んだ。

壁には『食料、タバコ、医薬品余ってます』とでつかい字で書かれた看板を立ててあ

る。

実際問題、俺達みたいな商売の仕方は明るみに出たら即アウトなのだ。

『余ってます』なんて御託が通じるとも思わないが、一応業として売ってるわけじゃないよっていうせめてものエクスキューズとしてそうしてあった。

昨日の夜に二人で一先懸命ペンキを塗って作った看板だ。

こういう資材や商品の資金は、子供の頃から親が俺名義で貯めてくれていた定期預金を解約して工面してきたのだ。

正直、小心者の俺にとっては結構な背水の陣だった。

「マーズ、俺心が折れそうだよ」

「だから最初の一週間ぐらいは誰も寄り付かないって最初に言ったら。商売ってのは信用を作るまでが長いんだよ」

「あと尻も冷たいし痛い」

「おお！なるほど。そういう需要もあるって事だね」

「う、腹も痛くなってきた……」

「そうそう、下痢止めも需要があるんだよ。やっぱ實際来てみなきゃわかんなかったろ？」

震える手で下痢止めを取り出す俺の腹の前、暖かそうな抱っこ紐の中で猫のマーズは得意げにそう言ったのだった。

週に四日程度のダンジョン通いとはいえ、あの広場に店を構えて早二週間。

俺達はダンジョン行商では一円も稼げないまま、無為な時を過ごしていた。

たまに品揃えや金額を聞いてくる人もいたが、購入に至る事は皆無。

だがしかし、金は稼げなくても毎日ダンジョンに潜ってりやあ環境には慣れるもんで。

最初は暗がりや魔物にビビりまくっていた俺でも、もうダンジョンに潜る事自体はそれほどストレスに感じなくなっていた。

ぶつちやけバリアが強すぎる、ビビるだけ損だった。

今は行き帰りの道では物干し竿に百均の包丁をボルト止めした槍でもって、自分で獲物を仕留めるぐらいになっていた。

俺とマーズは冒険する気はないとはいえ東京都ダンジョン管理組合キルドに登録した正会員だから、その気になれば魔物の死体は買い取ってもらえたのだ。



これがそこそこのいい値段で売れる事も、俺の精神の安定に一役買っていたのだった。

「あーあ、このまま魔物狩りになっちゃおうかな」

「あー、トンボがいいならそれでもいいけどね」

「いや、やだ」

もはや定位置となったダンジョンの広場の壁の前、俺はリサイクルショップで買ってきた絨毯の上にオフィスチェアを置いてくつろいでいた。

マーズは腹の抱っこ紐の中で俺のスマホにダウンロードした映画を見ている。

最近は何んな地球の娯楽に手を出しているようで、昨日は世界的に有名な『スペースウォーズ宇宙大戦』を見て「これ宇宙に持ってったら売れるね、シニールで」とか言っていた。

俺も頭に巻いたヘッドライトでいつものように大学の教科書を読んでいたのだが、そんなマツタリとした空間に常ならぬ大声が響き渡った。

「箕田がやられた!! F9地区バンデイトドモンキに蛮族スベイスウオーズが出た!!」

「血が止まんねえんだよ!」

広間に数組いたパーティ達が立ち上がり、大きな声の方に移動していくのを感じる。

「トンボ、仕事だ、看板持って」

「え……？ うん」

俺は急いで椅子と絨毯を片付け、看板を担いで声の元へと走った。

「頼む！ 手伝ってくれ！ 箕田が死んじゃう！」

足から出血している男が寝かされている横で、プレートキャリアをつけた眼鏡の男が血走った目でそう喚いていた。

「落ち着け吉田！ まず血を止めなきゃ」

「頼む！ 誰か！ こいつ今度子供が生まれるんだよ！」

周りにいる人達が錯乱する男をなだめ、出血した男の服を手早く脱がしていく。ぱっくりと切れた足からはとめどなく血が流れているようだ。

人の傷口をこんなにはつきり見るのは初めてだから、正直キツいな。

「兄さん達、何か入り用かい？」

そんな混沌とした空気の中、マーズがいつもの調子でそう話しかけた。  
錯乱していた眼鏡の男はマーズを見て、俺を見て、俺の掲げた看板を見た。

「あ、血……そうだ、包帯！ 包帯をくれ！」

「あー、あつたら水と消毒液も」

「傷縫わなきゃなんないからな」

「医療用ホッチキスがあるけど？」

「ホッチキスは使ったことないなあ……」

眼鏡の男以外はみんな意外と冷静だ。

こういう事には慣れてるんだろうか？

マーズもめちやくちや冷静で、商品の売り込みをかける余裕まであるようだった。

「いい！ いい！ 血が止まるんなら何でもくれ！ 箕田に年を越させてやってくれ！」

先方からOKが出たので、俺は足元に商品を取り出して置いていく。

「先にお金、そっちの地面に置いて」

マーズの言葉に眼鏡の男はもどかしげにプレートキャリアを外し、懐から取り出した財布を地面に放り投げた。

「かつ、金っ！ 置いたぞ！」

「はいどうぞ〜」

マーズが気の抜ける調子でそう言うのと同時に俺は商品から離れ、そこに殺到する眼鏡の男と入れ替わるようにして、地面に落ちた財布を拾い上げた。

「えー、水4L、オキシドール、包帯にサージカルテープ、医療用ホツチキスとハサミ……」

実費、輸送費、たまたま持つてた費も合わせて二万円弱つてとこだな……」

「じゃあ二万円貰って、と……」

「トンボ、ちと貰いすぎだから、消炎鎮痛剤もつけてあげようか」

「じゃあそれも出して、と……」

俺は消炎鎮痛剤の錠剤を一回分取り出して、眼鏡の男の財布に重ねた。

「あ、物干し竿つて連結式だっけ？ 今両方ある？」

「あるけど」

「絨毯と組み合わせれば担架になるから、それも使うか聞いてみよう。包丁外しという「おいおい、何でもかんでも売りつけるんだな」

思わず笑いながらそう言ってしまった俺を見上げ、マーズは口ひげを持ち上げるようにしてニツと笑う。

そうして小さな手で俺の胸をポンポンと叩き、得意げに言った。

「言つたら？ ボロ儲けだつてさ」

俺も真似をして口をひん曲げて笑い返し、頼もしい相棒の入った抱っこ紐をポンと叩いた。

年の瀬も迫る12月28日、地下の底の大広間には「血が止まったぞおおお！」という眼鏡の男の大絶叫が木霊していた。

## 第5話 タバコと猫と缶コーヒー

変化はじわじわと起こった。

地下広間に絶叫が木霊した翌日、前日に広間にいたパーティのうちの一人が声をかけてきたのだ。

「コーヒーってある?」

「あるよ」

「缶ですけど、ブラック? 微糖? カフェオレもありますよ」

マーズに続けて俺がそう言うと、金色の拵えの日本刀を二本差しした若い冒険者はちよつと悩んで「カフェオレで」と答えた。

「三百円です。すいませんけど、地面に置いてください」  
「観光地価格だなあ」

彼は苦笑しながら百円玉三枚を取り出し、地面に置いた。

俺も三百円からちよつと離れた所の地面にカフェオレの缶コーヒーを置き、さつと離れる。

「これって手渡しはできないの？」

「すいません、バリア張ってるんで……」

「そつちのケツト<sup>ね</sup>・シー<sup>こ</sup>のスキルか、二人してレアスキル持ちなんだな。ま、そうでなきや<sup>こ</sup>こまで来れんか……」

彼はカフェオレを拾い上げ「おお！ 温かいじゃん！」と感激して帰っていった。

たしかにこの受け渡しは不便だよなあ。

明日は何か、受け渡し台みたいなのを持ってくるか。

翌日、素直な俺は激安の御殿<sup>ごてん</sup>がキャッチフレーズのディスカウントストアから机を調達していた。

物干し竿も買い直さなきやいけなかつたしな。

いつもの場所に陣取り、机を前にして椅子に座っていると、昨日と同じぐらいの時間



に二本差しの兄さんが現れた。

今日は後ろに女性を二人伴っているようだ。

二人とも同じパーティなんだろうか？

ハーレム冒険者物の主人公みたいな人だな。

「おっ、机！」

「たしかに不便だったんで、調達してきました」

「アイテムボックス持ちはいいなあ……あ、コーヒーね。カフェオレ二本とブラック一本で」

「ありがとねー」

マーズが招き猫のように手を振ると、それを見た二人の女性が「可愛い」と声を上げた。

「怜奈さん！ 梅田さん！ 失礼ですよ！」

二本差しの兄さんはギョツとした様子ですぐに振り返り、大声で二人を諫めた。

いや、そらそうだわ。

姿から文化まで違う移民だらけのこの日本で、他人の見た目を揶揄していると捉えられかねない言葉を口に出すのは、正直言つて迂闊という他なかった。

「あ、そつか……」

「ごめんなさい、つい……」

「いいよいいよ」

「すみません」

マーズの許しの言葉に、二本差しの兄さんも頭を下げた。

実はマーズはあんまりこういうのを気にしないのだ。

相手が大人だからこういう対応になっただけで、マーズは近所の幼稚園児とかにも「猫ちゃん」と呼ばれて抱きつかれたりしてゐるからな。

本人曰く「気持ち悪がられないだけ得してゐるよね」との事だ。

実際、地球どころか宇宙中どこまで行つても見た目での差別はなくなるそうさ。

違うのは当たり前なんだから、敬意さえあればいいんだよ、と猫のマーズは言つていた。

「じゃあこれ、千円」

「あ、どうも！」

机の上の千円と引き換えに、缶コーヒー三本と百円玉一枚を置く。

いちいち椅子から立ち上がらなくていいし、こりや楽だ。

「兄さん、タバコは吸わないの？」

「荷物になるし、地下に吸い殻落としたりしたら管理組合ギルドに怒られるだろ」

「あー、吸い殻か……たしかに」

よく創作にある死体やゴミが消えるマジカルなダンジョンと違って、ここはリアルだからな。

三ヶ月に一度は管理組合ギルドによる大掃除も行われてるし、前に使用済み避妊具が見つかって大変な騒ぎになった事があるらしい。

もちろん犯人の特定は難しいが、犯人探しは行われる。

深くて暗い穴の中に潜る、狭い世界の危険な稼業だ。

みんな変な噂が出るのだけは避けようとしていて、そういう所にはことさらに気を使っていた。

「兄さん、吸い殻ぐらい引き取るよ。うちの商品から出るゴミだしね」

「え、ほんと？　じゃあパーラメントある？」

「えー、パーラメントはなくて、マルポロ、セツタ、エコーです」

「じゃあマルメンの強い方で」

「一本百円だよ」

「うっ！　ぼったくり！」

「嗜好品ってそんなもんさ」

文句を言いつつも吸うのをやめる気はないようで、二本差しは登山用品ブランドの小銭入れから取り出した百円を差し出した。

ライターとタバコ一本を出し、百円を受け取る。

「ライターは後で返してね」

「いたれりつくせりで嬉しいよ、はは……」

コーヒーのプルタブを開けながら、二本差しは力なく笑った。

「あのお、タバコあるって?」

そんなやり取りを見ていたのだろうか……

別のパーティの、顔をグレーのバラクラバで覆った男が声をかけてきた。

「あるよ」

「セツタメンの十二ミリある?」

「ありますよ。一本百円です。ライターは貸し出しですんで、後で吸い殻と一緒に返してください」

「高え〜」

高いといいつつも、男はしつかりと百円を差し出した。

まあ入り口から十キロ近くもある広間まで来て冒険もして、そりゃあ一服もしたくなるだろう。

俺は吸い殻を入れる用に、椅子からちよつと離れた所にあられの空き缶を置いた。椅子に戻ると、また客が来ていた。

目の下に濃い隈のある、スコープ付きの迷彩柄のクロスボウをかついだ女性だ。

「なんか甘いものつてありますか？」

「あ、和系がいいですか？ 洋系がいいですか？」

「えっ!? 選べるの？ じゃあ、あんこ系けいで」

お姉さんはちよつと独特な語尾が伸びる感じの喋り方でそう言った。

あんこ系ね、用務スーパールのデザートコーナーを総濼あいしてきた甲斐があったな。

「じゃあ大福、三百円です」

「高〜! ……ま〜いいか〜……」

「姉さん、一緒に温かいお茶はどう？」

「近くなっちゃうから、水分は少なめにしてるの」

女性はブランド物の財布から千円を取り出し、七百元のお釣りと大福を持って去って

いった。

「そうか、地の底だからトイレ事情もあるか……」

「ついで衝立ごと簡易トイレとか持ってきたら需要あるかな？」

「そんなアイデアをゆつくりと温める暇もなく、目の前にまた別の客がやって来た。」

「カップ麺とお湯ある？」

「あ、ありますよ！」

味の説明をしようとしたら、横から二本差しの手がニユツと伸びてきた。

「あ、これライターと空き缶、ありがとね」

「ありがとうございます！」

「セツタメンもう一本くれる？」

バラクラバも隣から話しかけてくる。

「あ、ちよつと待ってくださいね！ 順番で！」

「やつぱお茶もらおつかなく」

大福のお姉さんも帰ってきた、急にてんてこまいだ！

「並んで並んで！ すいませんが順番でお願いします！」

「商品はたっぷりあるからね、ちよつと待つてね」

これまでの苦戦はなんだったのだろうかという勢いで、広間中のパーティがうちの店に押し付けてきているようだ。

この日、俺達は昨日の売上の五十倍、一万五千円を売り上げて帰る事になったのだ。た。

「いやー今日は儲かったな」

「いや、全然だよ。弁当が売れだしたらもつと儲かるさ」

朝に行ったダンジョンを昼過ぎに切り上げ、夜はピザ屋のバイトに行つて帰つてくるというルーチンワークをこなした俺は、食べ終わったカレーの皿をそのままにしてコタ



ツでマーズと喋っていた。

テレビでは年末特番で豪華メンバーのバラエティ番組が放送されていて、俺は年末特有のそわそわした空気を楽しんでいた。

「年末年始はピザ屋のバイト休めないのがキツイなあ」

「もう辞めちゃったら？」

「いや、俺ピザ屋のバイト好きなんだ。ゲームみたいで」

「トンボはゲームが好きだよな」

「好きだね、就職もゲームの会社に入りたかったけど……日本も迷宮不況が二十年も続いて『失われた二十年』なんて言われてるんだよな。ゲーム会社どころか普通の会社でも就職厳しいよ」

そんな事を愚痴る俺を、マーズは不思議そうな顔で見つめた。

「なんで就職するの？」

「え？ そりゃあ……俺だって、安定した暮らしがしたいからさ」

「いや、普通に会社立てりゃいいじゃん。せっかくジャンクヤードなんて強力なスキル

があるんだからさ」

「ええ？ 起業？ ないない、俺そういうのできないよ。経済学部だし」

「おいおい、経済の勉強してるならなおさら起業向けだろ」

コタツの上のミカンを剥きながらそう言つてマーズは笑つた。

「日本の上流大学以外の経済学部は『パラダイス経済』って言われてるの。楽勝で単位取れて、就職にもそこそこ強いってね。経済の勉強なんか基礎の基礎しかやってないよ」

「ふうん。ま、でもダンジョンでもつともつと稼げば気も変わるんじゃない？ なんか稼いだ金でゲーム会社でも作っちゃいなよ」

「え!? ゲーム会社？ それは……いいかも」

「それで部下に商売任せてさ、トンボはピザの宅配やればいいよ」

「ええ、そこまで行つたらピザの宅配はもういいかなあ」

意地の悪い顔でこつちを見ているマーズに苦笑を返すと、ふあつとあくびが出た。

時計を見るともう深夜一時だ。

もう月曜日になつてしまつたが、定例会をやってしまおう。

「マーズ、机の上拭いといて」

「はいはい」

カレーの皿を流しに置いて、コップとコーラを持って戻る。

「二週間ぐらいお金はだいたい仕入れに使ってたし、あんまりジャンクヤードの動きはないんだよね」

「そのお金を稼ぐために頑張ってるんだからね」

「とりあえず、今日交換されてたのがこれ」

俺が取り出したのは、胴の部分がメッシュになったペットボトルのような物だった。

これは

いちご<sup>ひと</sup>パック

←

背負い紐が四本ある宇宙のブランド品のリュック

←

地球人には飲めない成分のお酒

←

『キュー 空気環境測定機能付きポータブル組成変換器』  
と交換されてきたものだ。

「あ、これ結構凄い！……ていうかこんなのがあったんだ」

「何に使うやつ？」

「空気の組成を変える機械だよ。この星じゃ二酸化炭素って言うんだっけ？ 増えて困ってるっていうあれを酸素に直接変換したりできる物」

「え、それって凄いじゃん！」

「宇宙船には普通に組み込まれてる機械だけど、こんな持ち運びできるサイズの物は初めて見たね」

まあたしかに、宇宙船にはこういうのがついてなきやしんどいか。

植物いっぱい置いて二酸化炭素吸ってもらうってのは無理があるもんな。

「これで二酸化炭素を酸素に変えたら地球環境良くなったりするかな？」

「それ、良くなるまでにはトンボ死んでると思う」

「やっぱそう……?」

とりあえず、確保だ。

家の中で換気扇代わりに使ってもいいしね。

「それでトンボ、あと今週は何があったつけ?」

「今週は多分他に何も無いよ、先週手に入ったのはアイドルの直筆ホロサインだつけ」

「人気絶頂の中忽然と消えた伝説のアイドルだよ? あれは持つておけば絶対に歴史的価値が出てくるから!」

歴史よりも宇宙船だと思うが、まあ本人がいいと言うならそれでもいいんだろう。

俺はジャンクヤードの中にある『ユーリ・ヴァラク・ユーリ』と読めない文字でサインされているらしいホログラフを見つめながら、ため息と共にコーラを飲み干したのだった。

## 第6話 神社と猫とホームセンター

十二月三十一日、年の瀬だ。

さすがにこんな日にダンジョンに潜っているような奴はいないだろうという事で、俺とマーズはアパートからちよつと離れたホームセンターにやって来ていた。

「だからさあ、簡易トイレがあった方がいいと思うんだよね」

「いいけどさ、掃除はトンボがしてよね」

「それが課題だな……あ、昨日の空気変換器だっけ？ 匂い対策に使えない？」

「ええ〜！ そんな事に使うの？ 高級品だよ？ 匂いが染みて臭くなったらどうするのさ」

「そしたら交換に出しちゃえばいいじゃん」

「トンボって思い切りがいいのか悪いのかわかんないよ」

「あ、これいいじゃん。一回一回袋に密封してくれるんだってさ」

俺はハイテク簡易トイレの注文札を取り、ポケットに入れた。

正直、結構強い空気の流れがあるのが原因なのかわからないけど、ダンジョンの寒さは凄いからな。

トイレに関しては俺も何度か危ない日があったから、対策が必要だと思ってたんだよ。

「ああ、あと灰皿買つとした方がいいんじゃない？」

「うん。あといちいちライター渡すのめんどくさいし、灰皿に一個括り付けちゃうか」

真つ赤な缶の灰皿と、それを持ち上げるためのスタンドが売っていたので購入。

あとは衝立に、どうせならゆっくり座って弁当が食べられるようなスペースも……

「ああ、金が足りない」

「トンボ、やつぱりトイレはいらないって」

「いやトイレはいるんだって。とりあえず休憩所は安い銀マットで済みますか……」

「そんなダンボールでいいと思うけど」

「たしかにそうだけどき、どうせお金払うなら特別感はほしいじゃん」

「地下の底であつたかい弁当食べれるだけで十分特別だと思うよ」

それもそうか。

銀マツトとはいえ、量を買えばそこそこ値段もするしな。

「冒険者の皆ごめん、銀マツトはお金ができてからで……」

「お金ができたなら銀マツトじゃなくて椅子買ってやんなよ」

それもそうだ。

俺達はトイレや灰皿と共にビニール袋等の消耗品を買い込み、無料サービスの段ボールを大量に頂いてホームセンターを後にした。

こういう時に手ぶらで帰れるのは本当に最高だ。

スキル様様だな。

迷歴二十一年はピザ屋のバイトで走り回っているうちに終わり、迷歴二十二年がやってきた。

世界中に迷宮が現れた二十年前に西暦から迷歴に暦が変わったから、今年二十一歳の俺は実は迷歴元年世代だ。



迷歴元年なんてのはそれまでの常識や平和がぶっ壊れた年だったわけだから、全くプレミアム感ないけどね。

そんな混沌からも二十年経てばそれなりにみんな順応するもので……

今や神社の初詣でも、異世界人やその子ども達も手が合わせる姿が見られるようになっていた。

綺麗に二礼二拍手一礼をするオーク族の子供の隣でぎこちなく参拝する俺を、猫のマーズはなんだか不満そうな顔で見つめていた。

「ねえトンボ、なんでこんな夜中に寺に来るわけ？ 寒いよ」

「神社だよ、神社。初詣っていうんだよ」

「トンボって何かの宗教の教徒だっけ？ お祈りしてるところとか見た事ないけど」

「いやこの神社に詣でるっていうのは……なんていうのかな、日本人という共同体の一員である事を確認する儀式というか……」

「じゃあ日本人教って事？」

「……………うーん、いや、どうなんだろう？」

振る舞いの甘酒を飲みながら、左右に出店が出ている参道を歩いていく。

黒髪の日本人達に混じって、カラフルな頭の異世界人や、動物頭の異人種達が賑やかに行き交っている。

日本の神様も、初めて異世界の人達が参拝に来た時はさぞかし面食らった事だろう。

「あ、そういうえばマーズは何か信じる神様とかっているの?」

「銀河じゃあ魂魄の流転が確認されてからはそういうのは下火だね。現代の魂魄学じゃあ前世が誰かまでわかっちゃやうからさ」

「え!?! 前世までわかるの?」

「地球でもDNA鑑定ぐらいはやるでしょ? それと一緒にだよ。魂魄もパターンが解明されてるから特定できるの。夢がないって言う人もいるね」

自分の前世まで特定できるなんて、よく考えたらあんまり嬉しくないかも。

しょーもない人間だったらブルーになるだろうし、あんまり凄すぎても「それにひきかえ今の俺は……」ってなるかもしれないからな。

「マーズの前世は?」

「知らない、俺。ポプテだもん。死んだポプテは同じ毛皮のポプテに生まれ変わる。ポプ

テの世界はそれでいいんだよ」

マーズは何でもなさそうにそう言って、手を上にあげて伸びをした。たしかに、それぐらいが丁度いいのかもな。

前世の自分が何をしてくれるわけじゃなし、逆に負債があつたらあつたで……あれ？

「マーズ、前世の自分が借金踏み倒したりしてたらどうなるの？」

「どうにもならないよ、でも相手が生きてりや恨みは買うかもね」

そう言って、猫のマーズは悪そうな顔で笑った。

やっぱり前世なんか知るもんじゃなさそうだな。

びゆうびゆうと吹く冷たい風がどこからともなくいい匂いを運んできて、バイトですつからかんになった腹がグウツと鳴った。

「マーズ、出店で何か食べてかない？」

「さつき高いから駄目って言ってなかったっけ？」

「いいんだよ。金はまた明日稼げば」

マーズは俺の顔を見て、なんだか面白そうに笑ってから出店の方へと歩きだす。俺はかじかんだ手を息で温めながら、歩く毛皮の後ろ姿を追ったのだった。

## 第7話 トイレと猫と引き戸の実家

迷歴二十二年の一月二日の昼、俺達はまたダンジョンにいた。

年明け早々の事だ、最悪誰もいないかと思つていたいつもの広間には、意外にもほどほどに人が集まっていた。

「明けましておめでどう……あつ！ 灰皿が設置されてる！」

俺達が店を広げるなり手を振りながらやってきた二本差しの兄さんは、赤い灰皿を見て嬉しそうに笑った。

「おめでどうございます！ 設備投資しました」

「おめでと〜」

「あつちの段ボールも？」

「お食事スペースです」

「地べたよりはマシでしょ？」

マーズが言うと、二本差しは少し考え込んでから深く頷いた。

「まあたしかに、あると地味に嬉しいな。地面は硬いし冷たいし……普通はあんなかさばるもん持ち込めないから、すげー貴重な段ボールだけど」

「あとあつちの衝立は簡易トイレ！ 緊急用です！」  
「それが一番嬉しいかも!!」

やっぱりみんなトイレは我慢してたのか。

「せっかく買ってきたし、二本差しの兄さんも我慢出来ない時は使つてね」

「へ？ 二本差し……？」

二本差しの兄さんはマーズの言葉にきよんとした顔をして、自分の腰の刀を見て得心のいった様子でそれをポンと叩いた。

「ああ、刀の事か。俺、雁木がんぎつてんだ、よろしく」

「あ、僕は川島と申します」

「俺マーズう」

「おお、謎だらけの調達屋も名前は普通だったな」

雁木さんは爽やかに笑って、懐から財布を取り出した。

「コーヒーとタバコくれる？」

「あ、はい」

俺はカフェオレとタバコの代わりに四百円を受け取った。

「明日も来るの？」

「すいません、明日はちよつと……」

「そうか、来るのがわかってれば飯の調達でも頼りにできたんだが……ま、そつちにも予定があるだろうししゃーないな」

そう言って、雁木さんはタバコを啜えながら灰皿へと向かっていった。

たしかに飯食う予定ある人は飯持ってくるし、それは食べちゃわないと荷物になるし無駄になるもんな。

これまで弁当があんまり出なかったのも納得だ。

「予定表作った方がいいのかな？」

「あんま気にする事ないと思うけどね」

「そう？」

「来れなくて文句言われるのも面倒だし、命のかかっている鉄火場で最初から他人を頼りにしてる人は長生きできないでしょ」

たしかにそうかもしれない。

あくまでうちの店はライフライン補給路ではなく、選択肢の一つとして存在した方がいいのかもな。

「あ、でもSNSとか使えばそうでもないのか」

「SNS？」

「今日はダンジョンにいますよっていうのをネットで告知するの」



「そんなん誰か見るかなあ?」

「ネットの力は凄いんだから、やるのはタダだしな」

「ここのダンジョンもこの広間まではギリギリWi-Fiが来てるし、品揃えも書けば集客力が……いや、さすがにそこまですれば悪目立ちするか。」

いくらバリアを張つてるとはいえ、金目当てで同じ冒険者に襲われたら嫌だしな。最初はわかる人にだけわかる感じでやっていこうかな。

「ま、トンボのやりたいようにやってみなよ」

「うん、やってみる。俺こういうの考えるの好きなんだよね。トイレとか休憩所とかもさ、だんだん拠点が整つてく感じがたまらないんだ」

「段取り好きな奴つているよね」

そこはホスピタリティに溢れてるとか言ってくれよ。

俺のスマホでマッチスリーパズルを遊ぶマーズのぴこぴこ動く耳を見つめっていると、商品受け渡し用の机の前に人がやってくるのを感じた。

顔を上げると、目の下に濃い隈のあるお姉さんがピンクのクロスボウを背負って立つ

ていた。

「なんかできたね〜」

お姉さんはトイレの衝立を指さしながらそう言った。

喫煙所の方から「阿武隈あぶくまさん待望のトイレだよ」と二本差しの雁木さんの声がする。

このお姉さん、阿武隈さんって言うのか。

「え〜！ トイレ〜!? 使っていいの?」

「生理現象なのにお金取って申し訳ないですが、緊急用の凝固剤使って固めるトイレなので五百円頂きます……」

生理現象なのだ、本当はサービスでタダにしたいが……こういうのはタダはタダで問題が出る。

マーズなんか千円取れと言っていたぐらいだ。

これまでも普通に物陰でしてたのだ、金ももつたいなければそうすればいい。

ダンジョンは普通に風が吹いてるから、匂いもそんなに残らんしな。

「払う払う、ありがたいね〜トイレ。でも一個じゃ足りないかも」

「え？ 一回五百円ですよ？ さすがにそうそう使う人は……」

「女の子って個室が必要な場面が色々あるから、安全地帯にある個室なんてみんな使いたがると思うよ」

「そういうもんですか？」

「そういうもんなのだ〜」

何か言いたげな顔でマーズがこちらを見上げているが、俺は気づかないふりをした。

阿武隈さんはしばらく嬉しそうな顔でトイレを見つめていたが、思い出したかのようにこちらを見た。

「何か甘いものください」

「甘いものですね、何系がいいですか？」

「今日はクリーム系けで」

クリーム系ね。

「じゃあダブルシュークリームで」

「おいくらまんえん？」

「三百万円です」

「ぼったくりだあ」

そんな事を言いながら、阿武隈さんはシュークリームと三百万円を交換して去っていった。

貴重な現場の意見が聞けて良かったよ。

彼女が離れるとすぐに、ポリカーボネートの盾を持ってエルボーパッドやニーパッドを装備した警察の特殊部隊員のような服装の男性が走ってきた。

「あのっ！ トイレ使えるって!?!」

「五百円です」

「はいこれ！」

彼は用意していたんだろう五百円を置き、衝立の前に盾を置いて転がり込むように中

に入っていった。

しばらくしてから、あああ……というため息のような声と、あまり聞きたくない音が聞こえてくる。

うん、トイレの中で音楽を流せるようにしましょう。

抱っこ紐の中に首を引っ込めたマーズを見て、俺はそう誓ったのだった。

翌日、俺達は北関東の俺の実家へと帰省するために東京を離れていた。

うちの親が、近いんだから盆暮れ正月は帰ってこいとうるさいのだ。

いつでも帰れる距離なんだからいつでもいいじゃんとは思うものの……

盆暮れ正月と心に決めておかないとずっと帰らないんだらうなという確信もあった。

「……俺んち」

「一軒家なんだ」

「中古だけどね」

バス停からちよつと離れた場所にある瓦屋根の実家の引き戸の玄関を開けると、二十年間全く変わらない光景が目飛び込んできた。

電話台の上の黄ばんだプッシュホン。

壁に貼つてある俺と妹の『日々是好日』の書道。

ボロボロの帽子かけには女物のカバンやらストールやらネックレスやらが無茶苦茶にかかつている。

俺が出ていく前から変わった物といえば、来客用のゼブラ柄のスリッパが置かれてる事だけだ。

「ただいま〜」

俺がそう言うと、奥の台所からうちの母の声が返ってきた。

「あれ？ トンボお？ あんた帰ってくるの今日だけ？ お昼食べてきた？」

水音がしているから、洗い物をしながら喋っているのだろう。

出迎えに出てくるつもりはなさそうだ。

俺は靴を脱いで上がり、マーズにスリッパを勧めようか一瞬迷ったが、やめた。

猫の足には大きすぎる。

「三日に帰るって言ったじゃん。食べてないよ」

「そうだった？ 友達連れてくるって言ってたから部屋に布団用意しといたけど、あんなの部屋で良かった？」

「いいいい」

「あ、お邪魔してまゝす」

「あらやだ、そうそうお友達も来てるのよね。お母さんすっぴんだわ。ごめんなさいね」

ガラツと引き戸を開けて廊下に出てきた母は、二、三歩こちらに歩いてからマーズに顔を向け、ゆっくり近づきながらしげしげと眺め、ビクツと体を震わせてから、一拍置いて絶叫した。

「うわーっ!!!」

「うるさっ!!」

「うわっ! うわっ! うわっ! まあちゃん帰ってきた!! おっ! お父さーん!!!!」

お父さーん!! 千恵理チエリーっ! まあちゃん生きてたよーっ!!!」

母はどたどたとリビングの方へ駆けていった。

「どゆこと?」

「前に言ったじゃん、マーズってうちの死んだ猫にクリソツなんだって」

「そんな似てるとは思わなかったけど……」

「あの反応見たろ、完全に化けて帰ってきたと思われてるよ」

マーズとそんな話をしていると、父母妹が腰の引けた感じで廊下をゆっくりと歩いてきた。

「マーズや、ほんまや!」

「兄ちゃん、まあちゃんって死んだんじゃないの!」

「みんなが集まる正月だから帰ってきてくれたんだねえ、ほんとにいい子だねえ……」

母は泣きながらマーズに向かって手を合わせはじめた。

「とにかく、中に入ろう。説明するから」



俺はマーズに寄ろうとする三人をグイグイ押ししてリビングへと追い立てる。

この調子で抱きしめて頬ずりなんかされると完全に事案だ。

その後ろからは、ちよつとビビった感じのマーズが俺に隠れるようにして付いてきていた。

「家族一同で取り乱しまして、ほんまにすみませんでした」

「いえいえ、気にしていませんから」

あれからしばらくが経ち、お茶を一杯飲んで落ち着いたうちの親父がマーズに非礼を詫びていた。

「でもねえ、まあちゃんだと思っうよねえ？」

「さすがにここまで一緒だと、猫又になって帰ってきたって言われたほうが信じられるかな」

一応事前にマーズによく似たケット・シーを連れて帰るとは言っていたのだが、さすがにここまで似ているとは思わなかったのだろう。

「あの、僕はほんとに猫のマーズ君じゃありませんので」

「でも名前はマーズなのよね？」

「物凄い偶然だよね、もう運命じゃない？」

それは俺がマーズと名付けたからなのだが……流石に宇宙人がどうこうという話まですれば、今でさえギリギリの家族の理解力のキャパも溢れてしまうだろう。

冒険者をやっている事や、宇宙の向こうの犯罪組織と物々交換の取引をしているなんて事を話せば無用の心配も生んでしまう。

とりあえず、今日のところは偶然で押し通す事に、俺とマーズは決めていたのだった。

「とにかく、猫のマーズに似てるっちゅうのは置いといても、せつかくのご縁なわけですから。是非！　ここをマーズさんの地球の実家やと思つて、ゆつくりしていったつてください」

もってもらしい事を言っているが、親父は完全にマーズにデレデレだ。

そもそも猫のマーズを拾ってきたのは親父、名前をつけたのも親父、育てたのも親父、いなくなつてから一番落ち込んでいたのも親父なのだ。

今は「ええですか？ ええですか？」なんて言いながらスマホで写真を撮りまくっている。

「まあちゃん……あ、ごめんなさいマーズさん、食べられない物とかは……？」

「別呼びやすい形で呼んでもらつて結構ですよ。あと食べ物はトンボが食べれる物なら何でも食べれますので」

「日本は初めてだつて事だし、おせちでも食べていただこうかしら」

おせちでも、じゃなくて毎年正月はおせちとレトルトカレーぐらいしかないだろ。

「ねえねえ、マーズさんつてどこの国から来たの？」

妹がそう聞くと、さすがに星の彼方と言うわけにもいかず……マーズは気まずそうに目を泳がせた。

「あー、一応ポピニヤニアってところから……」

「何そこ、めちやくちや行ってみたい！ ケット・シーの国なの？」

俺も行ってみたい。

「同族ばかり住んでるよ、ちよつと遠いけど」

結局この日は夕飯に普段は取らない寿司を取ったり、マーズがいける口だと知った親父が秘蔵の大吟醸を開けたりの大騒ぎで過ごし。

翌日はマーズが美味しいと言ってしまった親父の地元の名物、イカナゴのくぎ煮を大量に持たされて昼過ぎに家を出た。

家族に大混乱をもたらし、こっちはなんとも対応に苦慮する帰省となったが……

マーズは帰りの電車の中で「どんな形でも、歓迎されてるならまあいいかな」とまんざらでもなさそうに笑っていたのだった。

## 第8話 猫と猫とナンパの結果

年が開けて一ヶ月、大学の授業が再開して学業と金策とバイトの掛け持ちで大変な今日この頃……

地の底は大変な事になっていた。

「トイレ借りまーす」

「はあい」

五つに増えたトイレにはひっきりなしに人が出入りし、入り口の横に置いた料金徴収箱にもどんどん硬貨が溜まっていつている。

音対策にアプリ経由でラジオが流され、そのためのタブレットやスピーカーの入った鍵付きの備品ボックスの中では、一緒に入れた空気組成変換器がフル稼働で脱臭作業中だ。

トイレだけではなく俺が用意した段ボールの休憩所も大好評、というか場所の取り合のような状況になっていて、探索に疲れ切った人達がすし詰めになって死んだように

眠っていた。

去年までは割と閑散としていたはずの十キロ地点の広間には数え切れないほどの人が集まり、装備のチェックや獲物の血抜き解体、雑談に情報交換と、もう騒がしいを通り越してうるさいぐらいの状況だった。

もちろんそんな状況だから、うちの店も大繁盛だ。

「えー、アルミ矢尻カーボン矢二十本、単四電池二本、それとマルゲリータピザね」  
「猫の旦那、よく焼きで頼むぜー」

背中にコンパウンドボウを吊った禿頭の岡さんが、人差し指を立てながらそんな事を言う。

この人は毎回マルゲリータを頼んではこんな事を言うのだが、実際よく焼きにすると「焼きすぎ」と文句を言うめんどくさい人だからピザは普通焼きだ。

「ここで調理するんじゃないんだから無理だよ。えー、一万二千五百円だね」

「あ、あと今度企業から大スカラベおほの甲殻収集の依頼受けるから、グラインダーと変え  
ディスクの調達もお願いしたいんだけど」

「あ、じゃあSNSのDダイレクトメールMに送つといてください。岡さんのアカウントは確認取れますんで」

「悪いね」

お金を受け取り、円形のスパーサーで纏められた矢と電池、それとホカホカと湯気を立てるマルゲリータピザをオープンにかけた時のアルミ箔のついたまま引き渡す。

「賞金首は見つかりそうなんですか？」

「かなり奥に逃げたんじゃなかなとは言われてる。もう真剣に追ってるのも二、三組ぐらいじゃないか？」

二つ折りにしたピザに齧り付きながら、岡さんは去っていった。

この賑わいをうちの店が呼び込んだと言えれば誇らしいのだが、実際の所は全然関係がない。

実は一月の初旬にこの広間から五キロほど奥で、ほぼ炭化した人の死体が出たのだ。

そんな強力な火災を扱う魔物は限られているから、管理組合ギルドは下手人を竜種ドラゴンと仮定して賞金をかけた。

その賞金目当てに東京中の賞金稼ぎがここ東京第三ダンジョンに集まってきたのだった。

もちろん賞金目当てに集まってきた人達ばかりでなく、前からここにいた人も普通に通ってきている。

「弁当五つ、肉系三個のり弁二個で。あとタバコ」

東三常連組の、グレーのバラクラバを被った気無さんが片手でパーを出してそう言った。

「六千百円〜」

「あ、い、よ」

気無さんのパーティは全員が四十代男性の五人パーティだ。

元水道屋さんで、会社の倒産を機に同僚を集めて水道管と金属バットを持って冒険者になったらしい。

そんな始まりでもこれまで誰一人死んでないのだから、とても才能があつたのだと思



う。

「調達屋さあ、いつも温かいもん出してんだけど、もしかして氷もいけんの？」

「いけますよ」

「じゃあさ、今度牛魚うしぎよの肝運かんぐんぶから、十キロぐらい用意しといてくれる？」

「わかりました、調達しときます。あ、ト口箱もいりますか？」

「気利くじゃん。頼りになるねえ」

「あざっす」

気無さんは金を置いてタバコを胸ポケットに仕舞い、弁当を持って去っていった。  
「頼りになる」か。

ここ一ヶ月ぐらい、よく言われるようになった言葉だが、悪い気はしなかった。  
バイトでも同じ言葉と言われる事はあったが。

地の底で言われるそれには、なんだか実感が籠もっているような気がしたからだ。  
自分で色々考えて行動した事が、直接人の役に立っている。

俺はただそれだけの事に、なんだか抜け出せそうにない面白さを感じていた。

「アー、アノ……メシ？ ……アー、フード？ パン？ ゴハン？ アリマスか？」

最初、その声はどこから聞こえてきたのかわからなかった。

机の向こうから聞こえたはずだが、姿は見えず。

ただ机の上に、ピコピコと耳が揺れていた。

「あれ？」

俺が椅子から立ち上がると、机の影になる場所に二足歩行のサバトラ猫が立っていた。

俺のへそぐらいの背丈の、ピック付きのハンマーを背負った手足がちよつと大きな猫。

実は宇宙人なマーズとは違う、本物のケット・シー族だった。

「ココ……ゴハン？ カエル、キイタ」

「あー、オーケーオーケー。ユーキャンバイゴハン」

「オ……オケ？」

「トンボ、英語じゃ余計にわからないって。英語にしても間違ってるし」

マーズがそう言うと、ケット・シーは目を輝かせて両手を上げた。

彼？ はマーズに向けてフニャフニャゴニャゴと話しかけ、マーズは同じ言葉で

何か返事を返した。

さすが宇宙技術だ、ケット・シーの言葉まで対応してるのか。

「何か食べ物が欲しいんだって」

「さすがだね、何か食べられない物ない？」

「タブーがないかって方向で聞いてみるよ」

マーズがニャゴニャゴ言うと、ケット・シーはウニャウニャと答える。

なんかもう、スマホで録画して実家に送ってやりたいぐらいの光景だな。

「別に食べられない物ないけど、辛いのが苦手だったき。三人分欲しいって」

「じゃあチャーハンで」

「ニヤンニヤ」

マーズが何事かを伝えると……ケット・シーは首からかけた布袋から五千円を取り出し、人と猫の間ぐらいの形をした指でそれをこちらに渡した。

千四百円のお釣りを返し、スプーン付きのチャーハンを三つ手渡す。

「チャーハンです」

「ニヤツ！」

ケット・シーは温かいチャーハンに驚きながらも、俺の事を見てペコリと頭を下げた。そして視線を下げてマーズに何事かをニヤンニヤンと話しかけ、マーズもそれに付き合つてフニヤフニヤと話し始めた。

「何何？ この子、マーズ君のご家族？」

「違いますよ、お客さんです」

ライムグリーンのカロスボウを背負った、目の下に濃い隈のあるお姉さん、阿武隈さ

んが面白そうな顔で猫達の会話を見ながら話しかけてきた。

「最近では東三も色んな人來てるけど、マーズ君以外の異人種の人は初めて見たな〜」

「あ、僕虎ワライガ人の人見たことありますよ」

「レアだ〜、いいな〜」

阿武隈さんはそう言うって歯を見せながら笑い、開いた手の指を胸の前で合わせた。  
なんか前にちよろつと言っていたが、彼女は大の猫党らしい。

「あ、そうだとンボ君、二月も月火木と來ないんだよね〜?」

「いや二月はだいたい毎日來ると思いますよ」

うちの大学は期末テストが終われば二月上旬から春休みだ。

去年は一ヶ月半ほどをかけてしこたま積みゲーを崩した覚えがあるが、今年は目標もあるしダンジョンで金稼ぎをする事になるだろう。

「あれ? ああ、大学って春休みあるんだっけ」

「大学マジで休み長いつすから」

「ちゃんと卒業しなよ〜？ 冒険者になんかなりたくないでしょ？」

「いや、もうなってますけど……」

なんとも反応しづらい冗談だ。

中に入ってみれば冒険者は割としっかりした人ばかりだったし……というかしっかりしてない人はだいたい死ぬか怪我で引退するし。

大物を狩ったり上手く企業と提携すれば、二十代で年収三千万も可能な夢のある仕事だというのもよくわかったのだが……

東京では特にその傾向が強いのだが、世間ではバリバリの3K職で、武装した犯罪者予備軍と見られているのも事実だった。

「別に本腰入れてるわけじゃないでしょ？ 大体そんな事言ったらさ〜親に泣かれちゃうよ〜？ 冒険者なんか社会でツアアウト貫つてからでも全然遅くないんだから」

俺は目が全然笑っていない阿武隈さんの言葉に、「はあ」とか「まあ」とか曖昧な言葉しか返す事ができなかった。

この人も多分、冒険者になるまでに色々あつたんだろうなあ……

「で、何の話でしたっけ？」

「あ、そうそう、実は来週ちよつと荷物の輸送を頼みたくて〜」

「輸送ですか？」

何かを仕入れといってくれと言われる事はよくあつたが、直接物の輸送を頼まれるのは初めてだった。

まあ必要な物しか持っていないダンジョンで人に荷物を預けるのって、命を預けるようなもんだからな。

「うちのリーダーが本気で賞金首をハントしたいんだって〜」

「えっ!! マジすか？」

阿武隈さんのチームは遠距離戦を主体に堅実な狩りをする女性四人組だが、東三の冒険者の中では中堅ぐらいの扱いだったはずだ。

竜種ドラゴンなんか追いかけて大丈夫なんだろうか……？

「マジマジ、東三の問題は東三で解決したいんだってさ」

「え、でも竜種ドラゴンですよ？」

「いちおう応うちも三メートル級の火吹きトカゲは狩ったことあるしね」

火吹きトカゲというのは翼のないドラゴン……というよりは火を吹くオオサンショウウオだ。

たまに腹の調子を整えるために獲物を炭になるまで焼いてポリポリ食べる習性があるため、今回の下手人の有力候補になっていた。

「こっからもつと先にキャンプ張って奥まで行くからさ。この広間まででいいからうちの物資の輸送を頼みたいんだよね」

「まあ、それぐらいなら……」

阿武隈さんに了承の意を伝えようとした俺の口の前に、猫の手がニユツと出てきた。

「一キロ一万円だね」



「あれっ？ マーズ、さっきのケット・シーの人は？」

「とつくに帰ったよ」

阿武隈さんはマーズの言葉にべつと下唇を出して、栗色の頭をぽりぽり搔いた。

「逆に言えば、一キロ一万払えばどれだけ頼んでもいい系？」

「お姉さん、お得意さんだしね。うちも誰にでも同じ事やるとは言わないよ」

「じゃあ、交渉成立だね。荷物は二月の第一水曜の朝に引き渡しでいい？」

「あ、詳しくはSNSのDMで」

「り」

阿武隈さんはくるっと背中を向け、ちよつと首を傾げてからもう一度こちらを向いた。

「忘れてた、ドーナツください」

「あ、はい……」

彼女は三百円とチョコがけのドーナツを交換し、今度こそ帰っていった。  
竜狩りか……怪我なく終わればいいんだけどな。

「……あ、そういえばマーズ。さっきはケット・シーの人と何の話してたの？」

「どこ出身かって聞かれたよ」

「ああ、世間話だったのか」

「あと、彼女いるのかって」

「えっ!？」

あの人メスだったの!?

マーズって意外とモテるのかな。

羨まし……くはないか、猫だし。

「なんて答えたんだよ？」

「ナイシヨ」

マーズはクールにそう言った後「でも……」と続けた。

「あんま背の高い人って好きじゃないんだよね」

そこ気になるんだ！ とは思いつつも、猫の感覚はイマイチわからず……  
それ以上突っ込んで聞けない俺なのだった。

## 第9話 豆と猫と体重計

迷暦二十二年の二月はじめ。

俺はゲームに夢中になっていた。

金稼ぎと並行してやっていたジャンクヤードの交換で、俺はついに個人的な大当たりを引いたのだ。

「宇宙のゲーム……すっげええ!!」

「こんな大昔のゲームに真剣に感動してる人を見る方が感動だよ」

宇宙のテレビ、ホロヴィジョンに繋がれた……割と馴染みのある感じのコントローラーが刺さった菱形の機械。

見た事のないキラクターのシールがべたべたと貼られたそれは、マーズ曰く二百年ぐらい前のゲーム機らしい。

一月の半ばに五十本ぐらいのカード型カートリッジと一緒にポロポロの箱に詰められ、玉ねぎ一個と交換されてきていた。

「こんなのが玉ねぎ一個と交換されてくるなんて、夢があるなあ俺のスキル」

「言つとくけどそれ自体はかなりプレミアアついているからね。二十年前のゲーム機ならほとんど捨て値だから、多分玉ねぎの皮とでも交換されてたんじゃない？」

「宇宙でもそういうところはあんま変わらないんだ」

色んな像が浮かび上がる霧の入った水槽。

俺の乏しい語彙ではホロビジョンの映像の事をそうとしか表現できないのだが、そこには四本の手ででっかい銃を撃ちまくるタコ型宇宙人の姿が表示されていた。

「こういう見慣れた感じのゲームが発売されてたつてのを知ると、宇宙の人達も俺達とそう感覚が違わないんだって事がわかって嬉しいな」

「言つとくけどそれ超超超オールドスクールなゲームだからね。僕が氷漬けにされる前の流行はリアル神様ゲームだったから」

「リアル？ 神様？」

「ちつこい天球を作る技術を持った会社があつてさ、そこが作った天球でプレイヤーは神様として星を繁栄に導くの」

「ええ……？　なんかスケールが小さいのかデカいのかわかんないな」

「まあ本番は神様シミュ部分じゃなくて、育てた星同士のPVPのリーグ戦だったんだけどね」

そのリーグ戦は見てみたい気がするけど、俺はそういうのよりこういう馴染みあるゲームの方がいいな。

宇宙語がわからなくても遊べるし。

「そういえばトンボ、友子からミカンが届いてるよ。あとなんか変な「豆」

「人の母親を下の名前で呼び捨てにしないでくれないかな……」

「そんな事が気になるの？」

「俺は気になるんだよ」

マーズはふうんと気のない返事をしながらミカンを十個ほどコタツの上のかごに盛り、残りと落花生を物流で使うコンテナボックスそっくりの食料保管庫へと入れた。

この食料保管庫という奴は、常温なのに食料の鮮度を保つてくれるという不思議なものだ。

「なんだかんだ、この部屋もだいぶ便利になってきたね」

コタツでミカンを剥きながらそう話す彼が座っているのは、青いスライム……ではなく宇宙のビーズクッションのようなものらしい。

なんか自動で動いて腰や尻の同じ箇所に負担がかかるのを解消してくれるそうだし、二つ手に入ったのはいいが、俺はコタツでは座布団派なので枕として使っていた。

たしかによく眠れている気がするが、目に見えるほどウニヨウニヨ動くわけじゃないから地味すぎてとても宇宙の物とは思えない。

宇宙の製品って大体のものは自分でエネルギーを生み出すから充電とかいらぬし、進みすぎた科学技術は地球のものとは見分けがつかない事が多々あるのだ。

「前から思ってたんだけどさ、なんか宇宙の物って地味じゃない？」

「そう？ ゲームには凄い感動してたじゃん」

「いやゲームとかバリアとか銃とかは見た目にわかりやすいからいいんだけど……」

俺はゲームを一時停止ホスにしてマーズの方を向き、壁を指差した。

「あれとか、見た目全然宇宙の物じゃないもんな」

「ああ、吸音剤ね。でもあれでだいぶ快適になったでしょ？ お隣さんが彼女連れ込んだら寝てられないってトンボも言ってたじゃん」

俺の指さしたアパートの壁には、画鋲に引っ掛けられたフック付きの防虫剤のような物があつた。

これは文字通り音を吸音する装置だ。

普通防音っていうのは重くて硬い遮音材で音を遮断、複雑な構造の吸音材で音のエネルギーを減衰する事によって行われる……らしい。

吸音剤はそんなの無視で、音を吸収して消しちゃう装置、いや薬剤なのか？

近くに行つて声を出すと耳栓をしてるみたいに何も聞こえなくなるっていう不思議な物体だ。

いや、物としての効果は凄いのだ。

ただあまりにも見た目が地味すぎた。

完全にお母さんが虫よけに玄関にかけてるやつだ。

個人的にはもつと謎に虹色にグラデーションしていたり、スケルトンカラーでピカピ



カ光っていたりしてほしい。

「あと流しのあれもだよ」

「清潔ボールの何が気に入らないのさ、君だって感激してたる？」

「いや、現実的に凄いいいものだったのはわかるんだけど……見た目が……」

台所のシンクの上から吊るされた赤い網の中には、黄色のスーパーボールのような物がいくつか入っていた。

これは流し周りの細菌を殺してくれるというありがたいボールで、ヌメヌメも、匂いも、なんならコバエの発生までも防いでくれるという超チート製品なのだ。

見た目が完全に便所ボールな事さえ除けばだが……

「日本じゃあれは男性用の小便器に使う抗菌剤なんだよ……」

「別にそんな事言われなくて知ってるよ、見た事あるし」

俺は床に転がったコロコロテープ型の無音掃除機、玄関に置かれた小人の置物型の防虫装置、窓際に置かれたサボテンにしか見えない宇宙の空気清浄プラントを次々に指さ

した。

「俺が言いたいのは……もう少し、もう少しだけ夢のある見た目にならなかつたのかつて事なんだよ！」

マーズは三粒ほど残ったミカンをコタツの上に置き、めんどくさそうにこちらへ首を向けた。

「トンボさあ、宇宙に何を求めてるのか知らないけど……そんな期待されたって困っちゃうよ」

「だって宇宙なんだぞ」

「たとえば俺達宇宙人がさ、日本人は日本人とひと目でわかるように全員チョンマゲにしろって言い出したらそっちも嫌でしょ？」

「そりゃまあ、そうだけど」

「宇宙だつて一緒だよ。結局使いやすい物の形つて決まってるし、あつて便利な物もだいたい一緒。見た目のいいデザインにもそりゃ需要はあるけど、最終的に残るのは工業的に洗練された形なんだよ」

ぐうの音も出ない正論だ。

それに悔しいが「それっぽくない宇宙グッズは使わない」なんて言えないぐらいに、宇宙グッズは便利なのだ。

俺はすつくと立ち上がった。

コンテナそっくりの食料保管庫に昨日から入れていた飲みかけのパックジュースを飲み、ついでに嫌な匂い一つしない清潔なシンクから水を汲み、窓際のサボテンもどきに水をやった。

俺は心の中の『浪漫』という箱に『生活』という名の蓋をして、とりあえず深く考えるのをやめたのだった。

二月はじめの水曜日、俺達は霊園の中にある東京第三<sup>とうきょうさん</sup>ダンジョンの近くにあるコンビニの駐車場で人を待っていた。

「なんでこんなとこ待ち合わせにしたの……！ 寒いよ！」

「しゃーないじゃん、車で受け渡ししたいって言うんだから……！」

二月の寒風は骨まで染み、買って外に出たら一瞬で冷えてしまったコーヒーを持つ手もガクガクと震えた。

中で時間を潰したかった所だが、ここはダンジョン最寄りのコンビニ、しかも朝である。

身の置き場もないほどに人でごった返っていて、とても悠長に雑誌を読んだりできるような状況ではなかったのだ。

「こういう時のためにさ、うちも車買おうよ！」

「バカ言え、どこに置くんぞそんなもん……」

東京の駐車場はバカ高いのだ。

「マーズも服着ればいいんだよ」

「ポプテには毛皮があるから……」

毛皮で間に合っていないから言ってるのに……

クソツ、交換で個人用の空調とかが出てきたら何を置いてでも確保しよう……

俺は猛スピードで雲が吹っ飛んでいく二月の高い空を見上げ、心に固くそう誓ったのだった。

結局、待ち人の阿武隈さんの四人パーティは、その後すぐにパステルカラーのSUVに乗って現れた。

「お待ちせー、こちらうちのリーダー」

「調達屋のお二人、無理聞いてもらっちゃって悪いわね。私が『恵比寿針鼠』のリーダーの飯田です」

「あ、どうも川島です。こちらは相棒のマーズ」

「よろ〜」

眉毛のキリツとした普通の美人の飯田さんにちよつと気圧されながらも、しっかりと握手を交わした。

「吉川です」

「高井です」

眼鏡女子の吉川さんと、黒髪おさげの高井さんとも握手を交わす。  
やはり冒険者、女性とはいえみんな固くてたくましい掌をしている。

「早速だけど、荷物の受け渡しいいかしら？」

挨拶もそこそこに飯田さんがSUVのトランクを開けると、そこにはがっしりとした  
プラ製の箱が積み重ねられて並んでいた。

奥にはクロスボウが入っているのだろう長めのケースが複数と、アウトドアメーカー  
のロゴの入った袋がちらつと見える。

そして何かのシャフトと一緒に束ねられた分割式の槍類が、トランクから中の席にか  
けて置かれていた。

「この箱類とガンケース全部をお願いするわ」  
「わかりました」

俺は体重計を取り出し、箱を持ってからその上に乗った。

こうすれば、表示された重さからあらかじめ測っておいた自分の体重を引けば物の重量がわかるのだ。

「アナログ」

「これが一番確実ですから」

面白そうに指をさす阿武隈さんに見守られながら、俺はどんどん計測しては物を収納していく。

マーズは重さと箱の個数を俺のスマホにメモっている。

「箱四個、ガンケース四個で二十キロと少しだね。おまけして二十キロ分でもいいよ」  
「ありがとう」

飯田さんは分厚いブランド物の財布から十万円を取り出した。

「前金に半分、仕事後に残りでいいのよね？」

「はい、それで」

彼女から受け取った金をきちんと数えてから仕舞う。

「では予定通り、金曜の朝九時に補給でお願いね」

「承知しました」

詳細は事前にSNSのDダイレクトメッセージMで詰めてある。

相手は木曜から深部にダイブを始め、金曜の朝に補給だ。

そして日曜朝に、またここで会って物資を返却する事になっている。

「じゃあ、よろしくね」

阿武隈さんはいつもの隈のある笑顔で俺達に笑いかけ、車に乗って穴蔵の方へと去っていった。

「トンボ、もう一杯コーヒー飲もう」

「飲もう飲もう」



そして体の冷え切った俺達は、震える足でよろめきながらコンビニへと向かったのだった。

## 第10話 暗闇と猫と気合いビンタ

俺達に物資輸送の依頼をしてくれた阿武隈さんのパーティへの補給予定日。

ダンジョンの入り口周りは物々しい雰囲気となっていた。

「中と連絡は？」

「そもそも崩落でWi-Fiが生きてるのかもわかりません」

「他の全組合員の確認取れました。取り残されてるのは『恵比寿針鼠』と『伊藤獵兵団』の二組です」

「賞金首を追って奥まで行つてた連中か……」

管理組合ギルドの職員たちが深刻そうな顔で頭を突き合わせて話し合い、冒険者達は装備をつけたままダンジョンの入り口を睨んでいる。

「調達屋！」

そんな常ならぬ雰囲気は俺がおろおろしていると、珍しくバラクラバを外した素顔のきなし気無さんに呼び止められた。

「気無さん、これは一体……」

「なんかあつた〜?」

「お前から今日は中入るな、焼死体が追加で五つ出た。しかも運び出した後に地震で崩落が起きて恵比寿の連中と伊藤んところが取り残されてる」

「えっ! ヤバいじゃないですか!」

「やべーんだよ、中にいるのはただの火吹きトカゲじゃないって話も出てる。このまま入り口を発破とコンクリで塞いで東三封鎖とうさんの可能性もある」

「じゃあ中の阿武隈さん達はどうなるんですか?」

「今生きてるかどうかもわかんねえよ。たしか前に長野で同じような事があつた時は結局四パーティが全滅して……」

気無さんの言葉に、嫌な想像が脳裏によぎった。

心臓がバクバクと早鐘を打ち、踵から背中にかけて水でも垂らされたかのように悪寒が走る。

一昨日握手したあの人達が……全滅？

にと前歯を見せる阿武隈さんの笑顔が脳裏に浮かび、がっしりと硬かった掌の感覚が震える手の先蘇ったような気がした。

「トンボ？」

抱っこ紐の中のマーズが、氣遣わしげにこちらを見ながら俺の腹をトンと叩いた。

真冬なのに、首筋を汗が落ちる。

少しでも気持ちが落ち着いてきた。

そうだよな。

まだ死んだってわけじゃない。

「あん時は結局誰も中に行けなくてな。とにかく雪がひどくて救急車も……」

気無さんの話を聞き流しながら、俺はギリギリのソロバンを弾いていた。

落石は最悪、バリアでなんとかなる。

落ちてる岩も収納できる。

ビームだって無効化できるバリアだ、竜の炎だって多分大丈夫だろう。

一つ一つ自分のできる事を数え、ゆっくりと息を吐き出した。

そうして気づいた、おそらく自分にしか彼女達を助けに行けないという事実。

それが胸の中のもやもやに方向性を与えた事を、はつきりと自覚した。

きつと、やってもやらなくても後悔するに違いない。

ならば、やってみてもいいはずだ。

俺は震える前歯で下唇を噛みしめ、正しいかどうかわからない決断を下したのだ  
た。

「気無さん。俺、中に行つてきます……実は今日、補給の約束をしてたんで……」

「馬鹿野郎！ 引つ張られるな！」

バン！ と凄い音がして、気無さんのデカくて硬い掌による張り手が俺の左頬に入  
た。

まだバリアを張っていないから、モロに食らって頭がクラクラした。

「お前にできることなんかない、冷静になれ！」

子供の頃以来久々に受けた張り手の効果だろうか、急速に脳みそに血が回ってきた気がする。

「いや、俺岩とか収納できるんで奥まで行けるんですよ」

「バリアもあるしね〜」

「あ、そういやそうか。でも危ねえぞ！」

「あのでも、俺ここで行かなきゃ一生引きずる気がする……」

そう言いながら顎をカクカク動かす俺を見て、気無さんは不思議そうな顔をした。

「どうした？」

「いや、歯がぐらぐらしてる気がする……」

「お前も冒険者ならちったあ鍛えろ！ 生きて帰ってきたらだけどな……」

「はい！」

「組合には俺が説明してきてやる、行くんなら準備しろ！」

気無さんは俺の肩をバンと叩いてから、すぐに組合職員の元に向かつていった。

「いいですか？ 十キロ地点の広間まで行ったら必ず連絡してくださいよ！ 連絡がなければ助けには行けませんから！」

「わ、わかりましたっ！」

組合職員から手渡されたごつい無線機をジャケットの胸ポケットに入れ、俺は何度も何度も頷いた。

ジャケットのポケットは冒険者達から受け取った食べ物やLEDライト付きの笛、安産祈願のお守りなんかの餞別でパンパンになっていた。

「調達屋！ 無理すんな！ 絶対帰ってこいよ！」

「戻ったらいいとこ連れてってやるから絶対死ぬなよ！」

「飯田達と伊藤達を頼むぞ!!」

皆の顔を見回して、何かを言おうとして言えず、俺はダンジョンへと足を踏み入れた。

いつもと違う、砂埃混じりの空気。

いつもと違う、光源のない真っ暗闇。

銀河警察の生体維持装置の暗視モードもエコーロケーションモードもオンにして。

ここに初めて入った日のようにガチガチに首を強張らせて、俺は進んだ。

「マーズ、良かったの？」

「んー？ 何が？」

マーズは、俺に行けとも行くなとも言わなかった。

でも俺に「下ろしてくれ」とも言わなかったのだ。

「死ぬかもしれないんだよ」

「死ぬかもしれないなんて、船に乗つてりや当たり前だよ。海賊の艦砲射撃食らったら全員一緒に次の人生なんだから」

それに……と、彼は続けた。



「ん、まだ修羅場じゃないから。全然ビビる必要ないよ」

闇の中で腹に感じる暖かさの中で、彼がくあつとあくびをしたのを感じた。

探索は順調に進んだ。

暗視モードは優秀で、ヘッドホンのような生体維持装置から発生したヘルメットのシールドのような力場に画像が投影され、洞窟内がまるで昼間のような明るさで見える。

天井や壁の崩落で通路を埋め尽くすほどに積みあがった岩も、最初はえっちらおっちら収納していたのだが、途中からコツが掴めてきて掃除機で吸うようにスムーズに収納できるようになっていた。

「だいぶ慣れた？」

「あんだけの量をやりやあね」

大きな崩落は入り口から少し行った場所だけで、幸いな事にそこから先は順調に進む

ことができていた。

積もったものはどかせるけど、地面がなくなったら進めなかったからな。崩落の影響か魔物の姿も全く見えず、いつもより進むのが楽なぐらいだ。そんな道を五キロほど進んだところで、その声は聞こえてきた。

「おおい……おおーい」

「なんか聞こえた？」

「聞こえたね」

「誰かいますかーっ！」

「つち……こつち……」

LEDランタンを取り出し、光を灯しながら近づくと地面には男性が倒れていた。

「大丈夫ですか!？」

「あ……調達屋か……助かった、助かった……」

倒れていたのは、伊藤獵兵団のメンバーの一人だった。

「他の方は？」

「うちの団は俺以外全滅だ……すんげえ火にやられて……俺は一番後ろにいたから炭にならずにすんで……そうだ、俺は……俺だけ……」

「歩けますか？」

「だめだ……暗くてもう、どこにいるのかわからなくて……」

俺は彼の前にLEDランタンをごとりと置き、その隣に水とブロック食品を置いた。

「いいですか、あつちに向かえば外に出られます。救援も呼びますので」

「頼む……連れてつてくれ……もうダメなんだ……」

「他にも人がいるんですよ！」

俺は足を掴む手を振り払い、無線に『五キロ地点に生存者あり。崩落は解消。先へ進みます』と送信して奥へと進んだ。

背中からは「頼む……待って……」というか細い声が投げかけられ。

無線機からは『一旦戻れ！』という割れた声が響いていた。

俺は全てを振り切って、真っ暗闇の中を前に進んだ。  
これ以上怯えに足を取られないように、足早に進んだ。

十キロ地点のいつもの広間は、その半分ほどが崩落で埋まっていた。  
嫌な想像が頭に浮かび、矢も楯もたまらずに叫んだ。

「誰かいませんかー!？」

問いかけに返事はない。

俺の声だけが暗闇に木霊していた。

「ちよつと待つてね、生体サーチしてみるから」

「え？ そんなんできるの？」

「警察用だからね、生体維持装置って最後に残る装備だから基本的に多機能なんだ。これだけで宇宙空間に放り出されてもある程度耐えられるぐらいだし」

俺の両手を足場にしながら、マーズは軽い調子でそんな事を言ってヘッドホン型の生

体維持装置を操作する。

ヘルメットのバイザーのような力場にピコピコと光る点ができ、その横に読めない文字が浮かび上がった。

「この部屋は人間大の生体反応なし、虫とかネズミぐらいかな。人間ならもつと大きな点が出るはず」

俺はホツとして胸を撫でおろした。

「それ、ここから先ずつとオンにしといてよ」

「別にいいけど、死体はサーチできないんだからあんま深入りしないでね」

マーズの言葉に、俺はこくりと頷いた。

広間を進むと、ちょうど俺たちがいつも陣取っていた場所が岩で潰されているのが見える。

「ありや、こりやくえらい事になってるね」

「もうちよつと崩壊が遅ければ俺達も生き埋めだったかな？」  
「バリアがあるから大丈夫だったんじゃない？」

それはそれで悪目立ちしたような気もするけど……

まあ、悪目立ちなんてのは今更か。

俺は無線機を取り出し『Aベース人なし、奥へ進む』と送信をした。

ノイズ混じりの返信は、事前に組合に報告されていた阿武隈さんチームのキャンプの場所を伝えていた。

## 第11話 期待と猫とデカイもの

「トンボはさ、なんでここまで人を助けに来ようなんて思ったの？」

広間ハベースからちよつと進んだ場所にあつた崩落現場を片づけている途中、マーズは俺にそう尋ねた。

「付き合うのはいいんだけどさ、別に俺もトンボもこの人達には義理も恩もないわけだろ？」

「そりゃあ、俺しかできない事だし……いや……見捨てると後に引きずりそうだから……いや……それも違うか……」

理由をつけようと思えば、いくらでもらしい理由はつけられた。

でも、そうじゃない。

そこをブレさせてしまつては、ガクガク震えながらここまで来た意味がないような気がした。

俺は多分、しかたなくとか、人のためじゃあなく。俺のために、俺の事情で鉄火場にやって来たのだ。

「多分だけど、頼りにされたから……かな」

「頼りに？」

「宇宙じゃどうか知らないけどさ。地球の、日本では、俺みたいな男が誰かに頼りにされる事なんて……多分、きつと、一生、なかつたんだよ」

「そうかなあ？」

「そうだよ。俺みたいな人間の人生はさ、きつと誰にも必要とされない人生だったんだ」

たとえ俺が誰かの隣に立てたって、どこかのポジションにつけたって、別にそれは本当の意味で必要とされてるわけじゃない。

誰だっがいいから、とりあえず置いてもらっているだけだ。

役目を果たすのを諦めたって、バックレたって、舌打ち一つして次の人を探すだけ。

請われてそこに置かれる事なんて、一生ないと思っていた。

もちろん、俺とは違って生まれつき誰からも頼りにされる、掛け替えのないヒーローみたいな人間だっている。



サッカーが上手かったり、顔が良かったり、当たり前のように人と仲良くなれたり……そうなるように、努力ができた。

でも俺は一生そうはなれない。

ゲームや漫画しか好きになれない。

人と胸襟を開いて接するのが苦手で、大学にも友達がいらない。

世間体が許すなら、死ぬまでずっと気楽なピザの宅配をやっていたかった。

こんな誰にでも取って変われる俺の人生に、きつと意味なんかない。

二十年間そう思い続けていた。

今この時まで、ずーつとだ。

でも今ここで俺にしかできない事をやり遂げれば、少なくとも俺の人生には意味があつたつて納得できるんじゃないか。

今いる、地の底（じのそこ）を置いて、俺の人生に命を賭けるべき場面なんてやって来ないんじゃないか……

そんな考えが頭をグルグルし始めていた俺の耳に、なんだか心配そうなマーズの声が届いた。

「トンボ、そりやちよつと悲観的すぎない？」

「そうかな？」

「そうだよ」

そうかもしれない。

俺はそう思って、少しだけ目を閉じた。

でもそうは思っても、すぐには変わらないのもまた、俺だった。

「でも人から必要とされてないと、ズーっと思ってたからさ。かけられた期待には応えたいんだよ、多分ね」

「それって……上で待ってる人達の期待？」

「それと、自分からの……かな」

マーズはあんまり興味なさそうにふーんと言って、ポンと俺の腹を叩いた。

「何だか知らないけどさ、とりあえず満足するまでやって見たら？ 悪い事するわけじゃないんだし、好きなようにしなよ」

「宇宙人って、あんまこういう事で悩まない？」

「人の事は知らないけどさ、船乗りは悩まないね」

マーズは肉球で髭をしごいて、つまらなさそうに言った。

「助け合うのも頼りにし合うのも、当たり前前の事だよ」

「そういうもん？」

彼は手の爪を出したり引つ込めたりしながら、天井の岩肌を見上げた。

「こーんな狭い星おかにずっといるからウジウジ悩むのさ。宇宙そらに出れば、人なんかいくらいたって足りないんだ。トンボなら頼りにされっぱなしだよ」

「そうかな？」

「そうそう。だいたい、俺は最初からずっとトンボを頼りにしてるのにさ。つまらない事で悩んでんだから」

その言葉にじんわりと胸が暖かくなったような気がして、出かけた鼻水をズズッと啜った。

目を開けたり閉じたりしながら大きな岩を収納すると……バイザー型の力場にチカッと反応が出た。

進行方向の先に、大きな光点が四つ光っていた。

はじめて歩く、Aベースよりも先のダンジョンだ。

俺は物干し竿槍を低く構え、引けた腰をなんとか動かしながら光点に向かってゆっくりと進んでいた。

「誰かいますかあー！」

呼びかけるが、自分の声が洞窟に反響しながら返ってくるだけだ。

光点に近づいてはいるはずなのに、なかなか相手とは出会えていなかった。

「聴覚補助使ってみる？」

「そんなものもあるの？」

「使いすぎると気持ち悪くなるけどね」

器用に俺の肩によじ登ったマーズがちよいちよいとヘッドホン型の生体維持装置をいじると、風や砂の流れる音や、虫の這う音が耳のすぐ近くで聞こえてきた。

「うわっ、これ気持ち悪いな……」

「あんま常用する人いなと思うな。こんなの自分ちで起動しちやつて、棚の裏とかから変な音したら最悪だよね」

それはあんまり想像したくないな……

額に人差し指を当てて集中して音を聞くと、膨大な自然音の中に何か途方もなくデカいものが歩き回る音が聞こえた気がした。

「なんか歩いてる」

「人？」

「いや、地響きもしてる。なんかめちやくちやデカいものがある気がする」

「ヤバそうだね、用を済ませてさっさと引き上げよう」

「待った、もっかい聞くから」

なるべく足音に気を向けず、風の音に耳を澄ませる。

びゅうびゅうと吹く風の中で「おお……い」とか細い声が聞こえた気がした。

「おおい！ 誰かいるなら声出してくれーっ！」

呼びかけてから耳を澄ますと「こつち……こつち……」と声が返ってくる。

洞窟の中だからか、聴覚補助の特性かはわからないが、音が回って聞こえるせいではつきり場所はわからなかったが、俺はなるべく声が大きくなる方向へと進んでいく。

槍を収納し、両手で生体維持装置の周りに壁を作って集音に指向性を作った。

不思議な事に、この日ダンジョンに入ってから魔物は一匹も見えていなかった。

「え、(´・ω・´)？」

「やばいじゃんー！」

音を頼りに辿り着いた先には、崩落した岩が散らばっていた。

いくつか岩が重なった場所からはオレンジ色のテントの残骸が飛び出している。

という事は……生き埋めになってるのか！

崩落現場の前では、ヘッドライトを付けて槍とナイフを持った阿武隈さんと吉川さんが、何匹かの魔物の死体の横に座り込んでいた。

「あ……………う……………誰……………？」

「川島です！ 大丈夫ですか？」

「あ……………テント……………」

「今から助けます！」

俺は阿武隈さんと吉川さんを引きずって少し離れた場所に移動させ、岩を収納して  
いってテントを掘り起こす。

潰れたテントの中にいた二人は、魔物対策で中に組まれていた補強用のパイプに守ら  
れたのか、崩落に巻き込まれた割には軽症と言えた。

もちろん色々な所の骨折や打撲はあるが、意識が戻らない吉川さんや、足が折れてい  
て立てない阿武隈さんよりはマシだった。

しかしテントの二人も心の方は軽症とはいかないようで、震えながらわんわんと泣い  
て話もできない状況だ。

俺は歩けない二人を一人ずつ調達屋の看板に乗せて、引きずって広間<sup>ハベ</sup>へと運び始め

た。

全員が満身創痍で、誰からも礼は言われない。

思い描いていたヒーロー像とは全く違う、血と汗と悪臭に満ちた、泥臭い仕事だった。きつと多分俺が勝手に羨んで、勝手に恨んで、勝手に諦めた彼らもこうだったんだろう。

俺が知らないだけ、知ろうともしなかつただけだったんだろう。

もう聴覚補助は切ったはずなのに、何かデカイ物の足音がずっと響いて聞こえていた。

明らかな危機が、避けるべき危機が近づいていた。

考え込んだら二度と動けなくなるような気がして、俺はただ体だけをガムシヤラに動かし、闇を駆けた。



## 第12話 鱗と猫と力場神拳

『Aベース、要救護者四名、うち一人意識なしです！ あと奥からなんかヤバいのが来ますよ！』

『こちら気無だ！<sup>きななし</sup> いいか調達屋！ これからうちと雁木<sup>がんぎ</sup>のところで組合の救護部を護衛しながらダイブする！ 恵比寿の連中は安全な所に移送したらあんま動かすな！』

『はいっ！』

『奥から来るやつに追いつかれたら恵比寿の女達放つて全力で逃げろ！ お前はやる事やった！ 冷静になれよ！ ヤケにはなるな！』

俺は広間<sup>Aベース</sup>に移送し終わった阿武隈さん達の前に預かっていたコンテナ類を出し、その隣にスポーツドリンクや携行食を置いた。

ダンジョンの奥からやって来ているヤバい奴は、もうすぐそこまで近づいてきていた。

「救援は来ます、気を強く持ってください。皆さんの荷物は置いておきますので、もし余

裕があれば身支度を」

A ベースからダンジョンの奥へと続く通路に向かう俺の背中に、誰かが言葉をかけた気がしたが振り向かなかつた。

いや、振り向けなかつたのかもしれない。

ちよつとでも躊躇えば、俺のちっちゃい器に入った勇氣は全部こぼれてしまいそうだったから。

「行くの？ 多分こつからは修羅場だよ？」

「マーズ、言つてたじゃん……」

俺はぼつりぼつりと呟くように言いながら、ジャンクヤードに入っていた岩でAベースへの通路をびつたりと埋め直した。

「男には、命の張り時があるって……」

「言つたけどさ、あの時とは状況が違うよ。今度は本当に命がけだ。力場バリアだつて絶対じゃないんだからね」

「……自分とは関係ない人達のために命張つてさ、死んじゃったら馬鹿かな？」

「いいんじゃない？ いかにも冒険者っぽくてさ」

マーズは抱っこ紐から俺の肩へと軽やかに飛び移り、ヘッドセットに取り付いた。

「力場強度のモニタリングはしててあげるから、やってみなよ」

「……心強いよ、ほんとにさ」

俺はジャンクヤードから缶ジュースを取り出して、手の中でシェイクした。

カシユツと軽い音を立てて銃へと変形したそれを構え、闇の中を進んだ。

最初、俺はそれを陽の光だと勘違いした。

別の出入り口にたどり着いて、ダンジョンを抜けてしまったのだと思つたのだ。

しかし、通路を真っ白に染め上げるそれに全身を包まれてはじめて、俺は自分がドラゴンのブレスの中にいると理解したのだった。

「うわーっ!!」

「トンボ、バリアは大丈夫だから! 落ち着いて頭を狙って撃って!」

それは神話の世界から抜け出てきたような竜ドラゴンだった。

途方もなくデカくて、チビるほど怖くて、目を離せないほど美しかった。

ダンジョンの天井を削るぐらいの巨体には、俺の掌ほどもある真緑の鱗をびつしりと纏い、人を丸呑みにできそうなほどの口の端からは白い炎がチロチロと漏れている。

そいつは俺を値踏みするように、口から漏れる炎で煌めく瞳をこちらに向けていた。

「撃って撃って撃って!」

「あああああっ!!」

俺が思いつきり銃の引き金を引くと、ヴァオン!! と唸り声のような音が上がり、竜の眉間に小さな穴が開いた。

銃が発する音と振動が大きくなるにつれて、その穴がどんどん大きくなっていく。

「トンボ! 引き金離して!」

「あつ！ あつ！ そっか！」

俺が引き金を離すと、銃の音と振動がぴたりと止まり、額から血を吹き散らす竜の首が力なく地面に落ちた。

「やった!?! やったか!?! やったよな!?!」

「やったよ」

「良かった……」

俺は脱力し、へろへろと地面に座り込んだ。

いつ漏らしたのかもわからない小便で濡れたズボンを気にもとめず、俺は地面に突っ伏した。

「マジで死ぬかと思った、マジで死ぬかと思ったって」

「まああれはビビるよ……あれ？ トンボ……？ トンボ！ 顔上げて！」

肩に鋭い痛みが走った。

マーズが爪を立てたのだ。

「え……？ マジ!?!」

ビデオの巻き戻しのように、今穴を開けたはずの竜の頭に肉が盛り上がっていた。むくりと頭が持ち上がる。

それが地面から完全に離れる頃には、真っ赤な血に塗れた額にはもうすでに緑の鱗までもが生え揃っていた……

「再生するのかあ……トンボ、これ頭落とさなきゃ駄目だ」

「やべっ！ やべっ！ やべっ！」

俺があたふたと銃を構え直すのと、二度目のプレスが来るのはほとんど同時だった。

「落ち着いて！ プレスでバリアは破れないから！ まず深呼吸」

「はあーっ！ ふうーっ！」

俺が力いっぱい深呼吸をしていると、急にブレスが晴れてドラゴンの顔が現れた。

打ち止めか？　と思っただが、ちよつと視線を下げると俺の腹には真つ白なブレスが吹き付けられ続けているのが見える。

どういうこと？

「やばい！　ブレスが収束し始めてる!!」

「えっ!?!」

ポオオオオオッ！と低く鳴り続けていたブレスの音が、徐々に耳に痛い高音へと変わっていく。

ヘッドホン型の生体維持装置から、ビーツ！　ビーツ！　とアラート音が鳴り始める。

「避<sup>よ</sup>けて！　避けて避けて！　このままじゃ力場が飽和する!!」

「え？　あ？　うわああああああつ!!」

パニックになった俺は、避ける事も銃を撃つ事もできなかつた。

ただ手を体の前でクロスして、竜の顔へと突っ込んだ。

「バツキイイン！」と音が鳴り、バリアに跳ね飛ばされた竜の首が跳ね上がる。

耳をつんぎくような爆音の後に、収束ブレスに破壊された天井から岩がめちやくちやに降ってきて俺の後ろの通路へと降り注いだ。

「どうしよどうしよどうしよーっ！」

「とにかくブレスを吐かせないで！」

「えっと、頭を狙って、頭を狙って……」

「何でもいいから撃っちゃえよ！」

しかし俺が銃を構えて竜の方を向くと、そこに竜の頭はなく……

その代わりに地すべりのような轟音と共に、竜の尻尾が削り取った岩壁と共に叩きつけられた。

再びバツキイイン！と音が鳴り、竜の尻尾は地面を削りながら元の場所へと戻っていく。

怒りに狂った竜は目にも留まらぬ速度で無茶苦茶に暴れまわり、奴が壁や床に体を叩きつけるたびに地面は揺れまくり、俺は立っているのもやつの状況だった。



ダンジョンはどんどん削り取られ、壁や天井には亀裂が入って崩落し、見るも無惨な姿に変わっていく。

やはり、今日の崩落はこの竜が原因だったのだろう。

「トンボ、ブレスだ！」

「あつ！ やべっ！」

真つ白に光る口からブレスを吐こうとする竜に身を屈めながら走り寄り、俺はまたバリア体当たりで相手の体勢を崩す。

ブレスを邪魔された竜は俺に噛みつきこうとするが、バリアに阻まれて後ずさった。

「やばい！ 怖いよ！」

「吐かれる方が怖いでしょ！」

「撃つよ！」

「撃ちまくって！」

俺は竜の頭に向かって引き金を引くが、なんと竜は首や体をかわして致命傷を避け始

めた。

撃てば穴は開くのだが、高すぎる再生能力のせいで開ける端から再生されてしまうのだ。

「一旦退却……」

「無理だよ！ 後ろは岩で塞がってる！」

後退は不可能。

かといって竜の脇を抜けて逃げようにも、竜の向こう側も落石で埋まってしまっているようだった。

「こんなところで生き埋めで窒息死は洒落になんないよ！」

「窒息しない！ 生体維持装置は宇宙空間でも耐えられるって言ったろ！」

「じゃあ竜が窒息するのを待てば……」

「何時間かかるのさ！」

ん？ その手があったか！

こっちは窒息しても死なない、竜は死ぬ。  
ならさっさと空気をなくしちゃえばいいんだ。

「マーズ！ 酸素をなくして！」

俺はジャンクヤードから空気清浄機代わりに使っていた空気組成変換器を取り出すと、マーズは大きく目を見開いた。

「その手があったか！ フルパワーで酸素を窒素に変換！ 力場の中で変換したら僕らまで窒息しちゃうから、これは地面に置いて壊されないように守って！」  
「了解!!」

マーズが設定を変えてくれた空気清浄機を地面に置いて、俺は竜と向かい合う。  
もう音としても聞き取れない、足元の小石を吹き飛ばすような咆哮を放ち、竜は首を鞭のようにならせて俺のバリアを打つ。

「くの！ くの！」

バリアで弾きながら銃でバシバシと竜の体を撃って、なんとか時間を引き伸ばしていき。

それでもじりじりと竜がこちらににじり寄って来るので、俺は銃をジャンクヤードにしまい、両手に黄色い力場伝導布をぐるぐると巻き付けた。

「来るなら来い！」

竜の噛みつきを力場<sup>バリア</sup>パンチで跳ね返し、ブレスを吐こうと開いた口を力場アツパーで閉めさせる。

一度も攻撃は喰らっていないはずなのに、アドレナリン全開で力いっぱい動いたせいか体中の筋が痛かった。

「酸素濃度低下してきてるよー！」

「よしー！ よしー！ よしー！」

もう竜の口の端から、白い炎は出ていなかった。

酸欠のせいか巨体はフラフラと揺れ、剣（つるぎ）のような牙の並ぶ口はパクパクと力なく開閉するだけだ。

クルツと、後ろを向こうとした途中の姿で竜は倒れた。

尋常ならざる再生力を持つていても、ない物（もの）を取り込む事はできなかつたようだ。

俺は少し離れたところからその最後を見守り、そつとその軀をジャンクヤードの中に収納したのだつた。

帰り道は行きと比べればとんでもない時間がかかつた。

竜が暴れて道を崩落させまくつた影響もあり、更に俺達自身がはじめて足を踏み入れた領域という事もあり、方位磁石を使つても迷いまくつてしまつたのだ。

頼みの綱の無線機もバリア体当たりをした時に落としてしまつていたようで、岩の下敷きになつて壊れてしまつていた。

そのせいで俺達は朝七時に入ったダンジョンを、夜中の三時になつてようやく脱出しようとしていた。

今日はさんざんな日だつた。

バイトも休んじやつたしな。

まあでも、Aベースにいた四人は引き上げられた後だったので、奮闘が無駄にならなかったのは良かったかな。

「しかし、戻ったら入り口コンクリで完全に埋められてたりしてな」

「コンクリは竜みたいに再生しないからゆつくり銃で壊せばいいよ。それよりトンボ……大丈夫？　ちゃんとシナリオ覚えてる？」

「大丈夫だって、竜はめっちゃくちゃに暴れて奥に消えたって事にするんでしょ？」

「あんなん二人で倒せたなんて話になったら大変だよ。僕らが化け物扱いされちゃうよ」

俺だって悪目立ちはしたくない。

いや、もう悪目立ちしまくってるんだけど……これ以上はごめんだ。

英雄になりたくてやったわけじゃないし、英雄がろくな死に方をしないって事も知ってる。

俺はやるべき事をやった。

それだけでいいんだ。

「あ、なんだ良かった、開いてるじゃん」

ダンジョンの入口は普段夜間は閉められている鉄門も開けっ放しで、外から中を照らしてくれているようだった。

「外からライトで照らしてくれてるね。誰か残っててくれたんだ」

「なんか申し訳ないね、こんな夜中まで」

俺は生体維持装置の暗視モードとバリアを切り、光源をLEDランタンに切り替えた。

外に出てみると、入り口を照らす投光器の横にはモコモコのダウンを着た組合の警備員さんが一人、スマホを弄りながら椅子に座っていた。

「あ、お疲れ様です」

「です」

警備員さんはちらつとこつちを見て挨拶を返し、またスマホに視線を戻し、もう一度

こつちを見た。

「……つて！ あんた帰ってきたの!?!」

「すいません遅くなりまして、お手数をおかけしてしまつたようで……」

「そういう問題じゃないつて！ 本部！ 本部！ 川島パーティ帰還!!」

職員さんが無線に向かつてそう怒鳴ると、ダンジョンの隣にある管理組合の建物から大量の人が飛び出てきた。

バラクラバの気無さんのパーティに、二本差しの雁木さんのパーティ、他にも見知つた人達がみんな笑顔で俺達に飛びついてくる。

「調達屋！つ！ 足あるか！つ!?!」

「お前マジかよ！ あの地震の中無事だつたか!」

「人五人も助けて死んじまうなんてアリかよつて思つてたよ!」

「朝まで帰つてこなかつたらもつかいAベースまで捜索に行く羽目になつてたんだぞこの野郎!」



抱きつかれて体中をバシバシ叩かれて、筋肉痛の体がめちやくちや痛む。

マーズはみんなが飛びついてくる前にちやつかり一人だけ離れ、難を逃れていた。

「中で暴れまわってたのって、ダラス十四号と同じ種類のドラゴンだったんだろ？」

「なんですかそれ？」

「知らねえのかよ！ アメリカのダラスを州軍の半分を巻き込んで壊滅させた最悪のラ  
ンドドラゴンだよ！ 伊藤んとこの生き残りのボディカメラに写ってたんだって！  
中で見なかったのか？」

「気無！ 気無！ 見たら死んでるって！」

「あ、そうか」

ギヤハハと楽しげに笑う皆とは裏腹に、俺はなんだか今まで痛くなかった胃が急に痛  
み始めたのを感じていた。

ちよつと離れた所にいるマーズと目を合わせ、静かに頷き合う。

やつぱりシナリオを決めておいて良かった。

俺はみんなにもみくちやにされながら二月の高い月を見上げ、深く細く、ゆつくりと  
ため息を吐いたのだった。

## 第13話 サイバネと猫とサングラス

「それで、冒険者のみんなと酒盛りしてるうちにドラゴンの素材が交換されちゃったんだ？」

「……はい、すみません」

死地から帰還した翌日の夜。

気無<sup>きな</sup>さんや雁木<sup>がんぎ</sup>さんに昼すぎまで飲み屋を連れ回され、大学もバイトもぶつちぎって寝ていた俺は猫のマーズに理詰めで詰められていた。

マーズだって一緒になって騒いでたのに……とも思わなくもないが。

交換は俺の担当だし、言い訳もできないポカだしな……

「別に俺は交換そのものに怒ってるわけじゃないよ、あんなもの地球では使い道がなかったわけだしさ」

「う、うん……」

「でもさ、うっかりつてのは困るんだよね。今後のトンボのためにもならないし」

「もつともです……」

「これまで行つてた稼ぎ場も閉鎖されちゃったんだしさあ。トンボもドラゴンと戦つた時みたいにな、もうちよつとだけしつかりしてよね」

マーズはそう言つて、テレビの電源をつけた。

気をつけます……

『都は本日正午に東京第三ダンジョンの閉鎖を発表。崩落原因の調査のため自衛隊の探索班が調査を開始する……』

「結局ドラゴンの事は言わないんだね」

「そりゃあ言えないって、あんなのがいるってわかつたら東京の人みんな地方に逃げちやうよ。俺達にも箝口令が敷かれてんだから」

「この街つて人多すぎるからちよつとぐらい減つたほうがいいと思うな」

マーズはそう言いながらくあつとあくびをした。

宇宙基準でも人が多く感じるって、やっぱ東京の過密さはどうかしてるんだな。

しかし、俺もまだ眠い……酒も残ってるし。

「それで、ドラゴンは何と交換されてたの？」

「それがパツと見じゃよくわかんないんだよね。一応『ザウート 高速型演算補助ユニット（覚醒）』って書いてあったけど」

「え？ ちよつと出してよ」

俺がマットブラックの歪な球形のそれを机の上に出すと、マーズはやけに重たいそれを机の上で転がしながらフンフン鼻を鳴らして色々と確認し始めた。

ごころごとと転がる玉を肉球で触っているとますます本物の猫みたいだな、などと思っ  
いたら、ふいに目が合った。

マーズとじゃない。

玉の表面にパチツと開いた、二つの黄金の目玉とだ。

「うわーっ!!」

叫びながら全力で後ずさる俺に、マーズはうるさそうに顔を向けた。

「何？ 近所迷惑だよ」

「目っ！ 目がっ！」

黄金の目はギョロギョロと部屋中を見回してから、俺の顔に視点を合わせた。

無機質な瞳だけでじつと見られていると、なんだかこれまでに感じたことのない種類の不安感があつた。

「目ぐらいあるよ、これ脳殻だもん」

「脳殻って!？」

「人の脳味噌が入ってるって事、義体化<sup>サイボーグ</sup>した人のパーツだよ。うちも爺ちゃんが義体化しててさ、俺も一緒にディーラー行ったりしてたんだよね」

「そんっ………！ それっ………！ それって………！ ……誰？」

「そんなもん見ただけじゃあわかんないよ。でも………このユニットがヤバいってのはわかるね」

マーズは脳殻をゴロンと転がして、目の反対側に入っている歪な三角形の刻印を指さした。

「これ見て、これは銀河で一番デカイ銀河警察軍の持つてるパテントを利用していますっていう印」

「つまり……？ その人軍人って事？」

「わざわざパテント料が超高い軍事技術を使ってる部品って事。多分中の人は軍人じゃない。ザウートって娯楽用のハイエンド義体会社だし、何より仕様が特殊すぎるんだよね」

彼は肉球で脳殻をポンポンと叩いて、嫌そうな顔で言った。

「表面に書いてある情報を鵜呑みにするならだけど……これ多分、演算に特化してる。軍で言うなら特殊電子戦装備ってところかな」

「全然わかんないんだけど、それって凄いの？」

「うーん、君にもわかるように言う……この人をネットワークに繋がば、日本の行政ぐらいなら一人で回せるね」

「凄すぎる！」

そしてヤバすぎる。

公務員解雇マシーンじゃん。

「ていうか中に人が入ってるならさ、そのままじゃヤバくない？　なんか繋いであげられないの？」

「うーん、でも海賊から流れてきたっぽい品でしょ？　アム……あ、こつちじゃトロイの木馬って言うんだっけ？　そういう事も考えられるよ」

マーズはそう言うが、もし自分が同じ状況に置かれたらと想像すると、俺はもう気が  
気じゃなかった。

体が動かないのに意識があるまま倉ジャンクヤード庫の中に放り込まれたらと思うと……  
ゾツとするというか、絶対ごめんだ。

因果は回るとも言う。

俺はもし助けられるのならば、この人を助けてあげたかった。

「たしかにそれはヤバいけどさ……ちよつと話聞いてみるだけとか、できない？」

「脳殻って性能と生体維持に全振りだから余計なインターフェースついてないんだよ

ね。あ、でもうちにはアレがあるか……」

マーズは洗って干していたバリア布を持ってきて、脳殻をぐるぐる巻きにし始めた。

「それで巻くとどうなるの？」

「脳殻が発する微弱な思念波でもさ、この力場伝導布を増幅器にすれば拾えるかもしれないだよ。本来の使い方じゃないけど」

「スピーカーが勝手に拾っちゃうラジオを普通に聞ける音量まで上げるみたいな事？」

「その例え、よくわかんない」

彼は銀河警察の生体維持装置とバリア布と宇宙ホロワイジョンテレビを繋ぎ、耳をびこびこさせながらちよつとずつチューニングを合わせていく。

映像こそ映らないが、ざあざあ言っていた音が静かになったり、高音になったかと思えばポーツと太い音になったりする。

三分ほどいじった所で、一瞬だけ人の声のようなものが聞こえた。

「おっー！」



「いけるっばいね」

マーズが更にチューニングを詰めていくと、だんだん声が近くなってくる。

それと同時に、脳殻の目玉がギョロギョロと忙しなく動き出す。

ホロヴィジョンから、男とも女ともわからない無機質な声の謎の言語が聞こえ始めた。

『……蜂ウ漣代※……漣薙%漣九i蜃コ漣励※……』

「なんて言ってるの？」

「助けて、あそこには戻さないで、ってさ」

「大丈夫、戻さないから。大丈夫だから」

そう言いながらつるりとした脳殻を撫でると、その手をマーズにはたかれた。

「ノイズが入るでしょ」

「あ、ごめん……」

『……漣輔i縲上i漣?……綯ヤ綯峨N……譌サ縲翫◆漣上→漣?……諤悶◇……』

「攫われた、レドルギルド、戻りたくない、怖い、ってとこかな。レドルギルドってのは、銀河を股にかける広域指定海賊団だね」

「ヤバいの？」

「ヤバくない海賊なんていないけど、レドルはまっとうな事業もやってるしまだマシな方かな。辺境星系だと交易相手がレドルだけなんて事もよくあるから、海賊扱いされない地域もあるよ」

「海賊相手に交易とか成り立つの？」

「銀河にはそんなぐらい人が足りてないんだよ。千年前からつい最近まで続いていた、でっかい戦争があったからね」

千年……銀河は何でもかんでもスケールがデカいなあ。

『……縛？縛』縛ヲ縛エ纏雑ㄣ縛ウ縛？@縛漚b纏雑□縛？……』

「なんかのコードかな？ 伝えたい事があるんだろうけど、銀河ネットワークにも繋がってないこんなド辺境じゃデコードできないんだよな」

スケールのデカい銀河の猫はぶつぶつ言いながら、手元の紙に宇宙の文字を書き始め

た。

宇宙の言葉だから俺には何がなんだかわからなかったが、同じ言葉を何度も何度も言っていて、なんとなく脳殻の中の人の切実さだけは伝わってきていた。

そのまま十分ほど聞き取りを続けた後、マーズはふうとため息をついて、両手を上げて伸びをした。

「思考がループしてるし、これ以上は無理かも」

「これって対話とかできないの？」

「脳殻の仕組み上、こうやって剥き出しにされると思念波をブロックし切れないって特性を悪用してるだけだからね。思考の上澄みを覗き見てるだけだよ。逆に言えば嘘もつけないから尋問にも使われるんだけど」

「思考盗聴って実在したんだ……」

「何それ？」

彼は不思議そうな顔をしながら脳殻にぐるぐる巻きにされていた布を外す。

「とりあえず、こんなところかな」

「マーズ、俺さ……」

「わかってるよ、なんとかしてやりたいんでしょ？ たしかにこれをなんとかできるのは、この星じゃあトンボだけだろうしね」

マーズの言葉に、俺は頷いた。

さすがに昨日の今日だ、命を賭けるような事はもうまっぴらごめんだ。

しかし、これから先、いつか手に入った義体をこの人にあげるぐらいの手助けはしてもいいと思うのだ。

逞しい冒険者達と比べれば俺の手は短いし、貧弱で、度胸だつてない。

でも自分の手が届く範囲で人に何かをできるようになれば、たとえ直接は何も返つてこなくても、きつと得るものはあるだろう。

俺は昨日の命がけの蛮行を経て、なんとなくそういう考えを持つようになっていた。

「俺だつて氷漬けだった所をトンボに助けられたんだ、別に嫌とは言わないよ」

「ごめんねマーズ、宇宙船を手に入れる目標に一直線じゃなくなっちゃうかもしれないけど……」

「トンボ、宇宙船っていくらするか知ってる？ 元々そんな簡単に手に入るなんて思っ

てないよ」

マーズは肩をすくめながらそう言つて笑い、肉球で俺の腕をポンと叩いた。

「あのさ、体はしばらく手にはいらなかもしれないけど、退屈しないようにテレビはつけっぱなしにしとくね」

俺は脳殻にそう話しかけ、テレビがよく見えるようにカラーボックスの上に置いた。すぐに金色の目がギョロギョロと動きだし、さつきまでと見え方が違う部屋を見回しているようだ。

うーん、脳殻さんには悪いけど、やっぱちよつと怖いな。

俺は東京に来る前に買って結局一度もつけなかったサングラスを筆筒から取り出し……  
それを脳殻の目玉の部分を隠すように設置したのだった。

## 第14話 眼鏡と猫と壊れたテレビ

「川島くん、あの日はお礼も言えなくてごめんね」

「いえ、阿武隈さん骨八本も折れてたんですから……喋れなくて当然ですよ」

ベッドで足を吊つて首を固定された阿武隈さんは、いつもと違って沈鬱な面持ちだった。

ドラゴンを倒したあの日に壊滅した阿武隈さんのパーティーとは縁があつたから一応病院にお見舞いに来てみたんだが……やっぱりこんな大変そうな時に来るべきじゃなかつたかな。

「あ、荷物届けてくれてありがとうね。おかげでさ、女の尊厳は守られたよ」

「あ、はい……はは……」

冗談めかしてそう言う彼女には悪いが、デリケートな話題すぎて全然笑えない。

まあダンジョンで何時間も行動不能になつたらそら誰でも大変な事になるけどさ

……

「それで、怪我は治りそうなの？」

「私はね……多分。でも久美子……あ、吉川はダンジョンから出る途中で心臓止まっちゃったから、今後のリハビリ次第かもって……まあ、生きてるだけで奇跡なんだけど」

マーズの問いにぽつぽつと答えながら、阿武隈さんはサイドテーブルに置いていた眼鏡を震える手でかけた。

そのまま包帯だらけの指でぎこちなくスマホを操作し、俺に画面を向ける。

映っているのはネットバンクの振込画面。

金額は十万円と書かれていた。

「依頼の後金を送金するから、口座入れてくれない？」

「阿武隈さん、それは……」

これから大変でしょうから、と言おうとした俺の太ももに、チクツと痛みが走った。

マーズが爪で刺したのだ。

「駄目だよ、トンボ。俺達は仕事したんだ、そこに相手の都合は関係ない」

「そうだよ、天変地異が起ころうとも、竜や鬼が出ようとも、それが口約束でも、契約は契約だから」

俺は何も言えず、彼女のスマホの画面に銀行口座を入力して返却した。

彼女はゆつくりとした操作で送金を完了させ、ホッとしたような顔で微笑んだ。

「うん、これで心残りがなくなった。これが『恵比寿針鼠』の最後の仕事だったから」

「阿武隈さん、それって……」

「あーちゃん……あ、いや飯田と高井がね、ちよつと心の方がやられちゃって厳しそうなんだよね。さすがにさ、生き埋めはキツかったみたい」

「ああ……」

まあ、誰だってそうなるわな。

いくらめつたにない事だとわかっていても、同じ目に遭う可能性がある以上、もうダンジョンには潜りたくないだろう。



しかし、生き埋めか……

うちの居間にいる脳味噌も、同じような状態だったんだよな。  
やっぱ早めに動けるようにしてあげなきゃな。

「姉さんはこれからどうすんの？」

「うーん、保険受け取って体治して……そこからの足の調子次第かな？ あたし、冒険者これぐらいしかできないし」

「そんな事ないと思いますけど……」

「ところがどっこい、あるんだよね」

首を固められた阿武隈さんは目だけを動かして俺の顔を見て、唇を尖らせた。

「川島くんはさく、ある日いきなりスキルが生えたクチ？」

「へ？ ええ、そうですけど」

「あたしもそうなんだよね。ド田舎で地銀の職員やってたんだけどさ、ある朝いきなり自分の中に『高速思考』ってボタンができてたの」

スキル持ちの人はよく、自分の中にあるスキルを行使するきっかけの事をこういう表現で表す。

ボタンとか、レバーとか、スイッチとかだ。

俺のジャンクヤードのように、詳細なインターフェイスがあるスキルのほうが珍しいのだ。

「びつくりして親に話したのがよくなかったんだろね。次の月には地元の自警団のスキル持ちのおじさんとの婚約が決まった」

「ええ……そんな事あるんですか……？」

「あるんだよ。東京とは違って地方は魔物の被害が深刻だから、何が何でもスキル持ちの血統を残そうと必死になっててさ。下手に若い女がスキルなんて持ったらもう、人権なんかないよ」

阿武隈さんは苦々しげな顔でそう言って、包帯だらけの右手の指を左手でぐつと押さえてピヨコンと中指を立て、ニヤツと笑った。

「だからさ、夜逃げして東京に逃げてきた。会社もいつの間にか退社する事にされてて

さ。これからは良き母としての活躍を願います、なんて支店長に言われてさ。めっちゃくちゃムカついたんだよね」

「そりゃ酷いよね」

「そうなんだよね。ぶっちゃけ、こんなスキルいらなかったなあって思うよ。あたしみたいな馬鹿が『高速思考』したって何の意味もないじゃんって思うもん」

「んなことないと思うけど」

俺は話に入っていく事ができなかつた。

世が迷歴に移ってから、人々の中に突然芽生え始めたスキルちからという力。

ぶっちゃけ、その当たり外れはすげー激しい。

正直言つて俺が偽装してるアイテムボックスなんてのは、超大当たりのスキルなのだ。

スキルで苦労した阿武隈さんに八つ当たりされたっておかしくないぐらい、俺は恵まれているのだ。

「だからさ、私は地元にも帰れないし、東京で堅気の仕事やるにしてもこの不況じゃあね……」

彼女は目玉だけを動かして、ちらりと窓の外を見る。

二月の東京には、雪が振り始めていた。

「わお、雪だ……川島くん、明日も学校でしょ。電車止まる前に帰った方がいいんじゃない？　ちゃんと卒業しないと……冒険者になっちゃうからね」

そう言つて、阿武隈さんは限のある笑顔でぎこちなく笑つて見せたのだった。

そして俺達『調達屋』自身の商売はというと、こっちはこっちで少し足踏みしてしまつていた。

連日自衛隊による探索が続いている東京第三ダンジョン。

その事情聴取に、何度も組合に招聘されていたからだ。

ドラゴンの情報、当日の状況など、同じ事を何度も聞かれ。

当事者として会議に参加させられ質疑応答を受け、また同じ事を聞かれ。

自衛隊の部隊と一緒にダイブしての現場確認を要請されて断り、そのついでにまた同

じ事を聞かれ。

俺は犯罪者じゃねーっつーの！

多分俺が会敵したと申告した地点以降に痕跡がないから何かを疑われてるんだろうけど、さすがに「もう倒した」とは絶対に言えないのが辛いところだ。

一応建前としては任意協力という事で日当が出ているが、正直言つて大損失だった。

「俺学生だつて言つてるのにさ、学校ある日まで呼ぼうとするんだもんな」

自衛隊への協力と、日々のバイトが終わり、部屋に帰ってきた俺はカップラーメンを啜りながらマーズにそんな事を愚痴っていた。

「まあでも、お上<sup>かみ</sup>つてのはそんなもんだよ。それに多分相手は相手で、ヤバいのがいるのがわかってるのに何のんきに学校なんか行つてんだこいつつて思ってるんじゃない?」  
「あ、たしかにそれはそうかも……」

そう思うと、すぐさま東京を脱出しなかったのは余計に不自然だったかな?

まあもう後の祭りか……

「トンボも自分で言ってたけど、普通は東京から逃げようとするんじゃないの？ 二本差しの兄さんもしばらく実家の方のダンジョンに行くって言ってたし」

「こんな目に合うなら、俺達も実家帰ればよかったかな……」

「それも良かったかもね。美味しいもの食べれるし、隆志のお酒もまだまだ飲んでないしね」

酒好きのマーズは、彼に甘いうちの親父のコレクションを虎視眈々と狙っていた。

親父のやつ、俺にはいい酒を飲ませてくれないのにマーズには簡単に飲ませるのだ。

俺は第三のビールを飲みながら、辛気臭いニュースばかりのテレビのチャンネルを変えするためにリモコンを操作した。

「……あれ？」

しかしチャンネルは変わらず、二度三度とボタンを押し込むが、画面にはニュース番組が表示されたままだ。

「電池切れ？」

「あー、明日買ってこなきゃ」

そんな話をしている最中に、ブツッとテレビの音声が止まった。

「あ、テレビの方かも。これもこつち来た時にリサイクルショップで買った古いやつだからな」

「家にいる間はズーっとつけっぱなしだしねえ」

俺が一応コンセントを抜き差ししてみようと思つて立ち上がった瞬間、またテレビから音が聞こえてきた。

しかしそれは、さっきまで流れていたニュース番組の音ではなく……

『トンボ、コッチ、ワタシ』

男とも女ともわからない、無機質な日本語だった……

## 第15話 コードと猫と有料放送

『カラダ、ホシイ、トンボ』

「結局これってどういう仕組でテレビにアクセスしてるわけ？」

「それがわかんないんだよね。構造的にできないはずだと思ってたんだけど」

ひとりでにテレビから流れ出した声にひとしきり驚いた後、俺とマーズは恐らく脳殻の仕業だろうと当たりをつけ、この間使った思考盗聴を利用して調査を開始していた。

『マーズ、トンボ、トモダチ』

「あー、やっぱり脳殻このひとだね。思念波で何かを操作してるっぽいな」

「ええ？ それってどういう事？」

「多分ネットに繋いでどつかで思念波を増幅してるんだと思う。演算特化型にとってこの星程度のセキュリティなんかなくても同然だから、どこでも繋ぎ放題だろうしね」

『ムシ、シナイ、ホシイ』



マーズはバリア布と生体維持装置を持ったまま部屋を歩き回り、布を持った肉球をダウジングのように動かし始めた。

「君、勝手にどっかに繋いでるの?」

俺が話しかけると、急に脳殻は静かになった。  
言いたくないのね。

「トンボ、見つけたよ。ゲーム機のWi-Fiモジュールからどっかにアクセスしてるみたい」

「え? うちの家ネットないけど……」

「多分機能を利用してよその家のルーターに飛んでるんだよ。どっかからぐるっと回ってこのテレビに干渉してるんだと思う」

『トンボ、カラダ、トンボ』

マーズが無言でバリア布を脳殻にかけた。

『ミエナイ、コワイ』

「体体って言われてもさ、俺達の普段の話聞いてたらそんな簡単なもんじゃないってわかるでしょ?」

「そうそう、トンボのスキルって融通利きそうであんまり利かないんだから」

『アル』

俺は脳殻から布を外してやり、カラーボックスの上の定位置に戻してやった。

「そんで、この人が勝手によそのネットにアクセスするのを防ぐ方法とかないの? 無

茶苦茶されたら怖いんだけど……」

「そんな簡単な事じゃないんだよね。目処が立つまでジャンクヤードに戻しとくとか?」

「いやさすがにそれは……」

『アル』

「じゃあゲーム機捨てる?」

「いや、それもちよつと……」

『アルヨ』

マーズは心底嫌そうな顔でカラーボックスの上をチラ見し、俺の太ももをポンポンと叩いた。

「……トンボ、何か言ってるよ」

「……なんで俺に振るんだよ？」

「トンボが拾ってきたんだからさ、ちゃんと面倒見なよ」

拾ってきたって、犬猫じゃないんだから……

と思いつつも、俺はマットブラックな脳殻と目を合わせて尋ねた。

「さっきから何が言いたいの？」

『ハウハウ、アル』

「体を手に入れる方法？」

『シテイ』

「シテイ……？」

『コウカン、カラダ、シテイ』

「交換相手に交換対象を指定するって事……？ どうやって？」

『テガミ、イツシヨ、コウカン』

「あ、手紙を添えるって事か……なるほど！ 頭いい！」

『ナルホド、デシヨ』

はしゃぐ俺をよそに、マーズはうーんと唸って顔を上に向けながら顎をかいだ。

「なんで気づかなかったんだろ……って言いたいとこだけど。正直その発想はあった。でも使わなかったんだよね」

「え？ なんで？」

『カイゾク、キニナル』

「その通り、交換先がほぼ確定で海賊なのが問題なんだよ」

マーズは腕を組んで首を傾けながら、なんとも言えない顔で続けた。

「個人が海賊と取り引きするところくな事がないんだよね。海賊宛てに書いた手紙はほぼ確実に保存されて、協力者として銀河警察に認識……なんなら海賊にこっちの正体の特

定されて、後で脅されたりとかもあると思う」

「え、それってこれまでの交換は大丈夫なの？」

「まあ、これまでは証拠もないしね。あくまで、踏み込んで利用しようとするをややこしいって事」

「そっか、じゃあやめとこ」

帰った後でマーズの負債になるぐらいなら、今のままコツコツやった方がいい。

俺はそう決めたのだが、脳殻は諦めなかった。

『キンキュウ、コード、アル』

「なにそれ？」

「それって君の元組織の人にだけわかる符帳ふちようって事？ 元の組織にも市場系マーケットの能力者が

いたんだ」

『イタ』

きっとその人の俺のジャンクヤードとは違って、交換する物を選べる神スキルなんだろうな。

『縲エ綱才縲ツ縲ケ綱？Φ適句ヨカ雉？?シ董眺戟圍？舞髮』縲ウ綱シ綱？』  
「だから直で言われたって今の環境じゃデコードできないんだってば」

マーズがそう言うと、脳殻は金色の瞳をギョロギョロと動かして、目を閉じた。

『コツチ』

「おわっー！」

俺のポケットの中から声がした。

スマホを取り出すと、通知画面に『（^）（^）／』という顔文字が出ていた。

おいおい、自由自在のスーパーハッカーだな。

「スマホに入るのはいいいけどさ、勝手にメッセとか覗かないでよ」

「別にいいでしょ。トンボ、友子おかあさんとしかやりとりしないじゃん」

「そんな事ないだろ！ 高校の友達とかからもあけおめってメッセーヅ来たし！」

「その友達って男でしょ？ 二本差しの兄さんとか、いっつも女の人とやり取りしてた

「よ」

「あんなラノベの主人公と比べるなよ！」

ピコンとスマホが鳴る。

通知画面には『(TOT)』という顔文字が表示されていた。

やかましいわ！

俺は棚の上に積んでいた着替えのTシャツを、脳殻にパサツとかけた。

『ミエナイ、コワイ』

「そんで、スマホにアクセスして何がしたかったの？」

『カラダ、モトム、アングウ』

ピコンとスマホに通知があった。

『コレ、ツカウ』

脳殻の操作だろうか、フォトアプリが勝手に開く。

その一番最新の項目には、抽象画の一部にも見える謎のマークが追加されていた。淀みない操作は続き、メール画面が開いたかと思うとそこにはコンビニプリントの受付番号が表示されていた。

『インサツ』

「うお……プリント番号まで……」

「手際いいね」

身体をなくす前はさぞ仕事のできる人だったんだろう。

俺も呼び捨てではなく、脳殻さんと呼ぶべきかもしれないな。

『インサツ、オネガイ』

「わかったよ」

俺はすぐに夜中のコンビニへ走り。

プリントしてきたマークを二箱分のミカンひとつひとつに貼り付けて、さっそく放流した。



交換はすぐにされるわけじゃない、仕込みは早め早めにやっておくのが肝心だ。

『アリガト、トンボ』

「まあ、これぐらいならいいよ」

きつと今後もこうしていけば、いつかは脳殻さんの身内に届くだろう。

そうしたら……脳殻さんの体の後にでも、他の物も頼むのは許して貰えないかな？

「マーズ、脳殻さんの体が手に入ったらさ。次は宇宙船を頼んでもらえないか頼んでみようか？」

「そうすると今度はそっちに借りができちゃうんだけど、まあ海賊よりはいいかな」

『タノム、イイヨ』

気前のいい脳殻さんの言葉にマーズはウンウンと頷き、彼は脳殻さんにかかっていたTシャツを無言でどけた。

『ミエル』

「やっぱり知恵出す人が一人増えると変わるね」

「調子いいなあ。さつきまでジャンクヤードに戻したら？　なんて言ってたのにさ」

『モドス、ダメ、ダメ』

「戻さないけどさ、テレビは普通に見たいかな」

脳殻さんは俺の言葉に、ジャックしていたテレビを無言で元に戻した。

まあ、どうやってるのはかは知らないけどスマホでも喋れるわけだしな。

俺がチャンネルを変えようとしてリモコンを手に取ると、ボタンを押す前に自動でチャンネルがバラエティ番組に切り変わった。

脳殻さんか……この番組見たかったのかな？

というか、テレビをテレビとしても操作できるって事は……

「……あ！　もしかしてこれって……脳殻さんに頼めば有料放送も見れるんじゃない？」

「え？　映画のチャンネルの奴？」

俺が脳殻さんをちらりと見ると、パッとテレビの画面が変わり、古いアクション映画

が流れ始めた。

なかなか地上波ではやらないマニアックなタイトルだ。

「うおっ！ いけんじゃん！ 俺このチャンネル子供の頃からずっと見たかったんだ！」

「いや、ハイエンド義体使ってハッキングしてまでやる事かなって感じだけど……まあいいか」

すでに夜明けが近い時間になっていたのだが、俺とマーズはテレビの前に座って第三のビールの蓋を開けた。

俺達は特に見たくもなかったはずの映画をしっかりと朝まで楽しみ……

そのまま完徹で学校に向かった俺は、出た授業の全コマを完全に爆睡してしまったのだった。

宇宙船交換計画の方には進展が出たが、ならば肝心要の交換物を手に入れるための金儲け計画も進めなければならない。

という事で、俺とマーズは自衛隊からの呼び出しが途切れたタイミングで遠出をし、

荒川のほとりにある東京第四ダンジョンへとやってきていた。

「東京の川つてき、なんでどこもこんなに臭いの？」

「あれ？ そうかな？ 臭い？」

「臭いよ。トンボ達つてさあ、匂いに鈍感なんだよな」

マーズはそう言いながら、肉球で小さな鼻を隠した。

「まあまあ、ダンジョンの中は臭くないかもしれないし」

「中は魚臭いんでしょ？」

「カビ臭いかもよ」

東四とうよんには中に入って八キロほど行ったところに安全地帯の湖があるそうだ。

ダンジョン産の魚を求めて釣り人が多く訪れるそこならば、きつといい商売ができるだろう。

なんだか嫌そうな顔のマーズをなだめ、なんとか管理組合の事務所に入場登録に向かうとしたところでピコンとスマホが鳴った。

「なんだろう？」

わかあさん  
「友子じゃない？」

ポケットから取り出したスマホの画面には『ジエイタイ、カンシ（P——）』という文字と共に、五ヶ所にピン留めがされたこの近辺の地図が表示されていた。

えっ！ マジかよ……

そこまでするの!?

俺が震える手でマーズに画面を見せると、彼はそのまま無言で踵を返して駅への道を戻りはじめた。

結局、地球の組織に見せられない技術パリアがある俺達はダンジョンに潜るのを諦め、そのまま駅そばを食って帰ったのだった。

## 第16話 童貞と猫とキラキラネーム

「こんな事していいんだろうか……?」

「いいんじゃないの? 先に仕掛けてきたのはあっちじゃん」

『イイノ、イイノ』

今俺達は部屋のテレビで、自衛隊ダンジョン対策部隊の会議を覗き見ていた。

自衛隊の人のパソコンをハックしているようで、音は割と綺麗だが映像は厳しい表情のおじさんの顔で固定されていた。

『それで、東京九号となる予定のランドドラゴンを最後に確認したパーティ、調達屋についで報告ですが……』

「おっ! きたっ! 俺達、自衛隊からも調達屋って呼ばれてるんだ」

「トンボ……うるさいって……」

「あ、ごめん……」

迷惑そうな顔で口の前で指を立てるマーズに頷き、俺は口をつぐんだ。

『専門家によると、あの規模の崩落を防護系のスキルで切り抜けるのは不可能。それとアイテムボックススキルの容量についても、現場から消えた岩の量からして通常のスキル保持者とは桁違いの能力を持っているとの報告です』

『未確認のスキルを保持している可能性があるという事か？ 調査部は何をしていた』

『今の議題はその件とは関係ないでしょう、だいたい冒険者の連中は身内にも手の内を明かしません。スキルに関しては探るのは難しいと思いますが』

『調査班の監視にも気づいている節が見られます。一昨日は東四に入る直前に突然引き返したそうです』

『監視に気づいているという事か？ 報告書には個人の冒険者とあったが、他国のスパイじゃないだろうな？』

『あんなあからさまに怪しいスパイいませんよ』

真剣な声色でいきなりそんな事を言われて、俺は思わず吹き出してしまった。

「言われてるよ、調達屋さん」

「そりや怪しいだろ、黄色い布グルグル巻きにして猫吊ってんだもん」

我ながら怪しい格好だとは思ってたけど、改めて人から直接言われると恥ずかしいな。

でも安全第一だから、今後もダンジョンに潜る時はイエローキャットマンになって潜る事になるだろう。

『それより！ ドラゴンはどうなんだドラゴンは！』

『三宿の隊がCベースまで搜索しましたが、新しい痕跡は出ていません』

『あんな化け物が見つからないままでは誰も納得せんぞ！ 東京が火の海になってからは遅いんだ！』

『化け物なんかダンジョンの中にくらでもいるじゃないですか、東京が火の海になってないのは都民の運がいいからですよ、運が』

『林田あ！ 貴様恥ずかしくないのか！ 国を護る我々がっ！ こうして何もできず手をこまねいているのがだ！』

『気合や羞恥心でなんとかなったなら金沢は海に沈んでないって事ですよ！』



その後も会議は紛糾し、都民としては憂鬱になるようなギリギリっぷりがなんとなくわかってきた。

自衛隊の人も大変なんだな……

「脳殻さん、これって今後も監視してもらったりできる？ 何か俺達に対する動きが

あった時に教えて貰えると助かるんだけど」

『ミハル、イイヨ、デモ』

「でも……？」

『ノウカク、チガウ』

俺はちよつとびっくりした。

動ける体が欲しいという事、それ以外で何かを主張する脳殻さんを見るのははじめてだったからだ。

「それってどういう事？」

『ノウカク、ヨブ、チガウ』

「ああ、脳殻さんって呼ぶのはやめろって事？」

『ソウ』

俺はなぜだか、ちよつとだけドキドキしていた。

ここ数日で、謎だらけだけど仕事は早くてちよつとお茶目な脳殻さんに慣れてしまっていたからだ。

意思疎通はできているようだけれど、個人的な事を聞いたって答えてくれる相手じゃないと思っていたのだ。

そんな脳殻さんの初めて触れるパーソナルな部分は、俺の予想もしていなかった角度でやってきたのだった。

『ワタシ、ヒメ』

「……ヒメ？ お姫様のヒメ？」

『ソウ』

……うーん。

もしかして、脳殻さんって一人称が姫の人？

俺とマーズは顔を見合わせ、数秒の間押し黙って見つめ合った。

「……なんか前から思ってたけどさ。この人、だいぶ豪気じゃない……?」

「ていうか脳殻さん、女の人だったんだね……」

「わかんないよ? 地球じゃあどうか知らないけど、宇宙じゃあ自分の事を姫なんて呼ぶ人は結構ややこしかったりするんだよ。僕の知ってる自称姫の人って女性義体になった元男性の殺し屋だったしね」

いや、もしかしたら地球でも自称姫はややこしい人かもしれない。

俺が高校の文芸部オタサーの女王として君臨していた、一人称『姫』の女性を思い出している  
と……

脳殻さん改め姫様から物言いが入った。

『チガウ、ヒメ』

「何が違うって?」

『ホント、ヒメ』

自称じゃなくて、マジで名前がヒメって事?

「マーズさあ……一応聞くけど、マジモンの王族って可能性はないの？」

「ないない。マジの王族を海賊がさらったなら、凄いニュースになってて俺も知ってると思う」

それはそうか。

「それにほんとの王族だったら、ハイエンドとはいえ一般流通の義体なんか使おうと思う？ しかも脳殻なんて義体化の中枢部品なんだから、なおさらないね。値段は天と地の差だけど、フルオーダーメイドの方が絶対的に安全性が高いもの」

言われてみれば、そうかもしれない。

「もしかしたらただけど……中の人はまだ子供で、親に姫、姫って言われて育てられたんじゃないかな」

『ヒメ、オトナ』

「うーん……そんな気もしてきた」

喋り方がぎこちないから、余計に幼い印象を受けちゃうんだよな。

「それか本名が姫なのかも。たまにいるよ、本名王子様とか。ああいうのってたいてい本人はまともなだけに気の毒で……」

「あ、キラキラネームって宇宙にもあるんだ……」

ぶつちやけ俺もキラツてるからな。

なんか他人事に思えなくなってきたな。

「まあでも、普通は改名するからね。そうだとしたらやっぱり、名前に違和感を持たないぐらい年若いのかもしれないね」

「たしかに俺も子供の頃はトンボって名前をカッコいい名前だっと思ってたな……」

キラキラネームで子供で、宇宙海賊に攫われて脳殻剥き出しで地球流しか……

そう思うと、なんだか彼女？ がますます不憫に思えてきた。

「あの、姫様……体を取り戻しても、辛かったら地球でしばらく休んでっていいからね。一旦距離を取れば、きっと親との関係も冷静になつて考えられるはずだから」

『ヒメ、ヤスム』

「トンボ、何の話してんの？」

名前に縛られない猫にはわからない話だよ。

俺は名前がついたことによつて、なんとなく親しみやすくなつたマットブラックの脳殻をつるりと撫でた。

『ナニ、トンボ』

「トンボさあ、仮にも女の人の脳殻にあんまり気安く触らない方がいいよ。そういうのつて地球じゃセクハラって言うんでしょ？」

「え？ そういう扱いなの？」

「当たり前じゃん。トンボには縁がないかもしれないけど、地球人の女の人にもやつちやだめだよ」

「や、やらないよ……」

なんか宇宙人の猫にこういう説教をされると、他の何よりも心にくるものがあるな。たしかに、気安くて軽率だったかもしれない……気を付けよう。

『トンボ、モテナイ』

「別にモテナいわけじゃないよ。女の子の連絡先も知ってるし」

クラスの委員で一緒になった子だけど。

二人でコンビニの前でジュース飲んだ事もあるし。

「連絡してるとこ見たことないよ。妹の千恵理チエリからもモテナいオタクって言われてたじゃん」

『オタク』

「余計な事教えなくていいから」

「教えなくても勝手に検索すると思うよ」

『モテナイ、ヒト、ドウテイ』

「……童貞じゃねーよ!」

幼子認定した脳殻の姫からの心無い一言は、俺の心の柔らかい部分に突き刺さり。部屋に木霊した叫びは壁にかけられた宇宙の吸音剤に全て吸い込まれ……  
幸いにも、ご近所迷惑になる事だけはなかったのだった。



## 第17話 ワインと姫と日焼けマシーン

「これ、骨だけだけど大丈夫なの？」

「合成タンパク質がボディを構成するから、これでいいんだよ」

もうすぐ春休みも終わりそうな三月の末の事だ。

普段倉庫にしていたうちのILDKの和室に、でっかい日焼けマシンのようなものが鎮座していた。

中は姫様こと首から上だけになった義体と、その体となる首から下の義体、そしてそれらを包み込む謎の液体で満たされている。

そう、うちのお姫様の体の再生環境が整ったのだ。

これは自衛隊からマークを受けたおかげでダンジョンに行けなかったこの一ヶ月と少しの間に、姫様の紹介してくれた市場マーケットスキルの持ち主とコツコツやり取りして揃えた物だ。

正直あまりのデカさに床が抜けないか心配だったのだが……

マーズ曰く、反重力ユニットが搭載された高級品だそうで、たしかに俺がヒョイと持

ち上げられるぐらい軽いものだったので一安心だ。

「あとはこれで待つだけ？」

「先方からの手紙にはそう書いてあるけどね」

俺に向けて読めない文字の手紙をピラピラと振ったマーズは、ちらりと日焼けマシンの中を覗いて、パタンと蓋を閉めた。

「しかし、これからどうしようか」

「ほんとだよ、まさかジャンクヤードにサイズ制限があつただなんて……」

「あんなでつかい童がいたんだから、まさかあるとは思わないよね」

「ここしばらくで一番の驚きといえは、姫様の仲間から告げられた、ジャンクヤードにサイズ制限があるという報告だった。」

「宇宙船って、やっぱりデカイの？」

「当たり前じゃん、中に乗って生活しながら旅するんだよ？ そりゃ連絡船みたいな小

さいのものもあるけど、トンボ達だって小さい船で海渡らないでしょ」

「海なら潮目次第でワンチャン渡れたりするけど、宇宙だもんなあ……」

「そりゃ軍用だと小さいのに亜空間航行機能付きの凄いものもあるらしいけど、いくらするのが見当もつかないよ。それに多分、あの竜よりは絶対デカイし」

俺達はリビングに移動して、寝転んで天井を見上げながらぼやくように話し合った。

「前にもちよつと話したけどさ。でつかいのをバラバラにしてちよつとづつ送ってもらおう事って、やっぱできないのかな」

「テレビCMでやってる毎号付録がついてくる雑誌みたいに？ 自分で組み立てて、それで宇宙行くの？」

俺は自分が溶接機で宇宙船を組み立てている所を想像した。

うん、絶対乗りたくない。

「……よく考えたら、それは怖いよね」

「怖いっていうか、死んじゃうよ」

マーズは寝転んでいた床をポンと肉球で叩いて立ち上がり、腕を天に突き上げて伸びをした。

「ま、駄目なものはないんだよ。くよくよしててもしょうがない」

マーズは台所からチリ産のワインと湯呑みを持ってきて、布団を外したコタツ机の上に置いて手酌で注いだ。

「ひとつひとつやっていけばいいのさ。今日は姫の体の件が片付いた。それでいい、祝杯だ」

「待った、俺も飲む」

俺も台所に行き、マグカップと落花生を持って机へと戻る。

「とりあえず、姫様に」

「とりあえずはいららないよ」

「じゃあ、姫様に」

湯呑みとマグカップがコンと音を立てる。

俺達は隣の部屋から聞こえるゴポゴポという水音を聞きながら、部屋中の酒がなくなつて寝落ちするまで痛飲したのだった。

「起きて、トンボ」

「へ………？ は!? 誰!？」

翌朝、頭ガンガンの俺を揺り起こしたのは謎の美女の甘い声だった。

「姫だろ」

「姫だよ」

「あ、なんだ姫様か……え!? マジ!？」

正直元がああのマットブラックの脳殻だったから、人間の姿なんて想像もしていなかったわけだが……

それだけに、今の姫の姿は衝撃だった。

俺より少しだけ低い身長に、時々虹色に瞬くミルクティー色の長いツインテール、ツンと高い鼻、芸能人でもなかなか見ないレベルのツリ目がちの大きな瞳。

俺がこれまで見た事もないような絶世の美女がそこにいたのだ。

正直、俺は女性があんまり得意じゃない……というか苦手だ。

特に美人を前にすると、ビジネスモードに入らないと緊張して上手く喋れなくなるのだ。  
が、しかし。

俺は姫のこの姿が自分で自由に設定できる、いわゆるアバターみたいなものだという事を知っていた。

さすがに俺だって、アバターに緊張するほど子供じゃない。

ほぼ平常心と言ってもいいだろう。

正直、一ミリもドキドキしていなかった。

正直、平常心。

正直、ビークールだった。

正直、いつも姫にしていた通りに軽く挨拶できるはずだ。

まあでも、ちよつとはドキツとしたかな？

ちよつとだけね？

「あのあのあのあの、姫様……ですか……？」

「は？ トンボ、なんであんたそんなキヨドってんの？」

「いやそんな、キヨドってなんて、もちろん、はい、全然つすよ。いつも通り」

「全然違うでしょ」

なんか緊張しすぎて、急に自分の姿勢が気になってきた。

俺ちゃんと立ててるかな？

「トンボはさ、姫が猿型人種ウエドソン人で言うところの美形だから緊張してるんじゃない？」

「へえ、トンボあんた、姫に見惚れちゃってんだ？」

「あの、その、見惚れるとかそういうのじゃなくて、へへ……あの、その、すみません……」  
「髪の毛二本分けて気が強いツリ目の美人って、いつもトンボがゲームで選ぶタイプの女の子だもんね。なんかトンボの弱いところが全部出た感じあるなあ」

しょうがないだろうが！

こんな美人、会った事ないんだから！

「ま、世の男共が姫の前にひれ伏すのは当たり前だけど……話が進まないから、さっさと慣れて！」

「はいっ！」

姫、中の人はこんな感じだったんだ。

これまでとキャラ違う、違うくない？

「ていうかマジでびっくりしたけど、姫って本当に姫だったんだね」

「当たり前じゃん」

「え？ 本当に姫って何の話？ 王族じゃないって言ってなかった？」

「あれだよ、あれ。トンボもホロサイン持つてるじゃん、姫はユーリ・ヴァラク・ユーリだったんだよ」

「え？ ああ、価値があるからってキープしてた奴ね」

たしか、人気絶頂の時に忽然と姿を消した凄いアイドルだったっけか？



ていうか姫、大人でアイドルだったのか、完全に子供だと思ってたわ……  
マーズがこちらに向けた肉球を上下に動かして催促するので、ホロサインを取り出して渡してやる。

「これだよこれ、顔見た時に気づかなかった?」

「そのサイン、じっくり見てないし……」

「まーちゃん、これ何?」

「え? 姫の直筆サインじゃないの?」

「姫、こんなんにサインしない。偽物じゃない?」

「えっ!?!」

顎をカクンと落として露骨にガツカリしたマーズの手から、ホロサインを取る。  
なるほど、言われてみればそこにいる姫にそっくりな気がする。  
もちろん、本物のほうがキラキラオーラが凄いわけだけだ。

「それで、姫の名前がユーリってのはわかったけど。何が本当の姫なんだよ?」

「あ……ああ、ユーリは前世がパロットっていう王家の夭折した姫君でさ。それが判明

した時にパロット王家から継承権のない王族として認められてるんだよね」

「へえ〜」

「それとは別に軍事企業のヴァラク財閥の長女で、そつちでも良家のお姫様だし。アイドルとしても姫売りしてたし、一人称も姫だったから、まあ、色んな意味で姫なんだよね」

「なんか、ややこしいな。」

「とりあえず自称じゃなくて正当性のある姫様って事でいいのかな。」

「なんか前にこの人、消えたって言ってなかった？」

「うん、人気絶頂の時に急に失踪してさ」

「だからそれは、レドルギルドに……う……」

姫様は急に床に蹲って、小さく丸まってしまった。

「どうした!?!」

「手、手握って……怖い……」

俺が姫様の手を握ると、彼女はそれを痛いぐらいに握り返した。

「……………どうなってんの？ 義体に不具合があったとか？」

「……………多分だけど、心エネルギーコア臓が接続されて脳殻が本格的に動き出したから、これまでのトラウマがフラッシュバックしてるんだと思う。誘拐騒ぎがあったのって俺が凍結される五年ぐらい前だったから……………」

少なくとも確実に何年かは、身動きできないまま誰かのスキルの中に置かれてたって事か……………」

丸まって震える姫の背中はずきまでの凜とした立ち姿よりもずいぶん小さく、昨日までのマットブラックの脳殻だった彼女の姿がダブって見えた気がした。

美人さにドキドキしていた気持ちもだいたい治まり、俺は小さな頃の妹にしてやってきたように姫の背中を掌で優しく擦った。

なんだか少しだけ、震えが小さくなった気がした。

「そういうトラウマって……………宇宙では薬でなんとかなったりしないわけ？」

「さすがに生身が脳だけだとね……デリケートだから薬物治療って難しいんじゃない？  
変に薬物入れたら焼けちゃうよ」

「げっ……」

「でも逆に脳内物質で変質しないように脳殻による調整も受けているはずだから、これ以上悪くなる心配もないとは思うけど」

「なんか、義体って便利そうで不便だなあ……」

「まあ義体が完璧ならみんな義体化してるよね。昔の義体は食事もできなくて食欲に脳を焼かれて発狂する人が絶えなかったらしいし」

「食欲!? 機械なの!?」

なんか義体って全然思ってたのと違うんですけど。

「機械じゃないってば。結局、脳味噌だけになっても人は欲求からは脱せなかったって事だね。セックスは人によるけど、食事と睡眠だけは省くと狂って死ぬんだよ」

「なんか、夢ないなあ……」

「脳味噌の電子化も試みられたけど、そうすると魂は次の生に渡っちゃうらしいんだよ  
ね」

じやあAIが魂を持ったりする事もないのか……

なんか、SFを楽しめなくなりそうというか……

知りたくなかった事を聞いちゃった気がするな。

俺はガタガタ震える姫の背中をゆつくりと擦りながら、なんとも言えない気持ちで天井を見上げたのだった。

## 第18話 起業と姫と出席日数

「とりあえず小さな船でも何でも手に入れて宇宙そら出てみりゃいいじゃん」

結局昨日は俺の手を握って震えたまま寝てしまった姫は、今後の事を相談する俺達にキリツとした顔でそう言った。

とにかく俺のジャンクヤードを通せるサイズの宇宙船を手に入れて、まず宇宙に出ようというのが姫の意見らしい。

「そんでビーコン打って迎えに来てもらおうよ」

「あ、姫の身内に？」

「そうそう、姫は帰らないけどまーちゃんは引き上げてもらおう」

袖余りの俺のパーカーをおしやれに着こなした姫は、カップ麺をつついていたフォークを天に向けてそう話す。

「引き上げね、そうできるなら助かるけど」

「え？ ていうか姫は帰らないの？」

俺がそう言うと、姫はなんだか不機嫌そうな顔になって、天に向けていたフォークをこちらに突き出した。

「トンボさあ、姫にゆっくり休んで言って言ったの。あれは嘘だったわけ？」

「…………いやいや！ 全然嘘じゃないけど」

ただあの時はマジで子供だと思ってたわけだし……

親との関係も普通に良好なら、帰ってもいいんじゃないかと思うんだけど。

「どうせ姫の件が伝わって、これからヴァラクとレドルは戦争になるんだから。ほとぼりが冷めるまでは安全圏に隠れてた方がいいの」

「まあ、そう言われればそうか」

「戦争って、なんで…………？ 警察とかになんとかしてもらおうんじゃないの？ 銀河警察

ってのがああるんでしょ？」

「海賊相手に銀河警察なんか何の役にも立たないっつーの。ヴァラク<sup>ち</sup>からもレドルからも金貰ってんだから動かないよ」

「まあ、銀河警察って弱いものいじめしかできない組織だからさ。正直嫌われてんだよね」

なんか、思ってたより宇宙って殺伐としてるんだよな。

まあ殺伐としてなきや、千年も戦争しないんだらうけど。

「ただまあ、さっきの話だけどビーコン打つにしても宇宙に出なきやいけないんだよね。多分トンボのジャンクヤードに入る船って連絡船になるだらうし、大気圏突入はできても脱出はできないと思うよ」

「こつちのロケットで打ち上げてもらおうよ。人工衛星ぐらいは打ち上げてみたいだし」

「でもああいうのって個人も相手にしてもらえるのかな？」

俺がそう尋ねると、姫は眼球だけをちよつと上に向け、何かを考えるように顎を掌で撫でた。



もしかしてインターネットで検索してるんだろうか？

「あー、たしかに体裁整えなきゃだめかも。じゃあ会社作っちゃおう？」

「会社って、宇宙開発企業って事？ そんな簡単に……」

「いや、実用品の宇宙船は手に入るわけだから、この上なく簡単だと思うけど……」

「いやそうじゃなくて、俺達がいきなり宇宙船作りましたって言っても信じて貰えないんじゃない？」

今の俺達は町工場すら持ってない、信頼性皆無の三人なのだ。

さすがにこれで宇宙船ですって物を出しても、テストすらしてもらえないだろう。

「うーん、宇宙船がない星の感覚って、これまで想像もした事なかったからどうも難しいな。完成品があるならそれでいいじゃんって思うんだけど」

「信憑性が必要なら、ちよつと時間かけて工場とかでつちあげちゃう？」

「それプラス、それっぽい業務で表に出せるお金を稼ぎながらかな……連絡船サイズの大気圏脱出用ブースターがあれば話は簡単だったんだけど、さすがにそんなニツチなものないからね」

「地球人の感覚からしたら、ありそうなものだけだな。そもそも大気圏を脱出できる連絡船とかさ、姫の義体調整装置ベツドについてた反重力装置とかと同じ感じで作れないの？」

「単に物を浮かすだけの反重力装置と、船体制御に使うレベルの重力管理装置は技術的にほとんど別物だよ。蒸気機関と原子力発電を、湯気でタービンを回してるから同じ物だつて言うようなもんだね」

宇宙の技術も何でもアリってわけじゃないんだなあ。

そんなマーズの話に感心していた俺を、唐突に姫の指が差した。

「つーことで、トンボ、社長ね」

「え!? 俺が!？」

「トンボしかいないっしょ、現地人ネイティブなんだから」

「それはそうだけど……でも俺、学生だよ？」

さすがにそれは荷が勝ちすぎる気がするんだけど……

そう思いながらマーズと姫の顔を見ると、二人は真剣な顔でゆっくりと頷いた。

「姫がついてんだから、安心してどーんと構えてなつて」

「別にトンボに本気で会社経営しろつて言つてるわけじゃないよ、体裁整えればいいだけなんだから。調達屋の規模がちよびつと大きくなつただけだよ」

たしかに調達屋は楽しかつたから、あの延長線上ならやつてもいいかなとは思うんだけど……

でも、肩書だけとはいえ社長だからな。

俺、ビジネススマナーとかわかんないし、背広も大学の入学式の時に作つたやつしか持つてないんだよな。

「まあそこは決定事項だし。トンボも現地じえいたい勢力たいりきに疑われてるんつしよ？ あんた一生日陰者のまま生きるわけ？ 会社立てるならついでに色々ごまかしとくけど」

「あ！ それは助かるかも！ 俺もそれ、就職する時に影響があつたらどうしようつて悩んでたんだよ」

俺がそう言うと、姫はびつくりした顔で「は!？」と叫んだ。

え？ 俺なんかおかしき事言つた？

「就職？ 地球の企業に？ 何言ってるのアンタ？ ジヤ<sup>そ</sup>ンクヤ<sup>ち</sup>ード<sup>か</sup>があつたらもつと他にいくらでもやれる事あるでしょ」

「姫、もつと言つてやってよ。トンボつて未だにピザ屋でバイトしてんだから」

「なんでだよ！ 別にいいだろ！」

結局調達屋だつてできなくなったんだし、この不安定な時代に常に安全策を取るの  
は大事な事だろ。

「ただ宇宙の物が手に入ったって、日本の金がなきやスーパーで飯も買えないんだからさ。」

「まあとにかく、会社は立てとくからね」

「あ、じゃあ必要な書類とか調べて役所に取りに行かなきゃな。学校の帰りに行つてくるから」

「なんで？」

「なんでって、会社の設立って結構時間かかるっていうから……」

「トンボ、スマホ見て」

ピコンと音を発したスマホを見ると、ブラウザに知らないホームページが表示されていた。

なになに『株式会社川島総合通商』？

業務内容……『宇宙開発、輸出入、システム・ハード開発、通信販売』？

代表取締役社長……『川島翔坊』？ これ俺じゃん！

「こ、これ……いつの間に……？」

「今作った。もう法的にも去年から存在してる事になってるから。納税も会社名義で適当に終わったことにしてある」

「て、手早すぎない……？」

俺がそう言うと、姫はフンと鼻を鳴らして胸を張った。

「トンボさあ、姫はこれまで自閉状態の漏れ出た思念波だけで仕事してたわけよ？」

「そーいやそーうだった」

「マーズ、それって凄いの？」

「普通はできない、できるように作られてないから」

「普通はできない事をできちゃうのが、姫の超凄いとこってわけ」

姫は自分の胸に手を当て、鼻高々といった感じで得意そうに話を続けた。

「ぶっちゃけフルでエネルギー供給された今の状態なら、惑星級の軍艦だって回し切れるスペックがあるわけだし？　こんなちっぽけな星のちんけなインターネットなんか自由自在ってわけよ」

「演算特化型とはいえ、さすがに惑星級は言い過ぎだと思うけど……」

姫はマーズのツツコミを無視し、俺に向けて「おい」と顎をしゃくった。

え、なんだろう……？

「撫でもいいぞ」

「え？　あ……はい……」

もしかして、脳殻の時に時々撫でてたから、頭を撫でるのが好きだと思われるのか

な？

俺はなんとなく掌をズボンで拭い、ムフーと鼻息荒い姫様の頭を撫でた。

昔によく撫でた妹の髪なんかとは次元の異なる滑らかさの髪をしばらく撫でていると、姫様はふいつと頭を元に戻した。

「後は回転資金っていうか、見せ金かな？ 問題なさそうな裏金から一億ぐらいかき集めて口座に入れといたから」

一億！

裏金とはいえそれだけなくなったら騒ぎになりそうだけど、まあ盗んだのが銀河級のハツカードだからこちらに手が伸びることはないだろう。

俺の金じゃないから使う事はできないけど、記念に百万円の札束を触らせて貰ったりはできないだろうか。

「そんでトンボは、まーちゃんと姫の地元から資金と技術の提供受けて商売してるってストーリーで。地元繋がつてる先は淡路島の野良ダンジョンね。まーちゃんの出身もそつちに書き換えといたから」

「淡路島って山を崩すぐらいデカいリクガメが出てきて全島避難になったところ？」

「これ以上ないカバーストリーだね」

「でしょー？ まあこんぐらいは楽勝だから、今後頼りにしていいんだぞ」

す、凄すぎる……

俺は伏して姫を拝み、ジャンクヤードから取り出したチョコバーを差し出した。

「お、なんだ？ 姫のカリスマに感服しちゃった系？」

「姫様、どうか、どうか……姫様の御威光で大学の出席日数を……必修の第二外国語だけでよろしいので……」

「……アホか！ そんな事頼むぐらいなら大学なんか辞めろ！」

「そこをなんとか……」

「ていうかトンボ、社長になったのに大学行く意味あるの？ 就活しなくていいんだよ？」

「こんなバーチャルな会社に人生賭けれるか！ 俺には俺の人生計画があるの！」

「ジャンクヤードが宇宙の彼方に繋がってる以上、トンボの人生って多分今後もずっとこんな感じだと思っけどな……」



マーズの言葉に「そうかもしれない」と思いつつも……  
俺は苦勞して入った憧れの東京とかいの大学に向かうため、重い足を引きずるようにして家を出た。

暖かな日差しはボロアパートの階段をぼかぼかと照らし、ポケットのスマホはピピピピピピと壊れたように通知音を鳴らし続ける。

一応確認してみたスマホの画面には、うちの会社の架空の出資者からのアリバイ作りのための連絡の履歴が過去に遡って通知され続けていた。

俺はうるさすぎるスマホをマナーモードにし、ふうーっと長いため息をつきながら駅へと向かったのだった。

## 第19話 広告と姫と換毛期

「あー、そこそこ。もうちよい右」

「はいはい」

迷歴二十二年の三月。

よくわからない会社の社長になった俺は、テレビを見ながら専務取締役のマーズにブラッシングをしていた。

猫型宇宙人でも年に二回あるらしい、換毛期が始まったためだ。

「地球人も意外とやるじゃん、悪くないブラシだよ」

「え？ そうなの？ じゃあこれも交換に出したらどうかかな？」

「宇宙じゃあ、換毛期の毛ぐらいは身体洗浄機で自然と抜けるからいらないかもね」

じゃあ駄目か。

どうも宇宙には風呂みたいに使える洗濯乾燥機が存在するらしい。

忙しい時は便利な気もするけど、俺はやっぱお湯に浸かるのが好きだな。

そんな事を考えながらブラシのシートを取り替えていると、俺達の隣で二連結の炊飯器のような機械を弄っていた姫から険のある声が飛んできた。

「あんた達さあ、少しは姫の事手伝おうとか思わないわけ？」

「やだなあ、浅学非才の船乗りには産業機械の扱いはなんかわかるわけじゃないじゃないか」

「あ、俺コーヒーでも入れようか？」

「んーっ……アリアリだね！」

姫は今、うちの会社の商品作成のために宇宙の産業機械を設定してくれていた。

これはマーズの意向で交換で回ってくるたびにキープしていた、宇宙の金塊こと安定化マオハを全て使って、姫の身内から交換してきて貰ったものだ。

金額に換算するとマーズの十年分の年収ぐらいになる高級品で、宇宙の特許の切れた汎用品を何でも合成する事のできるありがたい機械……

つまり、膨大なデータ入りの宇宙の3Dプリンタみたいなものだ。

「でもその合成機って凄いいよね、そんな機械あったら誰も物買わなくなるんじゃない？」

「うーん……ま、そうでもないんだよね。この星風に言うとき。家の中にお箸とか紙とか、昔のお菓子なんかを作ってくれる機械があったとしたら、毎日使う？」

「え？ いや、でも紙はトイレットペーパーとかにも使えるし……」

「それ、トイレに洗浄機能があるから宇宙じゃいけない」

「じゃあ商売に使ったり……」

「工場だとあの機械の百分の一、下手したら万分の一ぐらいのコストで物が作れるんだけど……それって太刀打ちできる？」

俺は砂糖と牛乳入りのカフェラテを持って、機械をいじっている姫の隣に座った。

「え……じゃあこれって何のためにあるの？」

「これはさ、開拓用。電線一本引かれてない土地で、最低限人間らしい暮らしをするための汎用合成機ベースマシンなわけ」

なるほど、本当の意味でどことも繋がってない場所を開拓しなきゃいけない宇宙だとそういう需要もあるのか。

ナイフとかライターとか浄水器の代わりにこれを持っていくのね。

「でも、これでこれからアイテムボックスとかバリア装置とか作るんでしょ？ やっぱ凄いいんじゃない」

「そう、調達屋のカバーストーリーとアリバイのためにね。でもぶっちゃけ空間拡張技術とか力場発生技術は割と枯れた分野だから、特許なんかとつくの昔に切れてんだよね」

「使いそうなどこはちゃんとこつちでも特許取つといたよん。うちと同郷設定の別人名義でだけど」

「え？ 特許とかつて、しつかりした審査があるんじゃないの？」

「ザルな所なんかどこにでもあるつっの。最低限納得させられる道筋さえできてればいいんだからさ、取るのは何もこの国じゃなくてもいいの」

姫はそう言いながら得意げに人差し指をグルグル回して、俺から受け取ったカフエラテを一口飲んだ。

「姫ってほんとに手際良すぎだけど、昔なんかそういう仕事してたの？」

「まーちゃん知ってるっしょ？ 姫はアイドルよ、アイドル」

「そういえば、宇宙のアイドルってどんな事やるの？」

俺の質問に姫はフンと鼻を鳴らして、得意げに細まった黄金色の目でちらりとこちらを見た。

「地球といっしょ。夢を見せんのよ」

そう言っつて、彼女は不敵に笑った。

「もちろん姫は、ステージで歌って踊るだけじゃなかったけどね。撮影、配信、プロモーションから、果ては舞台装置の操作まで。ゼーんぶ自分でこなせる、ガ！ チ！ の！ 超銀河系スーパーアイドルだったんだぞ」

「ああ、だから演算特化の脳殻にしてたんだ」

「芸能関係者……特にアイドルはさ、プロモーションの過程で電子戦みたいな事やるから、どうしても演算特化にせざるを得ないところがあるわけよ」

「ねえねえ、アイドルが電子戦って、どんな事やんの？」

言葉の響きにワクワクした俺はそう尋ねたが、姫から返ってきた答えはなんとも味気ないというか……いつそ泥臭いぐらいの物だった。

「他のアイドルの広告を潰して、自分の広告を表示すんの」

「え、それだけ……?」

「それだけって、それ以外にある?」

「え……? いや……ないか、ないかも……」

ちよつとがっかりした俺に、マーズが自分で自分をブラッシングをしながら「宇宙の広告戦争は凄いからね」と補足するように話を続けた。

「視界に広告が表示される代わりに激安っていう義体を開発して売る広告代理店があったり、広告が流れる服が貧困支援で配布されていたり、たまに都会で船を降りると広告だらけで目がチカチカするんだよね」

「え〜? あの賑やかさがいんじゃない?」

「都会人の感覚はわかんないなあ……あ、あと酷いのだと、公共機関や星間放送をハッキングして広告を流したり、もうほんとにあの手この手だよ」

「そういうハッキングって罰則があったりしないの？」  
「あるよん」

姫が楽しそうな顔で二ヒツと笑って、両手の指をワキワキと動かした。

「アイドル同士でさあ、お互いの違法広告を通報し合うの。いかに自分宛ての通報を潰して相手の通報を通すかがキモなんだよね〜」

「<sup>ユリー</sup>姫はそれがめっちゃくちや強くてね。とんでもないハッカーチームがいるって話になってたんだけど、まさか自分がやってたなんて……」

「ま、チームもあつたけど。そうそう……姫はそのチームのね……奴に、裏切られて……うっ……暗い……冷たい……ここは寒い……」

「あつ！ 姫が！」

姫は震えながら丸まって小さくなってしまい、何かを求めるように腕だけをフラフラと動かしている。

俺がその手を握ると、姫はそれを強い力でギユツと握り返す。

ゆつくりと背中を擦ってあげると、少しだけ震えが小さくなった気がした。



「トラウマを触っちゃったんだね……もう姫のアイドル時代の話はやめよう」

姫は夜寝る時も俺が手を握っていないと眠れないのだ。

俺には想像もできないスキルの牢獄から救出されてから未だ二ヶ月。

彼女の心の傷の根は、深すぎるほどに深かった。

## 第20話 釣り餌と猫と。パワードスーツ

迷歴二十二年、四月。

学校には眩しいぐらいに爽やかな新入生達が入学し、教室や学食で初々しく騒々しく、新たな人間関係を育んでいる。

だが学校という環境に新しく入ってくる人間がいるという事は、同時に出ていく人間、社会という新しい環境に入っていく人間もいるという事だ。

俺とマーズが久しぶりにやってきたダンジョンという社会にも、そういう人間が溢れていた。

「いいか、言うまでもなくダンジョンは危険な場所だ！ それはこの比較的安全な東四ダンジョンと同じ事！ わからなければ、いつでも！ どんな事でも！ 最強クラン『荒川アンダー・ザ・グラウンド』の主席イ！ 教導官のこの玉城たまきに聞け！」

「はいっ！ 玉城さん！」

「玉城さん！ 武器、ほんとにこの槍で大丈夫ですか？ 玉城さん！」

「いけるー！」

「今日って定時帰りいけますか？ 友達と飲みがあつて」

「知るか！」

「玉城さん！ クロスボウって弦引いたまま持ち歩いちゃいけないんですか？」

「教本読め！」

「あのお玉城さん、この支給のブーツ靴擦れがあつてえ」

「そのブーツ、ちよつと癖あるからね。後で柔らかくする方法教えてあげようか？ てかメッセやつてる？ なんでも相談していいから」

「あのっ！ 玉城さん！」

「なんだ！」

「あれ、なんですか……？」

「あれは……あれは……なんだろうなあ……」

新人冒険者達が指を差す先には、俺がいた。

体の前には怪しげな猫のマークを抱き、背中には怪しく発光するバックパックを背負い、額には怪しすぎるサークレットを付け、その上で怪しいを通り越して意味不明な鈍色に光る外骨格に搭乗した、普通の冒険者とはかけ離れた姿。

新人達はあまりにも異質な俺に恐れ慄き、混雑したダンジョン前広場も俺が歩けば自

然と道ができる有様だ。

歩くたびにギツチヨンギツチヨンと面白おかしい音を立てながら、俺は顔を真つ赤にしながらうろうろと歩いてた。

正直言つて、少々……いや、かなり恥ずかしい。

「やっぱ、目立ってるよな……」

「目立つのが目的でしょ、自衛隊を釣らなきゃいけないんだから」

マーズは赤面する俺の腹の前でそんな事を言いながら、知らん顔でスマホでタワーディフェンスのアプリをやっていた。

「このパワードスーツって必要だったの？」

「強化外骨格ね。レイバースユニット トンボがなんか乗り物欲しいって言ったから姫が作ってくれたんじゃないん」

「それにしたつて、自転車とかさあ……」

「あんな原始的なブレーキしかない乗り物でバリア状態で人轢いたら、しばらくお肉食べられなくなるよ」

「うへえ」

「それなら衝突防止用の姿勢制御システムも搭載されてるから安心だよ。自衛隊との交渉材料にもなるし」

そう言われれば、自転車よりもこっちのほうがいいかも。

男の子の夢そのものなデザインだしな、人目さえなければだけど。

『ボーイズ、もう入っていいよ。鼠は餌に食いついた』

姫からスマホにそう連絡があったので、俺はふらふら歩くのをやめた。

そしてバックパックから二メートル近い金でこパールをゆつくりと見せつけるように抜き、東四ダンジョンの入り口へと向かう。

「じゃ、行こうか」

「下に誰か知り合いいるといいなあ」

「トンボさあ。別に知り合いないなくたって、適当に誰かに話しかけて世間話でもすりゃあいいじゃん」

「それ、強化外骨格着てうろつく事よりハードル高いかも」

俺は武器代わりの金でこバールをぐつと握り、冒険者のふりをしてついてくる自衛隊の調査班を引き連れてダンジョンのダイブを開始した。

## 第21話 コーヒーと猫とマットとジェフ

パワードスーツを着込んでダンジョンを散歩した翌日、俺達は自衛隊からの要請で東京都ダンジョン管理組合本部へと出頭していた。

自衛隊を監視してしてくれた姫の情報によると、自衛隊が東三を百キロ近く奥まで調査した結果と、俺達が謎技術を披露した事で、自衛隊の中では我々がドラゴン殺しである事がほぼ確定したらしい。

危険人物として俺達の身柄を確保しろという意見もあったらしいが、姫が作ってくれた虚構のバックアップ組織とストーリーのおかげで任意聴取という形に収まっていた。そういう形で収まってくれたのは姫に対する感謝の念が絶えないぐらいにありがたかったし、自衛隊の方の理性にも大きな感謝を送りたいところではある。

あるのだが……

「あなた達の使っている特殊な技術がどうか、罪に問うとか問わんとか、そういう話じゃない！ ただ一つ、ただ一つだけ聞きたいだけなんだ！ ダラス十四号はまだいるのか!? いないのか!？」

それでもこうして立派な応接室で机を挟んで強面の偉い人に大声で詰められてると、普通の学生である俺にはちよつとしんどいところもある。

だが、俺と違って普通じゃない宇宙猫のマーズはそんな事には全く動じず、のらりくらりと追求をかわし続けていた。

「いるかいなかった、ねえ。そういう事は我々よりもそちらの方がよくご存知だと思いますが」

俺は事前に言われた通りに何も語らず、泰然とした態度を崩さない事に全力を傾けている。

「そういうのはもう沢山だ！ 簡潔に言ってくれ！ いるのならばだ！ 東京の首都機能は捨てなきゃならん！ いなくなつて警戒は解けないが、今なら混乱は最小限に抑えられる！」

「まあまあ、そう熱くならないで」



ヒートアップするお偉いさんを、その隣に座っていた優男っぽい眼鏡の人がなだめる。

「竹原さんちよつと落ち着いてください。すいません、ここからは私、内木が」

ああ、なんかこういうの漫画で読んだことあるぞ。

強面の人と優しい人をセットにしとくと相乗効果シナジーが出るやつだ。

「正直言つて、我々にはかなりの部分で確信があるんです。放射線測定の結果を見ても、ランドドラゴンダラス十四号が最後に消えたのはAベース近くの地点でほぼ間違いありません。それのうちと共同で潜つた警視庁の鑑識班が、その地点からそちらのマーズさんの抜け毛と砕け散つた竜の鱗を採集しているんですよ」

え!? あの竜、放射能あつたの!?

思わずマーズの方をちらつと見るが、彼はこちらへ視線も向けずに爪で俺の太ももを一刺ひとさししました。

痛いよ……

「我々はそちらのお国二元であるポピニヤニアと事を構えるつもりは全くありません。これまで強固に隠蔽されていた会社情報や経歴などが急に公開された事も、詮索するつもりはございません。ただ、ただですね、あのダララスド十四号ゴの生死に関してだけ、当事者のあなた達に一言、本当のところをご教示頂きたいんですよ」

眼鏡の内木さんがそう言うが、マーズはまだのらりくらりモードだ。

「そう言われましても、これまで何度もお答えしてきた通りですよ」

「マーズさん、我々はそういう事を聞きたいんじゃないんですよ。今東京には、二千万人以上の住民がいます。私事ですが、うちの実家も、そっちの竹原さんが人生を懸けて建てた新築の家もある。膨大な人達の生活が、あなた達の答えにかかってるんです！」

「よけいな事は言わんでいい！」

マーズはだんだん圧を増す二人にも動じた様子なく、困ったような様子で爪で顎をかいた。

「以前お伝えした事が全てなのですが。しかしどうも、あなた方はそれでは納得しなさい。そうだ……ですので、一言だけ」

彼が静かにそう言うと、前の二人が心持ちこちらへ身を乗り出した気がした。

「私と社長トングはあの竜と相対して、今もなお東京に留まっている。それが答え、というわけにはいきませんか？」

内木さんは一瞬視線を机に向け、スツと椅子から立ち上がった。

「結構です。竹原さん、いいですか？」

「構わん！ すぐに出るぞ！」

そう言うと、竹原さんはこちらに「協力感謝する！」と言ってすぐに部屋から出ていった。

「川島さん、マーズさん、本日は本当にご協力をありがとうございました。申し訳ありま

せんが我々はこれにて。お忙しいところ申し訳ありませんが、佐原さんもお話を伺いたいそうですので……」

「あ、はい……」

内木さんも竹原さんに続いて部屋から出ていき、それと入れ替わるように壁際に立っていたグレーのスーツの男がソファに座った。

「私、防衛装備庁の佐原と申します。お疲れの所申し訳ありませんが、もう少しだけお話よろしいでしょうか？ おい、コーヒーおかわり」

佐原さんがそう言うのと隣室からすぐにコーヒーが運ばれてきて、俺達の前の冷めたコーヒーと交換された。

「川島社長の纏っていらつしやったパスワードスーツ、素晴らしい性能だとお聞きしました。ぜひお話を伺いたいですなあ」

「もちろんですとも。社長、お名刺を」

マーズが俺の腕をポンポン叩くので、ソファに置いていたバックパックから俺とマーズの名刺を一枚ずつ取り出した。

「私、川島総合通商の専務取締役を務めておりますマーズと申します」  
「社長の川島です」

自衛隊にとつては違うのだろうが、俺達にとつてはドラゴン討伐の事実確認なんてのは前哨戦にすぎなかった。

本番は、ヤバすぎる俺個人ジャンクヤードの異能から目を逸らすための、スキルスーパードを代替テックできる超機械ロボの売り込み。

そしてこれは同時に、会社としての実績を作るための格好の機会でもあった。

最高級のコーヒーの香りと共に、さっきの二人とは桁違いに厄介そうな佐原さんとの話し合いが始まったのだった。

## 第22話　ふりかけと猫と化粧水

自衛隊との交渉が前向きに片付き、晴れて自由の身になった俺達はまた地の底にいた。

場所は東京第四ダンジョンの第一中継地点である、地下湖前広場の壁際。

トイレも休憩所も灰皿も用意して準備万端なのだが、知り合いがいないせいかわいそうか。パワードスーツを着込んで猫を抱いた姿が異様すぎるせいか、未だ一人も客は近づいて来ていなかった。

「暇だね」

「東三だつて最初はこんなだったでしょう？　我慢我慢」

新作ソーシャルゲームのガチャを回すマーズの耳をじつと見ていると「あっ！」という声が聞こえた。

顔を上げると、金拵えの刀を腰に二本差した冒険者がこちらに駆け寄ってくるところが見えた。

元東三のメンツ、ハーレムラノベ主人公の雁木がんぎさんだった。

「調達屋、来てんじゃん!! SNSで再開って言ってたの本当だったんだ!」

「雁木さんお久しぶりです。東京に戻ってきてたんですね」

「あー、やっぱり地方は不便でさあ……通販もすぐに届かないし。承諾もしてないのに見合いさせられるし」

「兄さん、地元でもモテるんだねえ」

「モテるとかそういうのじゃないんだよね。最後に来たのなんか十四歳の子だよ?さすがに逃げ出してきたよ……俺の持つてるスキルなんか大したことないのになあ」

雁木さんの持つてるスキルは『抜刀』だったかな? 東三で手に入れたスキルオーブで『料理』も覚えたとか言ってたけど。

「あれ? そういえばお仲間のお二人は……?」

「あ、あの二人は地元戻って結婚しちゃった。恵比寿と仲良かったから、色々思うところあったらしいんだよね……」

恵比寿というのは、東三のドラゴンのせいでダンジョンに取り残されたパーティー『恵比寿針鼠』の事だ。

その内二人を生き埋めにされ、残りは瀕死の状態にまで追い込まれた彼女達はパーティーを解散したのだが、その余波は思っていたよりも大きかったらしい。

「あ、でもまた新しいパーティー組んだから紹介するね。おーい！ 佐藤さん達！」

雁木さんが呼び寄せたパーティーは、三人とも美人の妙齢の女性だった。

「おおい……ハーレムが増強されたな……」

俺はなんとなく釈然としない気持ちを持ちながら、新しいお客さん達と挨拶を交わしたのだった。

雁木さん達と話している間に、SNSを見て来てくれたというバラクラバの気無きなさん達のパーティーも合流していた。

いつの間にやら東三の同窓会だ。

「ぶっちゃけ、お前ら逮捕されたんじゃないかって噂になってたよ」



バラクラバを半分めくってタバコを吸いながら、気無さんはヘラヘラ笑ってそう言った。

「え？　なんでですか？」

「そら自衛隊の奴らがお前らの事を聞き回ってたからな」

「そうそう、さすがに階級章ぶら下げたりはしてなかったけどさ、あの人達姿勢からして違うから見ればすぐわかるんだよね」

「僕達そんな悪い事しないですよ」

「迷宮でモグリの売店やってる奴が何言ってるんだよ、納税もしてねえくせに」

そう言いながら舌を出して笑う気無さんに、俺は右手の親指で着ている作業服の胸元をトントンと突いてみせる。

そこには金糸で『川島総合通商』と刺繍がされていた。

「ああ？　なんだそりゃ」

「法人化したんですよ、法人化」

「えっ！　じゃあマーズ君、社長になったの？」

「いや僕です、マーズは専務なんですよ」

そりやみんなそう思うわな。

俺は苦笑しながら自分を指差し、二人もそれを見てニヤニヤと笑った。

「マーズの方が貫禄あるように見えるがなあ」

「あれ？　ていうか大学は？　ついに中退？」

「してませんよ」

「君らさあ、あんまうちの社長イジらないでくれる？」

マーズはめんどくさそうに首を曲げてそう言った。

まあ、俺の社長就任は川島家で話し合って決めた事だしな。

「ごめんごめん」

「しかしよお、なんで法人化なんかしたんだ？　せつかく税金払わなくていい商売だっ

たのに……」

「ま、仕入先の関係とかだね。トンボのつけてる強化外骨格とか、他にも色々調達できる  
ようになったんだよ」

「そうそう、聞きたかったんだけど……それって何なの？」

「これですか？ これはですね……パワードスーツです」

雁木さんが俺のパワードスーツを指差すので、俺はギツチヨンギツチヨンと音を立てながらその場でくるっと回ってみせた。

「パワードスーツ？」

「ちよつと見ててくださいいね」

俺は一步後ろに下がって、ピヨンと垂直にジャンプした。

雁木さん達の頭よりも高くまで飛び上がり、フワツと地面へと戻る。

その場にいる人達が「おおーっ」と感嘆の声を上げた。

「そのガン〇ム、売り物なのか？」

「これは高いよ〜」

「いくら？ ていうかちよつと試しに乗せてくんない？」

「いいよ、トンボ」

「あ、はいはい」

俺が首元のボタンを押すと体中のロックが外れていき、下はゴツゴツした岩場だとい  
うのにパワードスーツは直立した姿勢のまま静止した。

見た目はほとんど人形ひとがたの骨組みで、五センチメートルほどの厚さの固定具ビンディングに乗れば自  
動でフィッティングをしてくれるようになっていた。

「これ、この足マークのところに立てばいいの？」

「そうそう、その固定具ビンディングに乗って。首元のボタンを押す」

「おおっ！ すげえ！」

気無さんはキレのある動きで突きや蹴りを繰り返して、天井スレスレまでジャンプして  
戻ってきたかと思うと、おもむろに地面に転がっていた岩を持ち上げた。

「えっ！ 全然重くないぞ！ マジのガン〇ムじゃん！」

「気無さん！ 俺も！ 俺も！」

「久作！ 俺も乗りたい！ 変わって変わって！」

「凄い凄い！ 私も乗ってみたい！」

岩を下ろした気無さんに周りの人達が群がってきて、彼は首元のボタンを押されて無理やりパスワードスーツから降ろされてしまった。

「わーっ！ 夢にまで見たパワー？ーダーだ！」

「次俺！ 俺だから！」

「レディーファーストでしょ!？」

「嬢ちゃん、こりやブランド品じゃねえんだぞ？」

まあ、テンション上がる気持ちはわかるけどね……

無理やり降ろされた気無さんはスーツの取り合いを見ながら釈然としない様子で頭をかき、生身のままさっきの岩を持ち上げようとして、途中でやめた。

「……あのさあ、あれっていくら？」

「今んとこ二千万ぐらいかな」

「ぐ……まあそれぐらいするか。電源は？」

「フレームの中に細かい流体が入ってて、それが動き続けて自動で発電されてるよ」

これは宇宙の汎用技術で、正直枯れすぎて時代遅れなぐらいの技術らしい。  
だがそんな技術でも、地球では十分トシデモだ。

「え？ 何それ？ すげえ技術じゃん」

「最近開発されて取得された特許技術らしいよ」

目を見開いて驚く気無さんに、マーズはとぼけた様子でそう説明した。

「ふーん、他には何か凄い商品ってある？」

「色々ありますよ！ たとえばこれ、何にでも合うふりかけなんですけど……」

「ふりかけ？」

「もうマジで凄いですから！ この万能ふりかけ『勘太郎』は何にかけても……もうめちゃくちゃに美味しいんですよ！」

このふりかけは、マジで……もう一度言うが、マジで美味かった。別に大食いでもない俺が、炊飯器で炊いた三合の米を一気に平らげてしまったぐらいだ。

「こんなもんを凄いつて、お前さあ……」

「試供品で一つお渡ししますんで、絶対美味しいですから！」

使えば絶対にわかる。

先週サンプルを送ったうちの実家からも、もうすでにリピート要請が来ているぐらいだ。

言い方は悪いが、食べる麻薬みたいなものだ。

これでごく普通の材料しか使われていないというのが信じられないが……姫曰く、どうも本当らしい。

「わかった、わかったよ……」

「あ、あと試供品ついでにこちらの得用化粧水『プルプル』もお渡ししておきます、ぜひ

奥さんに。こっちはまだ認可下りてませんけど、うちの女性副社長が太鼓判を押す性能ですよ」

こっちも成分的には地球上のポピュラーな物しか使われていない製品なのだが……

異世界人が異世界の物を持ち込みまくって無茶苦茶になった結果ザルになった食品関係と違って、まだまだ検査が厳格な化粧品は認可にちよつと時間がかかっていた。

「認可下りてないって、それ大丈夫なのか？」

「輸入元じゃロングセラー商品ですから、大丈夫ですよ。僕もパッチテストしましたし」  
「まあじゃあ、一応……」

怪訝な顔の気無さんにふりかけと化粧水を手渡すと、誰かにちよんちよんと肩をつつかれた。

俺がそちらを向くと、雁木さんのパーティのお姉さん達三人が掌を出してニコニコ笑っていた。

「化粧品の宣伝は女性にした方がいいんじゃないかしら？」



「私達も試してあげる」

「女性の意見はいくらあってもいいわよね」

「あ、ええ……そうですね」

たじろぎながらも化粧品の瓶を渡すと、彼女達は笑顔で反対の手も差し出した。

「お姉さんも、美味しいふりかけ試してみたいな」

「美味しかったらリピートするから」

「だめ？」

否と言えるわけもなく、ふりかけも渡すと……彼女達は満足そうにパウダースーツ試乗の列へと戻っていった。

「雁木って、押しの強い女とばかり組むんだよな」

「こ、好みは人それぞれですから……あ、それより気無さん、商品紹介の続きなんですけど。このカプセルを見てください」

「まだあんのかよ……」

「これはダンジョン探索にも役立ちますよ」

俺が手に持った手帳用ボールペンぐらいのカプセルのお尻を押しして地面に投げると、そこには一瞬でドア付きのパーティションが現れた。

「ボタンを押して投げると自動で展開する衝立なんですよ、これと携帯トイレがあればどこでもトイレができますよ。これの凄いところは、自動折り畳み技術でワンタッチで元のカプセルに戻せる点で……」

「ホイ○イカプセルじゃねーか!!」

口をパクパクとさせていた気無さんは俺の説明を遮って、今日一の大声でそう叫んだ。

「ふりかけや化粧水よりこっち先に紹介しろよ!」

「え? そうですか?」

絶対『勘太郎』の方が凄いと思うけど。

「えっ！ 何それ何それ！ すげーんだけど！」

「それって元の状態にも戻せるの？」

「できますよ！」

気無さんの大声のおかげで、パワードスーツの周りに集まっていた気無パーティと雁木パーティ以外の人達もこちらに興味を示してやって来てくれたようだ。

俺が集まった人達の中で衝立をカプセルに戻してみせると、周りからは感嘆の声が上がった。

「川島総合通商？ 企業さんなんだ。こういうの開発してるの？」

「基本的に輸入だね、自社開発もいくらあるけど」

「ホームページから申請貰えればカタログのURL送りますんで、ぜひぜひお気軽に」

「あそこって灰皿あるけど、タバコもあるの？」

「ありますよ」

この日は新商品のお披露目ついでに顔も売れ。

試乗した人達の中からパスワードスーツの見積もりやカタログURLの請求も数件あり。

俺達は初日から無事、東四に定着して商売ができるようになったのだった。

## 第23話 正座と猫と隈のおねいさん

迷歴二十二年の五月、俺は春とはいえまだまだ冷たい部屋の床の上で正座をさせられていた。

「トンボさあ。お前に姫、ちゃあんと言ったよな？ 三人しかいないんだから、あんま手広くやろうとすんなよって」

「はい……」

「そんな時、お前なんてったっけ？」

「自分が現場で手売りするだけなんで大丈夫だよって言いました」

「姫、お前にこうも言ったよな。うちは別に地球の金に困ってるわけじゃないんだから、単価高い商品優先でやれよって」

「は、はい……」

「じゃあなんだよ、この日用品ばかりの注文書の山はよ！ ホームページのどこにもメールで発注受けるなんて書いてないのにさあ！」

コタツ机に座る姫が指さしたテレビに映されていたのは、川島総合通商のメールボックス。

そこにはズラツと、ふりかけや化粧水の発注希望のメールが並んでいた。

そう、先月元東三とうさんのメンツに配ったふりかけや化粧水は好評を博し……

その大好評はダンジョンを飛び出して色んな場所を駆け巡り、超大量の注文書として俺の元に戻ってきたのだった。

俺だつてまさかこんな事になるとは思わなかった。

俺はただ知り合いに、宇宙の美味しい物を知ってもらおうとしただけだったのに……

「自衛隊との商談もまだ纏まってないんだぞ、これからガンガン強化外骨格レイバースーツの発注来る可能性もあるのわかってる？」

「今からでも、ふりかけは在庫切れで販売停止って事に……」

「うーん、実は防衛装備庁の佐原からも、強化外骨格レイバースーツに先んじてふりかけを発注したいって言つてきてるんだよね。ちよこつと大げさかもだけど、販売実績を作るこの場面でふりかけは売れませんかって話になつてきたら、強化外骨格レイバースーツの方もこじれる可能性あるかも」

「そんな……まさかこんな事になるなんて……」

「あつ、またテレビでやってる……つたく、こっちに連絡もなしでさあ」

そう言いながら姫がテレビの画面を通常放送に変えると、そこでは太った女装タレントがふりかけのかかったご飯をムシャ食いしていた。

『このふりかけ、なんとダンジョンでしか売っていないふりかけなんです』

『え？ そうなの？ なんで？』

『それは製造元の川島総合通商の社長さんが、異世界から移住してきたケット・シーの冒険者だからなんです』

『あらやだ、かわいいわ』

勝手に商品を紹介されるのはまだしも、社長として勝手に紹介されていたのは俺ではなくマーズの写真だった。

「この星のマスメディアに公平性とかは期待してないけどさ、なんでトンボじゃなく俺が社長扱いなんだろう……」

「そら多分、俺の名前がキラキラしてるから勘違いしたんじゃない？ あとそつちのが

面白いからとか」

「クソが！ 全部のチャンネルハッキングして、こいつらの後ろ暗いところ全部流してやろうか！」

絶対やめてよね……

実際にそれができる人が言うのと、こんなに恐ろしい事はないな。

「ま、とりあえず一個一個やってくしかないね。姫、今喫緊で問題なのはどの部分？」

「雑貨の受け渡し！ 生産はどうにでもなるけど、客への受け渡し口がトンボとまーちゃんしかないからこんな発注受けてたら他の事できなくなるよ！」

「つ、通販にしたら？」

「誰が梱包して発送すんのよ？ トンボ君か!？」

「すいません！」

それだけは勘弁してください！ と、俺は深く頭を下げた。

さすがにこんな量の梱包を毎日やっていたら大学に通えなくなってしまう。

マーズが帰っても姫はしばらく残ってくれるとは言っているが、さすがにこの会社に



賭けて大学を辞めるといふ決断は俺には選べなかった。

だってあんなに頑張って入ったんだもん！

「まあでも、通販つてのは悪くないね。姫がいれば寄生虫……転売屋つて言うんだっけ？ それも弾けるわけでしょ？」

「あー、あの手の連中ね。弾いとく弾いとく。やっぱり原始的な経済環境じゃどうしても湧くもんね」

「え？ 宇宙だといないの？」

「宇宙つて輸送コストが高いから、基本的にああいうのは皆殺しだね」

「皆殺し……」

「だいたい海賊のシノギの一部だから」

あ、なるほど……

「とにかく梱包と発送が問題なら、人雇えばいいんじゃない？」

「まあそうなんだけど、それって誰が仕切るわけ？ 姫やだぞ」

「そりゃトンボじゃない？ 現地人の事務所をポプテが仕切ったってねえ？」

仕切るって、俺が採用して俺が指示出して結果を見るのか？

ピザ屋のバイトですら配達デリバリー以外できない俺が……？

それは多分無理だ。

せめて知り合いなら……

でも東京には友達もいないしな……

地元の友達に暇そうな奴がいなかったとスマホを取り出し、俺はアドレス帳の一番上の名前を見て一瞬固まった。

暇そうな人、いるじゃん！

俺は迷わず電話をかけ、呼び出し音が鳴る中をじっと待った。

『はい、阿武隈ですけど』

「あ、阿武隈さん、バイトしませんか？」

相手は解散した元恵比寿針鼠の冒険者、骨折してリハビリ中のはずの阿武隈さんだった。

喫茶店で久々に会った阿武隈さんは、普通に歩いて現れた。

初めて見る私服姿でいつもの隈のある笑顔を見せる彼女は、少し痩せたようだった。

「足はもういいんですか？」

「ギプスは外れたよ。今はリハビリ中っていうか、激しく動けるまではまだ四ヶ月ぐらいかかるんだよね」

「そうなんだ」

「だから別に軽作業のバイトならやってもいいんだけどさ、久美子……あ、吉川ね。あの子も一緒に雇ってくれない？」

吉川さんというのは阿武隈さんと同じパーティだった眼鏡の女性だ。

ダンジョンからの搬送途中で心停止したと聞いていたが、大丈夫だったんだろうか？

「いいですけど。吉川さん、もう退院されたんですか？」

「結局後遺症とか残らなかつたし、体は元気だよ。ただ心のほうがあんまり元気じゃなくてさ、家に閉じこもってんだよね」

「まあ死にかけてたんだしね、でもそれなら呼んでも来てくれるかな？」

マーズがそう聞くと、阿武隈さんはサイダーをストローでチューつと飲んで、口の端だけを曲げて笑った。

「ま、人と話せないほど重症つてわけじゃないし……あの子も軽作業ぐらいはできるよ  
うになつとかないとき。私もあの子も、この先冒険者に戻るかどうかもわかんない  
だから」

「なら姉さんたち、トンボの会社に就職したらいいんじゃないの？」

「さすがに大学生の子にそこまで世話になるには、お姉さんも年食いすぎちゃった。あ  
りがたいけどね」

まあ、そらそうだろう。

大学生の俺だつて、パツとしない大学生が起業した会社に人生かけたくないよ。

「ま、ま、とりあえずバイトという事で。賃金も東京の最低賃金＋20%でお支払い致し  
ますんで」

「そんな奮発していいの？ 別にお姉さん、最低賃金でも文句言わないけど」

「うちの副社長とも話し合つて決めた事ですので。そこそこ稼いでますから、大丈夫ですんで」

「今度でつかい取り引きもあるしね」

「ふうん、頑張つてんだ。じゃあ、ま、しばらくご厄介になります」

阿武隈さんはぺこりと頭を下げた。

俺も頭を下げた。

あまりの仕事量の増えつぷりにこの後すぐ給与十歩合制になる事は、今は誰にもわからない話だった。

## 第24話 部長と姫と男の夢

「人足りないって」

「やっぱりそうですか？」

迷歴二十二年の六月、俺達は未だに人手不足に悩んでいた。

姫によるワンマン家内制手合成業をごまかすために借りた古い工場、その入口付近に作った発送場で、阿武隈さんと吉川さんはくたびれた顔で座っていた。

「仕事自体は簡略化されてて、発送も業者が取りに来てくれるのはありがたいんだけど、どんだけ捌いても発送書が増えてくだけってのは精神的にキツイよ」

「気にしないでって言っても、やっぱ気になりますか？」

「川島君、逆の立場だったら気にならない？」

「いや、多分気になります……」

これに関しては、多分給料を増やしたところで解決しない問題だろう。

本当はこういうリクルートはエージェントなんか頼めばいいんだらうけど、姫曰くうちはああいうのに頼るにはちよつと特殊かつ隠し事が多すぎるらしい。

頼ったところで政府組織の人間しか送り込まれて来ないだろうとの事だ。

「姉さん、誰か知り合いいない?」

「知り合いつたつて、冒険者ぐらいしかいないんだよね」

「冒険者の奥さんとか、兄弟知り合いかでもいいんだけどさ。姉さんが管理できる範囲なら増やしてもらってもいいんだけど」

「それってあたしが面接するの? バイトだよ?」

「阿武隈さん、その話なんですけど……なんとか正社員になつてもらおうというわけにはいきませんかでしょうか……?」

俺は深々と頭を下げながらそう頼んだ。

コネも実績もない俺には、正直、実際、マジで、頼れる人が彼女の他にいなかったのだ。

普通の会社ならもつと小さく初めて人と一緒に会社をデカくしていくものなのだろうが……

俺の不徳でいきなり身分不相応の供給を求められてしまったうちの会社は、こうしてどうしようもなく泥縄ナリクルートを強いられてしまっていた。

「正社員、正社員ね……まあ本当は願ってもない話なんだろうし、社長を信用してないってわけじゃないんだけど……」

「そこを何卒……何卒……」

「まあまあまあ、とりあえず、仕事しやすくなくなるように役につけるためって事じゃダメ？  
別にこの国の法律なら労働者側からはいつだって辞めていいんだしさ。姉さん今なら即部長だよ」

「む、部長、部長かあ」

ダメっぽい反応だった阿武隈さんも、うちの専務の執り成しにちよつとだけ顔色を変えた。

ナイスだマーズ！

もつと押してくれ！

「ね、マーズくん、私は？ 私は？」



「入社するなら課長だね」

阿武隈さんはまんざらでもなさそうな吉川さんの反応を見て、首をポキポキ鳴らしながら俺の方を向いた。

「社会保障はちゃんとしてくれる？」

「もちろんですよ！ 退職金の積立もしますから！」

「……じゃあ、ま、いいか。よろしくね、社長」

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとうね」

こうしてわけのわからない会社には元冒険者の部長と課長が入り、人手不足にも少しだけ希望が見えた。

彼女達は手始めの仕事として、元一緒のパーティを組んでいた残りの二人を呼び戻してくれたのだった。

蒸し暑いはずの六月の夜も、うちの部屋は快適だった。

空間調整器は音もなく快適な温度の空気を吐き出し、空気中の湿度を調整してくれている。

「アンタ達のご飯、雑だからヤダ」と台所を一手に切り盛りしてくれるようになった姫は部屋着の白いジャージで何かを炒め、テレビからは昔から続いているシリーズのロボットアニメが流れている。

そんなマツタリした空気の中、俺とマーズは最近ハマっている宇宙のウォーゲームで遊んでいた。

「だからさ、八巡目で探査機打てばこっちの戦闘ロボも無視できたわけだよ」

マーズがコタツ机の上に置かれたボードゲームに表示されたアンテナのマークをタップすると、そこから円形に光が照射され、少し離れた場所にロボットの頭のアイコンが浮かび上がった。

「探査機つて色んな使い方あるんだなあ」

「トンボは戦いたがりすぎ、どんな強いユニットも接敵しなきゃ効力発揮できないんだ

から」

「でもこのかつこいい宇宙のサイコロマシーン、いっぱい回したくならない?」

俺がボードゲームの端についたサイコロマシンのボタンを押すと、クリアケースの中に入った不思議な形をした三つのサイコロが超高速でギユインと回る。

刻まれた数字から光を発しながら回るそれは互いにぶつかり合い、クリアケースの中を縦横無尽に飛び回って底に落ちた。

「やっぱかつこいいよなあ」

「そんなので喜ぶのは子供か君ぐらいのもんだよ」

「こういうの地球人の男は絶対みんな好きだって。とりあえず、今の反省も踏まえてもうひと勝負!」

「いいけど、風呂掃除はトンボだよ」

「あんた達、そこどけて。ご飯できたよ」

「あ、すぐどけます」

俺達はすぐにボードゲームを畳んでしまい、コタツ机の上を片付けた。

机の上には姫の買い集めたパステルピンクのお皿に盛られた梅しそ焼き飯や、それぞれのコップに入れられた麦茶がサーブされていく。

俺のはゲームの限定版についてきたマグカップで、マーズのは魚の名前が書かれた湯呑みだが、姫のはオシャレなアメリカ製の桜色のやつだ。

俺もかつこいい奴に買い替えようかな……とゲームのロゴ入りのマグカップを見て思うが、まだまだ使えるものを買って替えるのもなんとなく気が引けた。

「お茶、なんか変？」

「いや、そろそろコップ買い替えてもいいのかなって」

「いんじゃないね？ 姫とおそろいにしよ。まーちゃんは？」

「このコップ、がっしりしてて好きなんだ」

「じゃあトンボだけね。姫と同じ種類の緑のやつ、頼んどいたから」

さすが姫、即断即決だ。

ゲームのマグカップはペン立てにしよう……

「それよりこの焼き飯どうよ？ ネットでバズってたレシピだけはいけんでしょ」

「あ、たしかにさっぱりして美味しい」

「すっぱくていい感じ」

「そういやさ、さっきのゲームに出てきたみたいな戦闘ロボってあの合成機きかいで作れたりするの？」

俺がテレビのロボットアニメを見ながらそう聞くと、マーズは不思議そうな顔をした。

「え？　なんで？」

「いや、実物ってどんなもんかなって」

「多分トロボの想像通りの物だと思うけど」

俺の想像通りの物ならなおさら、ぜひとも見てみたい。

姫の方をチラッと見ると、黄金色の瞳と目が合った。

「別に戦闘ロボぐらいはラインナップに入ってるけど、今現役で使われてるのが第十八世代だったから……そのずうっと前の第五世代ぐらいのものしか作れないよ？　最適

化もされてない時代の八メートルぐらいのやつ」

「八メートル!? それってそれってやつぱさ、乗って操縦できるの?」「できるけど」

やつぱりできるんだ!

「それって、俺でも操縦できるかな?」

「簡単じゃない? 二百年前とかの物だと神経接続も必要ないと思うよ」

そう言われると、もう俄然乗ってみたいな。

「今アリバイ用に借りてる古工場あるじゃん。あそこって今発送部しか使っていないわけだし、場所はあるから……作ったりできないかな?」

「作れるけど、なんで?」

「いやなんでって……男の夢なんだよ、戦闘ロボはさあ」

俺が言うと、姫は冷めた目でマーズを見た。

「まーちゃん、こう言ってるけど、どうなの？」

「夢じゃないね」

「そりゃ宇宙の人にとっては現実だろうけど、地球だとそれに命懸けてる人だっているんだから！」

戦闘ロボに乗れるなら命だつて差し出すつて男はきつと沢山いるだろう……いるよな？

多分うちの親父なら差し出すぞ。

「まあまあ、別にダメって言うてるわけじゃないよ。八メートルならトンボのジャンクヤードに入るし、あのドラゴンみたいなのが現れた時のために作っておくのも別にいい」

でもさ、とマーズは続けた。

「材料は？ それに戦闘用ロボぐらいになると自己発電じゃ発電量が追いつかないか

ら、燃料も必要になるよ」

「それって、宇宙からの交換じゃダメ……?」

「あのさあ、ヴァラクも戦争中だから。戦闘用ロボットに使う資源とか、いくらあっても足りないものを回してくれるわけないじゃん」

「それはそうか……」

でも、ハメートルの動かせる巨人、このチャンスを逃したら二度と関わる機会なんかないような気もするんだよな。

なんとかならないものかと焼き飯を食べながら考え込んでいると、マーズが「あっ」と声を上げた。

「姫、マグラガントはどう?」

「ああ、こつちで魔石とか言われてるやつ? まああれもエネルギー物質だから、各種資源に変換できるつちやできるけど効率悪いよ?」

「えー! 魔石でなんとかなるの?」

俺がそう聞くと、姫はあんまり興味なさそうにピンクに塗った爪を眺めながら「うん」



と答えた。

魔石というのはダンジョンの魔物の臓器から取れる柔らかい石のようなものだ。触媒としての用途が主らしいが、色々な使い方をできる物質でもあるらしい。

「まあ高出力のエネルギーさえあれば、物質の変換ぐらいはできるけどさあ。強化外骨格レイバースーツみたいにクズ鉄と石コロから作れるわけじゃないからね？ 不純物の少ない銅とか鉄とかアルミとか、大量に必要なだから」

「集める集める！ 集めます！」

それぐらいの資材なら普通に買い集められるはずだ。

こういう時は、心底アイテムボックス持ちで良かったなと思う。

「トンボ、魔石はどうするの？」

「それなんだけど、冒険者から買い集めよう！」

魔石は別に売買が禁止されてるわけじゃないからな。

企業に属している冒険者も普通に魔石を取りにダンジョンに行くし。

ただダンジョン管理組合から大量に買い取るには事業者として審査を受ける必要があり、使用用途も調べられるらしいからそちらは厳しいかもしれない。

「ウチの紐付きになつてもらつて事？ 厳しいんじゃない？ ウチの会社全然信用ないし」

「それに関しては前からちよつと考えてた事あつたんだよね」

「え、何？」

マーズはなぜかちよつと嫌そうな顔をしてそう尋ねた。

「今つて現金取引じゃん。それをポイントにしてみたらどうかなくて」

「ポイント？」

「冒険者にはうちの会社に魔石を売つてもらい、それをポイントとして支払う。そこでそのポイントは、優先販売だったり割引販売だったりでいろんな特典付きでうちの商品に使えるわけ」

名付けて、川島ポイント経済圏だ。

将来的にはもっと色々な事に使えるようにして、旅行とか通信とか、大量の人を囲い込んだ一大経済圏に……なったらいいな……

「あ、なるほど。まともなアイデアじゃん」

「俺はいつでもまともだろ？」

「で、その優先販売とか割引販売とか、誰がやるの？」

マーズが俺の脇腹を突っついてくるのに肘で突っつき返したりしていると、スプーンを置いた姫の冷たい声が食卓に響いた。

「え……？ 誰って、そりゃあ、誰だろ……」

「下にやらせるつもりじゃないよな？ 今でさえ地元に戻った冒険者仲間呼び戻したりしてて人足りてないっぼいのに、阿武隈マさんキレんじゃね？」

「あ、それは、もちろんです」

「トンボ、あんた下持ったんでしょ？ ならこれまで通りの考えなしは通用しないってわからない？」

「あ、いえ……それは、わかってるつもりです」

「つもりだよね？」

姫の庄に、俺の足は自然と正座の姿勢に変わっていた。

マーズはそろそろと姫と俺の間から逃げ出し、みんなの食器を流し場に持って消えた。

姫の言っている事はあまりに正しく、俺の考えはあまりに浅く。

結局この日の銀河最強の個人事業主からの辺境の星の新米社長への薫陶は、テレビ放送がカラーバーになるまで続いたのだった。

## 第25話 エアコンと猫と誘い文句

迷歴二十二年の七月。

俺はピザ屋のバイトを辞め、大学がない日や夜は完全に社長業に集中するようになっていた。

会社の収入で金の心配がなくなったのもあるが、一番の理由はやはり、責任を持って食わせていかなければいけない身内以外の人間ができた事だろう。

人を使う者としての自覚を持って、という姫からの薫陶の影響も多大にあるけど。

とにかく俺はあの日から、昼間はダンジョンに出かけ、夜はふりかけを梱包しまくり、パワードスーツなんかの組み立てが必要な商品を組み立て、簿記三級の勉強をしたりとコツコツやってきた。

そしてその合間合間に姫様にお伺いを立て続け、リテイクを出されまくりながらもようやく通した計画を携えて……

俺は今日、夏でもほんのりと涼しいダンジョンへと訪れていた。

「調達屋、カップラーメンをくれ。シーフードでな」

「あ、こりやどうも吉田さん」

吉田さんは元東三組で、俺がダンジョンで一番最初に物を買った眼鏡の男性だ。彼は責任感のある真面目な人で、夏でもきちんとプレートキャリアを着込んでいた。

「吉田さん、実は常連さんだけに特別ないい話がありました」

「え？ 何……いいわ俺そういうのは……」

え？ なんで!?

俺が一步引いてしまった吉田さんにどう説明していいか迷っていると、下からマーズがすかさずフオローを入れてくれた。

「待った待った、トンボそれ怪しすぎ。常連さん向けの特別なカタログを作りましたって話でしょ？」

「あ、なんだそういう事か……」

そ、そんなに怪しいかなあ……？

俺は首をひねりながら裏にカタログのQRコードが印字された自分の名刺を取り出し、それを吉田さんに手渡した。

「まあいいけど、これってこれまでの商品と何か違うの？ 言つとくけどうちの財布じゃパスワードスーツとかは買えないぞ？」

「そういうのも載ってますけど。どっちかというところちのカタログは数を揃えられない系の商品なんですよ」

「ああ、お前のとこの商品、テレビで紹介とかされてたもんな。装備もつけてない転売屋が手ぶらでダンジョンに来て大変だったんだからな」

「その節はどうも、ご迷惑をおかけしました……」

吉田さんは「まあいいけど」と言いながらスマホでQRコードを読み込んで、ペラペラとカタログを数ページ確認してから画面をこちらに向けた。

画面には『川島総合通商ロゴ入りマグカップ 十ポイント』と表示されている。

「これ、金じゃなくてポイントって書いてあるけど……」

「まあそれも色々ありますして、そっちのカタログはポイント制になりました」

「ポイントって何？」

俺は吉田さんのスマホに表示されたカタログを最後のページまで飛ばして、今のポイント交換レートを表示した。

「ここに書いてあるんですけど。こちらの必要な素材……今なら魔石ですね。それを卸して頂けたら、ポイントと交換します」

「魔石ってそんなもん……いやまあお前なら使い道ぐらいあるか……」

「あと、うちでバイトしてくださいさしたら、それでもお金とポイントを稼げます」

ピンと指を立ててそう言った俺を、眼鏡の向こうの吉田さんの目は胡散臭そうに見つめていた。

「はあ？ バイト？ 俺ら冒険者だぞ？」

「別に吉田さん本人じゃなくていいんですよ、吉田さんの紹介がある身元の確かな人なら。正直今商品の梱包とか発送で、全然人手が足りてないんですよ」

「なんちゆう迂遠な……まあ、いいわ。それで、どういう商品があるんだよ？ オススメ



は？」

俺は待つてましたとばかりに頷いて、一本のナイフを取り出した。

「これ見てください、特殊金属製のナイフです」

「ナイフ？」

「これ、すごい硬いんですよ。滅多なことじゃ折れないし刃こぼれもしません」

「本当か？」

「見ててくださいいよ」

俺は地面にナイフを置いて足で踏んづけ、バッテリー式のグラインダーを刃の部分に当てた。

普通なら火花が出るところだが、これはちよつと煙が出るだけだ。

グラインダーがフェイクじゃない証拠に、ガリガリと横の地面も削つてみせた。

「ね、全然傷つかないでしょ？」

「あー、まあ、凄いのかも……それが防具プレートだったら欲しかったかもなあ」

吉田さんはそう言って、胸のプレートをコンコンと叩いた。

そうか……これぐらいわかりやすい方がいいと思っただけど、ウケなかつたか。

もつと個人個人のニーズを見極める力をつけなきゃな……

とりあえず、今日のところは便利装備系で攻めるか。

「それじゃこんなのどうですか？ 襟につける個人用のエアコンなんですけど」

俺が襟元にクリップする構造のそれを取り出してスイッチを入れると、吉田さんはそれを手にとって自分の首元に当てた。

これは今俺も付けているのだが、冷たい風が結構強く服の中に吹き込むのでかなり涼しい。

「あ、これいい……」

「いいですよねこれ！ 僕も今使ってるんですけど凄いい快適ですよ」

「これほしい！ これは何ポイント？」

「これは二千ポイントだから、魔石換算で一キログラムつてとこだね」

「くうく、今の魔石の買い取りならだいたい八万かあ……まあそれぐらいするか……」  
「他にも充電不要のヘッドライトとか、超強い殺菌力で匂いと水虫を防ぐ靴の中敷きとか、色々ありますよ」

「絶妙に欲しいところ突いてくるよなあ……」

吉田さんが腕を組んで悩み始めた所に、バラクラバを汗で濡らした気無きなさんのパーティがやってきた。

「おー吉田何やってんの？」

「これ凄いいんだよ、ちっこいクーラーなんだけど」

「え？ なにそれ欲しい……」

「気無さん、実は常連さんだけに案内させてもらっている、本当に役に立ついい話がありますよ」

「え？ なにそれ怖い……」

「待った待った、トンボ、言い方いい方」

結局その後もマーズに細かく直されながら勧誘を続けたが、何人かの人に怪しまれ

……

人に信用される喋り方っていうのは、一朝一夕では身につかないのだなという事を痛感した俺なのだった。

なんだかんだと拙い勧誘を続けて一週間。

ようやくぽつぽつ魔石を売ってくれる人も出てきて、今日はついに家族を働かせてもいいという人まで出てきたので、俺は現場を取り仕切る阿武隈さんへと連絡をした。

『それで、吉田君とこのパーティの奥様方が来てくれることになったって？ やるじゃん社長』

「うちの商品開発部が頑張ってくれたおかげでして……あつ」

『何?』

「いえ、いえ、なんでも……」

商品開発をやってくれてる副社長に、背中を上から下にツーンってやられただけです

……

「とにかく人手の方はもう少しなんとかなりそうですので……現場の取りまとめの方をよろしくお願いいたします」

『いいよいよ、難しい仕事じゃないしね。あ、社長、明日来るんでしょ？ 人増えるなら補充しといてよ』

「はい、はい、明日は十五時ごろに製品持っていきますので」  
『ほんじゃね〜』

電話を切ると、通販会社のサマーセールで買ったタブレットを弄っていたマーズと、小さなフォークで桃をつついていた姫がニヤニヤと笑っていた。

「やるじゃん社長」

「頑張った商品開発部にさあ、お返しとかないの？」

「あの、肩でも揉みましようか？」

「姫、肩こりとかしないもん」

あんまりに自然すぎて意識もしてなかったけど、そーいや姫って義体だったな。

とはいえ、二人に世話になりっぱなしなのは厳然たる事実。  
ジャンクヤードになんかいいものが交換されてきてないかな……？

「あれ？ なんだこれ」

「え？ 何？」

「どったの」

俺がジャンクヤードに入っていた見慣れない物を取り出すと、二人もこちらにやって来た。

「手紙だ」

「しかも書かれてるの、日本語じゃん」

「え!?! どういう事!?!」

そう、それは宇宙のどこかに繋がっているはずのジャンクヤードに流れてきた物なのに……

その真っ黒の封筒の表面には、金字の日本語で『あなた様だけに特別なご招待』と書



## 第26話 歌と猫と金頭龍

「とりあえず、開けないほうがいいんじゃない？」

「俺もそう思う」

「姫も異議なし、しまつてしまつて」

全員の総意で怪しすぎる黒い封筒をジャンクヤードへと仕舞おうとしたその時、突然スマホから聞き覚えのない音楽が流れ始めた。

『宇宙のどこでも 迅速配達 今日きょうの飯から 次元穿孔兵器ヤツバまで 何でも揃なうん』

『ピカピカお船のお店屋さん』

「え、なにになになに……？ 着信!？」

スマホから流れ出した音楽は着信音だったようだ。

こんなの設定した覚えはないんだけど……

電話の相手は『テイタ』と表示されているが、それももちろん聞いた事もない名前だ。



『ご存知宇宙の御用聞き 金頭龍商会です』

「あ、やばい、切って切って切って」

「え？ 切っていいの？」

『宇宙のどこでも』

「はよはよはよ、二周目入ってるから」

「切った！」

俺は震える指で着信を切り、バクバクする心臓を押さえながらゆつくりとスマホをテーブルの上に置いた。

と同時に、また音楽が鳴り始めた。

「おわっ！」

『宇宙のどこでも』

「切って切って切って」

「切った！」

『宇宙のどこでも』

「切ってトンボ！」

「切った！」

『うっちゅうっのどっこでっも  
宇宙のどっこでも』

「しつこいなあ」

「もう電源切っちゃって！」

「切る……切れない！」

電源ボタンを長押ししても、なぜか全く電源が切れない。  
俺はボタンを押したまま、姫とマーズの顔を見た。

「これって、出ちやダメなの？」

「出ないで出ないで」

「絶対出ちやダメ」

俺はごくりと生唾を飲み込み、一旦落ち着こうとスマホを机の上に置き直した。

「それでいいトンボ、そのまま何もしないで」

「まーちゃん、ゴールドンヘッドドラゴン金頭龍商会って言ってたけど、本当かな？」

「ぶっちゃけ本当にあの商会なら、何やってきてもおかしくないね」

姫とマーズの会話を聞くともなしに聞きながらふうーっと長く息をつき、緊張でガチガチになった首を回していると……

誰も触っていないはずのスマホが、なぜか机の上を俺の方に向かってズリズリと動き始めた。

「え……？ うわっ、動いてる！ 動いてる！」

「トンボ！ 避けて！ 避けて！」

俺が腰を浮かして後ずさろうとした瞬間、スマホはポロツと机から落ちて俺の足に当たった。

瞬間、けたたましく鳴り響いていた音楽はプツリと止まり、涼し気な女性の声で日本語が聞こえてきた。

『夜分遅くに申し訳ありません。私ゴールデンヘッドドラゴン金頭龍、商会のテイタと申します』

「ああ……取っちゃった……」

「え？ え？ え？」

「落ち着いて」

完全に床に倒れていた俺は姫に引き起こされ、背中を優しくポンポンと叩かれた。

『こちら、川島様のお電話でよろしかつたでしょうか？ 本日はお客様に大変有意義な

ご案内をさせていただきたくお電話致しました』

「人違い人違い、川島の電話じゃありません」

マーズがスマホに向かってそう言うと、通話先の女性は「ハハハッ！」とアニメの悪役のような笑い声を上げた。

『おやおや！ これは元マージーハ輸送連隊三号艦所属の曹長ポプテ様。無事に解凍されていらしたのですね、ご壮健でなにより！』

「え、まーちゃんマージーハだったの!? しかも曹長!?!」

「……こんな人前で個人情報べらべらと喋るのが御社のやり方なわけ?」

『当社とマージーハには何の契約も存在しませんので……もちろん、そちらのレディの

ヴァラック パロット王家  
お家元と元お家元とはご契約がございます。ご機嫌麗しゆう、ミス」

「一家の団欒にいきなり踏み込んでこられて、全然麗しくないっつーの」

「え？ え？ 結局何なの？」

『おお、これは川島様、川島翔坊様、チャーミングなお名前でございますね。私、金頭龍商会のテイタと申します。以後お見知りおきを』

「これどうやってこつちを探知してるのかな？ 電子的な探知なら姫が気づかないわけがないんだけどなあ……」

『ミス、高位の異能者の魂魄は、暗い宇宙で恒星よりも光り輝くもの。レベル四の異能者を宇宙の片隅に隠しておこうなどと、無理をおっしやいますな』

「は!? レベル四!? トンボのスキルって劣化マーケットスキルじゃなかったの?」

姫はそう言いながらガクガク俺を揺するが、俺が知るわけないじゃん!

レベルって何なんだよ!

『お気づきになりませんでしたか？ まあ、無能者の方々にはわからないのかもしれないかもしれませんが……』

「そのスキルのレベルって……あ」

思わず通話先に質問しようとした俺の口を、マーズの肉球がぼふつと塞いだ。

「トンボ、何も口にしないで。言質を取られるから」

『おお、そのような事は決してありませんが、お話にならないならばそれはそれとして話を進めさせていただきます。川島様、あなた様は今こう思っているのでしょうか？』

このセクシーな声の女性は一体どこの誰なんだい？ 彼氏はいるの？ 結婚はしてるの？ と』

セクシーとか彼氏とかはわからないけど、たしかに誰なんだとは思ってる。

『個人情報はお答えできませんが、自己紹介なら何度でも。私は金頭龍商会のテイ

タと申します。我々金頭龍商会は商人です。それも、どなたにも、どんな商品でもお譲りする。銀河一のね』

「死の商人だよ。先の戦争を千年も長引かせたのはこいつらなんだ。各陣営で糧秣や武器を転がして、決着がつきそうになつたらひっくり返してね」

『残念ながらポプテ様、そのような事実はございません。我々金頭龍商会は求めら』

れた相手に、求められた物を提供するだけ、常にフェアでクリーンなセールスマンでございませう』

「それで、そのフェアでクリーンなセールスマンが何でこんなド辺境の大学生に電話してきたわけ？」

『それはもちろん、商談のためでございます。ああ、おっしゃらなくとも結構。我々は常にお客様のニーズを正確に把握しております。川島様の今お求めになっていらつしやるもの、それは宇宙船でございますね？』

「……………」

俺が無言のままマーズの方を見ると、彼は短い指を口の前に立ててコクコクと頷いた。

『そちらの惑星では未だ宇宙船はポピュラーではない様子。ですがご安心ください。

我々金頭龍商会には、川島様に大気圏突破能力を持った宇宙船をご用意する準備がございませう』

「何が目的なの？」

『その対価に我々が求める物、それは以後の川島様の異能での変わらぬ取り引きでございませう』

います。しかし我々として営利企業、空手形で商品をお渡ししては他のお客様から窘められてしまいます……』

「回りくどい、要点を」

『おや失礼。以前川島様がマーケットに流された緑竜グリーンドラゴン、大変興味深いものでした。あいつた物をもう一体ご用意くだされば、そちらと宇宙船をご交換致しましょう』

グリーンのドラゴンといえば、姫と交換されていった迷宮産の恐怖のやばやばモンスターだ。

あんなものもう一体持って来いって……そりや無理だよ！

それに俺のスキル、サイズ制限があつて宇宙船なんか通らないし……

そう思いながらマーズを見ると、彼は俺の目を見ながら肉球で口元を触つて頷いた。

「……あんた達ならわかつてるでしょ？ トンボのスキルはサイズ制限があるんだ、宇宙船なんか入らないよ」

『おおポプテ様、そこそあなた様ならおわかりの事では？ 当社には、銀河中から選りすぐった異能者ジャグラーが多数在籍しております。小さな穴ぞうに象を通す程度の事、今時分では手品にもなりません』



「それで、取り引きでトンボも取り込んでそっちの力にしようってわけ？」  
『おおレディ、そのような事はありませんとも。勿論、我々はいつでも高位異能者に対しては然るべき席をご用意しておりますが……』

その時俺が横目でちらつと見た姫は、これまでに見たことがないぐらい険しい表情でスマホを見つめていた。

『もう質問事項はございませんか？ では川島総合通商の皆様、引き続き、良き商いを。ああ、そうそうトンボ様、福島の桃、大変美味でございました。ぜひとも流通量の拡大をご検討くださいませ』

言いたい事を言いたいただけ言って、通話は切られた。

へたり込んだままだった俺は床に倒れ込んで、天井を見上げた。

端がめくれかけているボロい1LDKのアイボリー色の壁紙を見つめながら、はあ  
くつと大きくため息をつく。

部屋の中からは同じようなため息が二つ、俺の後を追いかけて続いたのだった。

## 第27話 曹長と姫と配達野郎Aチーム

「一個一個解決していこう」

「賛成」

「俺もう何がなんだか……」

スマホの電源を切り、俺とマーズはコタツ机の周りにへたり込んだ。

「姫だけは桃の皿を片付け、部屋から椅子代わりのバランスボールを持ってきてそれに座った。」

「とりあえず、ゴールドエンヘッドドラゴン金頭龍 商会についてはもういい？ あそこ、宇宙最高の商人でもあ

り、宇宙最悪の悪党でもあるの。あそこ、文字通り何でもアリなのよ」

「まあ、だからこそ銀河中の組織がみかじめ料代わりに契約結んで、そのせいで金さえあれば無限に戦争が続けられる状況になってるんだよね」

「そんなにヤバい人達なのか……」

俺は机の上に放り出された黒い封筒を見つめながら、唾をごくりと飲んだ。

「そういうえば、この封筒はなんだったんだろ？」

「開けてみなよ、どうせろくでもないよ」

マーズが嫌そうな顔でそう言うので、俺は恐る恐る封筒の封を開けた。

「あれ？」

封筒を逆さにしてみたが、中には何も入っていないかった。

「入れ忘れかな？」

「入ってたんだと思うよ、多分」

「それって……」

「話がついたから消えたんだよ、中身がね」

「そんなんできたら何でもありじゃん」

「だから何でもアリなんだって。あいつらを縛れるのは契約だけ」

バランスボールの上で足を組んだ姫が、冷めた目つきで床を見つめながらそう言った。

「なんか、ほんとにやばいのに目つけられたんだなあ……」

「まあ、やばいのはやばいけど、海賊より全然マシだよ」

「どういうこと？」

マーズはなんとも言えない顔のまままで肉球でヒゲを撫で付け、パクパクと口を開閉してからゆつくりと話し始めた。

「あー、なんていうか……彼らは書面はもちろん、口約束でも、契約だけは絶対に守るんだよね。そういう意味では銀河中で一番信用のある企業なんだ……俺の古巣なんかよりもね」

「まーちゃんのお菓子のマージョーハってところも凄い信用あったんだよ、五百年以上営業してて物資輸送の未配率が二割とかだったんだから」

「へえ、日本で言うネコネコ運輸みたいな感じ？」

「うーん、宇宙だと配達業って対海賊の最前線だから、配達野郎Aチームって感じかな。だからまーちゃんうの曹長ちってのはかなり凄いなだよ」

「まあでも、マージうーハちと違って金ゴールデンヘッドドラゴン頭 龍は自社から契約を違えた事はただの一度もないけどね……」

肩をすくめてそう言うマーズの背中は、猫のように丸まっていた。

「じゃあ、あのドラゴンぐらゐの魔物と引き換えに金ゴールデンヘッドドラゴン頭 龍 商会がが宇宙船をくれるっていうなら、それはかなり信頼できるって事？」

「信頼とかじゃなくて、マジでくれるつもりなんだと思うよ。それに関しては」

「そういう意味では本当に、なんならどつかの星の王族なんかよりよっぽど信用できるんだよ。でも、あそこは信用はできても信頼は全くできないの、今回の件も絶対裏があるんだよな〜」

姫は器用にバランスボールの上で姿勢を変えて寝転がり、腕を組んだまま天井を見上げてそう言った。

俺もなんとなく姫の視線を追って天井を眺めた。

あ、そうか……俺の居場所がわかってるって事は、ここが宇宙のどこかわかってるって事じゃん。

「あの、提案なんだけど。金頭ゴールドヘッドロン龍リオンに普通にこの星の座標教えてもらったらどう？」

「……そんな事、あいつらが素直に教えてくれるかな？」

「絶対無理、あいつら契約外の事は普通に罠にかけてくるから。こつちから何か求めたりしたらこれ幸いとカタに嵌めてくると思う」

「ま、そうだよね」

うーん……百戦錬磨の二人がこんなに警戒する相手なんだから、俺を騙す事なんかそれこそ赤子の手をひねるが如しだろう。

絶対に近づかないようにしましょう。

「じゃあとりあえず、あの商会の事は無視でいいのかな？」

「いや、さつさと竜手に入れて宇宙船貰つといた方がいんじゃないかね？」

「危険性が増えるからトンポには悪いんだけど、できたらその方がいいと思う」

「いや……いいんだよ！ だって帰れるかもしれない大チャンスじゃん！」

なんだか申し訳なさそうにそう言うマーズに、俺はなんだかいたたまれなくなつてしまつて慌ててフォローをした。

あのドラゴンともう一回戦えつて言っているようなものだ、俺がマーズだつて言い難いだろう。

だが俺は眼の前の猫型宇宙人を、彼の望みどおりに絶対に故郷に返すと心に決めていた。

これはマーズへの同情とかではなく……俺が自分のために決めたことなのだ。

俺が決意も新たに一人で領いていると、マーズはなんだか複雑そうな顔をして「そうじゃないんだ」と答えた。

「あの商会がこんな辺境の大学生にわざわざ損のなさそうな形で売り込みしてきたって事は、絶対に何かでつかい裏がある。その時、地上に釘付けだと本当にまずい事になりかねないんだ」

「あ、うん……」

「だから宇宙船は、トンボと姫のためにも今手に入れた方がいいと思うんだよ」

「たしかにそうかも……」

なんか、俺だけ気持ちが悪回りしてたみたいで逆に恥ずかしくなってきたな。

「姫も同意見、絶対に何かある。あいつらの利益への嗅覚はヤバイ。レベル四と持ち上げながら、トンボを獲得にかからなかったのが一番引つかかる」

姫は腕を組んだままバランスポールからずり落ちるように床に下りて、吸い込まれそうな金色の瞳で俺を見た。

「トンボ。あんた、本格的にロボット作ってよし」

「えっ？ いいの？ ていうかまだ魔石集めてる途中だけど」

「姫も手伝うから、さっさと魔石集めきつちやお。さすがにパワードスーツだけで怪獣退治は危険すぎ、レーザーキャノン装備の元主戦兵器持つとけば死亡リスクも低減できるっしょ？」

ロボット作っていいのは嬉しいけど、前の竜退治はほぼ生身だったんですけど……



「とにかく、ゴールドデンヘッドドラゴン金頭龍商会が出張ってきてちよつと話が変わってきたのよね。まずは力をつけて情報を集めなきゃ」

「トンボの能力にもあんまり頼りきりにならない方がいいかもね」

「それに関しては保留かな、正直いざつて時のための製造材料としてのマスターチャンク安定化マオハはいくらあつても足りないから」

宇宙の金塊、マスターチャンク安定化マオハは物資の製造にも使えるのか……

あ、ていうかスキルの事聞いとかなきゃな。

「あのさ、俺のスキルの事なんだけど。スキルレベルって一体何なの？」

「ああ、そういえばこの星はそういう学問も全然進んでないんだっけ？」

俺がうんと頷くと、姫はジャージを引き上げながらあぐらをかいて、俺の額に指を向けてこう聞いた。

「んとね、トンボってスキル異能ってのはどういうものだと思うてる？」

「え？ そりゃ、便利なもの？」

自分が目覚めるまでは、遠い世界の話でもあった。

学校の友達と「もし自分にスキルがあるならどんなのがいい？」と話したのは俺だけじゃあないだろう。

ちなみに俺は何でも治してしまう治療の力が欲しかった。

横向きに生えた親知らずがあつて、歯医者に行くのが怖かったからだ。

「じゃあ、人間がなんでそんな物を使えると思う？」

重ねてそう聞く姫に、俺はうーんと唸りながら、持っている限りの薄い知識を吐き出した。

「たしか外国とかでスキル持ちを解剖した国とかもあつたけど、普通の人と何も変わらなかつたって聞いた事ある。だからなんかその、魔法的な、マジカルな物なんじゃないの？」

なんとも纏まらないその言葉に、姫はウンウンと頷いた。

「それは正解でもあるし、間違いでもある。異能は魂魄に紐付くものなの。だから人は生まれ変わっても必ず同じ異能に目覚める」

「え？ そうなんだ！ じゃあ、俺は前世からこのスキルを使ってたって事？」

「そう。だから多分、金頭龍あいつらはトンボの前世にも目星をつけてるはず。レベル四の異能者なら、絶対に前世でも大活躍してたはずだから」

前世か、前世ね、あんま知りたいたとは思わなかったんだけど、急に足を掴まれた気分だな。

パツとしないぐらいならまあいいけど、人の恨みを買いまくった大悪党とかだったらどうしよう……

なんて事を考える俺の目の前に、姫は左手の中指と人差し指と親指の三本を立てて説明を続けた。

「普通、スキル異能上の市場で売買ができる市場系異能はレベル三なの」

そうやって姫は親指を折り、手をチョキにした。

「ただレベル二でも制限はあるけど同じような事ができる人がいて、姫はトンボもそう  
だと思ってた」

「俺のジャンクヤードって、レベル四なんだっけ？ レベル四のマーケットスキルって  
どんな感じなの？」

姫はチョコキにした左手の隣に同じ形で右手を出し、ダブルピースで四を表した。

「うーん、レベル四以上の異能者ジャグラーは全員特別な、自分専用の異能スキルを持つてるの。だからト  
ンボのジャンクヤードがどんな異能スキルなのかは、トンボにしかわかんない」

「えっ？ そうなんだ？」

がーんだな。

ようやくこのスキルの詳しい使い方がはつきりすると思ったのにな……

「なんか俺のスキル、イマイチ使い方がはつきりしないというか、ずっと手探り感がある  
んだよなあ……」

「傍から見てたら身の回りのもの何でも入れとける箱って超便利だと思っただろね」

「そーそー、しかもそれのおかげで姫とも出会えたんだぞ」

「俺ともね」

「ま、それもそうか」

たしかにこの二人と出会えたのは、このジャンクヤードのおかげだ。

それによくわかんないけど、凄くないよりは凄いがきつといいに違いない。

俺は金ゴールドデンヘッドドラゴン頭 龍 商会の封筒をジャンクヤードに仕舞い、KEEPをかけた。

なんだかどつと疲れが来て、そのまま床に横になつて目を閉じる。

ふにふにと肉球のようなものが額を触る感覚に擦ったさを覚えながら、俺は考え事を  
する間もなくすぐに眠りへと落ちたのだった。

## 第28話 粕汁と姫とスキルオーブ

姫の全面協力を得て、俺の考えたポイント制度は大きく動き始めた。

元々俺手作りの紙のポイント券ベースで動いていたポイントが、データ化されたのだ。

朝の食卓で、姫はふるさと納税の鮭で作ったお茶漬けをかつこみながら俺のスマホを震わせ、机に茶碗をトンと置いてからそれを指さした。

「ポイントを使える通販サイトをでっち上げといたから、宣伝しといて」

スマホを取って確認してみると、そこにはまるでクレジットカードのポイント交換サービスのような絵面のサイトが表示されていた。

「わっ！ 凄い！ ……商品も増えてる！」

「人も増えたから難色はないかもだけど。阿武隈<sup>クマ</sup>さんには、ちゃんとトンボから説明しといてよ」

「それはもちろん」

魔石の買い取りやポイント交換商品の発送の仕事が増えるのは申し訳ないが、これで便利になる分ポイントの重要性も高まり、きつと従業員が集まりも良くなる事だろう。

構想がいきなり形になった件については多少驚かれるかもしれないけれど……

きつと今後もうこうやって一瞬でWEBサービスが生えてきたりする事はあるだろうから、スピード感に慣れてもらおうしかないだろう。

「あ、それと今日から目を飛ばすから。聞かれたら説明しといてね」

「目?」

「こつちだとドローンって言うんだっけ? マルチコプターかな? とにかくカメラを

飛ばしまくって、あのドラゴン級の魔物を探すから」

「え? そんな事していいのかな?」

「ダンジョンでのドローン使用は許可されてるからいいっしょ。その他の場所も、現行法で二百グラム以下のドローンなら特定禁止区域以外は規定ないから」

まあ、姫がいいと言うならきつと大丈夫なんだろう。

俺は細かい事を考えるのをやめ、通販サイトを確認しながら鮭とコーン入りの粕汁を飲んだ。

姫の粕汁は実家の母が作ってくれた物とは全然違うが、普通に美味しい。

空になった花柄のお椀を机に置くと、隣に座っていた姫がニコニコした顔で俺の肩をつついた。

「ねえねえ。この粕汁ってやつ初めて作ってみたけど、どう？」

俺が「美味しかったよ」と答えようとすると、机の向こう側からブツ！と何かを吹き出した音が聞こえた。

「えっ!?! そのカスって何のカス……? 俺、もしかしてゴミ食べちゃった?」

マーズは鼻から粕汁を垂らして、慌てた様子で姫にそう聞いた。

「失礼な。カスってのはお酒を作る時に出るカスで、そういう食材なの。キテコーテの今日のレシピで紹介されてたから作ってみたんだ」



「なんだ、ゴミじゃなかったのか……」

マーズは安心したようにそう言って、ティツシユで鼻をかんだ。

「キテコーテってトンボがよく食べ物買ってる駅前ごてんの激安の御殿ごてんの事でしょ？ 姫って

あのゴチャゴチャした店好きだよ。服もあそこで買ってるし」

「姫、元がいいから何着ても似合うんだもん。地元なら好きなブランドとかあったけど……正直この星レベルの服だと、着やすければ何でもいいかも」

「でもあそこ、ジャージとかパーカーぐらいしか売ってないでしょ、今度服買いに行く？」

何でも似合うと言っても、さすがにちゃんとした服屋で買った服ぐらい持っていた方がいいだろう。

俺もファストファッションの店ぐらいしか行ったことないけど、それでも激安ごてんの御殿ごてんの服とは全然違うからな。

「ふーん……トンボ、姫に服買ってくれるんだ？」

「あの、あんま高いのは無理だけど……」

「トンボが服買うとこつてワークメنزでしょ？ たいした値段にならないよ」

「いやいや、さすがに姫を作業服屋には連れてかないよ。俺だって普通の服屋ぐらい知ってるから」

たしかにダンジョン潜り始めてからはワークメنزによく行ってるけどさ……  
近いし安いし何でもあるしな。

「まあじゃあ、今度行ってみよつか。まーちゃんは？」

「俺は毛の薄い君らと違って、自前の毛皮があるからね」

マーズは得意げにそう言つて、首元の毛皮を肉球で撫で付けた。

「それ、夏は暑くない？」

姫にそう言われたマーズはちよつと肩をすくめ「その代わり、日焼けもしないから」と笑つた。

なんとなくマーズのふさふさの毛皮に手を伸ばしかけ、ニヤツとその手をはたかれた。

俺は毛の多い友人の毛皮の感触に想いを馳せながら、姫とおそろいのマグカップに入った麦茶を飲み干したのだった。

その日の昼。

東四ダンジョンとうしよんで店番をしながら通販サイトの情報を全て確認し終え、手打ちの一斉送信メールを家電量販店で買った高くて遅いパソコンで送り終えた俺の元に、パウードスーツを着込んだ侍がやってきた。

「調達屋！ なんかおたくの名前が入ったドローンが飛びまくってるんだけど！」

「あ、雁木さん。あれうちのです。調査用に飛ばさせてもらってるんですよ」

「いや、そうじゃなくて！ 十個や二十個じゃ効かないぐらい飛んでたぞ！ あんな誰が操縦してるんだよ！」

「いや、そりゃAIですよ。AI」

ほんとは姫が全部制御してるんだけど。

うちが人手不足だったのは常連全員知ってる事だから、経営陣三人で相談してAI運用って事にしたのだ。

千台ぐらい作って、東四だけじゃなくて東京都内のほとんどのダンジョンに飛ばして  
るらしいからな。

姫曰く千台ぐらいなら眠っても飛ばせるらしいけど、本来なら千人の人を雇わなきゃいけないから大変な事なんだよな。

「AIがドローン？ 凄っ！ ……っっていうかそれって、いいの？」

「法律に駄目なんて書いてないですから。ダンジョンでドローンは自由に飛ばしていいんですよ」

実際ダンジョンでは偵察のためにドローンを飛ばすパーティも多いしな。

当然、こんなに台数を飛ばすパーティはどこにもいないけど。

「え？ マジ？」

「一応この国の法律じゃそうなってるね」

「知らなかったあ……」

もちろん法律にAIに関する規定はないんだけど……

まあ姫が大丈夫だと言うならばきっと大丈夫なんだろう。

今のところは、だけど。

「ところで雁木さん、パワードスーツの使い心地はどうですか？」

「あ、これ？ もう最高だよ！ やっぱスピードとパワーは正義だね！」

雁木さんはうちから購入したパワードスーツのフレームをコンコンと叩き、白い歯を見せて笑った。

うちのパワードスーツは、自衛隊への本格納品を始める前に民間の冒険者達の手に渡っていた。

自衛隊はあくまでもお役所だから、買う前に色々手続きがあつてなかなか話が進まないのだ。

「ただ、こんだけパワーがあると、今度は刀の強度が追いつかなくてさ……」

そうやって彼が叩いた腰の刀は、なるほどいつも差している金色の拵えのものではなかった。

なんだか無骨な作りで、よく見ると柄も布巻きじゃなくそういう形に成形されたゴムか何かのようだ。

「兄さん、刀駄目にしちゃったの？」

「実は調子乗ってたら思いつきり刃こぼれしちゃってね。今差してるのは予備の海外製の奴だね……」

雁木さんは苦笑いしながらそう言って、腰の刀の柄頭を力なく叩いた。

まあ、日本刀って魔物を切るようには作られてないもんな。

あ、そういうえばポイント交換商品の中に、魔物をぶった切れるような日本刀があったような……

「雁木さん、さつきお知らせでメールさせてもらったんですけど。うちのポイントサーブिसが電子化しまして。その中の景品に刀もありますので、ぜひぜひ……」

「え？ マジ？」

雁木さんはすぐにスマホを取り出して「マジじゃん」とカタログを確認し始めた。

ポイント交換商品の刀は、この間デモンストレーションに使ったむちやくちや硬いナイフと同じ金属で作られた物だ。

たしか姫が宇宙船の外装と同じ素材って言ってたから、今の地球じゃ絶対に手に入らない魔刀と言ってもいいだろう。

雁木さんはその魔刀の写真を見ながらうんうん唸って、ちらりと俺の方を見た。

「ちなみにその刀って、見せてもらおう事とかって……」

「すいません、ポイント商品もうちの配送センターからの配送になるんで今持っていないですよ。今度持つてきますね」

なんせ今日の朝にいきなり生えた商品だからな。

もしかしたら姫もまだ実物は生産してないかもしれない。

「マジかあ……いやまあどつちにしろ、ポイント足りてないんだけどね……」

「兄さんのパーティのポイント、姉さん達が全部化粧品に変えちゃうもんね」  
「そうなんだよなあ……」

雁木さんのパーティは女性比率が高いパーティだから、圧力と多数決でいつもポイントの使用権は女性陣に取られてしまうらしい。

まあ、その代わりというわけではないんだろうけど、雁木さんには高価なパワードスーツが回されてるわけで……

ちゃんとパーティ内でのバランスは取られているんだろうと思いたい。

「まあとにかく、俄然ポイントが重要になってきたのは違いないから、もうちょっと頑張るわ……」

「どうもありがとうございます！ 助かります」

「……ところで、調達屋的には魔石以外にも欲しい物ってないの？」

「いやそれは……今のとこ……」

東京壊滅級のモンスター<sup>ドラゴン</sup>の死体とかなら買いたいけど、さすがにそんなもん買ったら会社<sup>ト</sup>に自衛隊がおっとり刀で乗り込んでくるだろう。



買取品目が増えれば仕事も増える、とりあえず戦闘ロボットができるまでは今の魔石  
買い取り専門体制がベストだと思う。

「スキルオーブは？ オークションにも出さずに置いてあるのがあるんだけど……」

「スキルオーブも今んとこいらねえね」

「あ、そう……」

ため息をついて肩を落とした雁木さんはギツチヨンギツチヨンと音を立てながら  
去っていくようにして、途中で振り返ってまた戻ってきた。

「コーヒー買いにきたの忘れてたわ、カフェオレね」

「毎度どうも」

雁木さんは三百円とコーヒーを交換して今度こそ去っていった。

パワードスーツに覆われたその背中を見送りながら、俺は小声でマーズに話しかけ  
た。

「ねえ、やっぱスキルオーブって買うの駄目なの？ 便利そうだけど」

「絶対駄目。前にも言ったけどさ、ジャンクヤードにも絶対に入れないだよ」

マーズはニユツと爪を出しながら怖い顔でそう言った。

「正直どこの誰があんなヤバい物を量産してるのか知らないけど、使ったら絶対にろくな事にならないよ。何のリスクもなく新しい力に目覚めようなんて虫のいい話、あるわけがない」

「宇宙にもスキルオーブと同じような物があるんだっけ？」

「ソウルスリーブ神化剤とか言われてるけど。要するに、人の魂魄を物質化して取り込む類の物だね」

「そんな事して平気なの？」

マーズは遠くを見つめながら、うんざりしたような声音で「平気なわけないよ」と答えた。

「狂って死んで、二度とこの世に生まれて来なくなるって言われてる。でも、それでも試す奴が後を絶たないんだ。あんなもの宇宙に拡散したら……ただでさえ人が少ない銀

河がますます寂しくなる」

「じゃあ雁木さんは……」

「幸い二本差しの兄さんはまだ狂ってないみたいだけど、それでも安全な物とはとても思えない。トンボもあれには絶対に触らないでね」

「触らないよ……」

俺は夏なのになんとなく薄ら寒いような気分になって、上着のジツパーをギュツと上げた。

それと同時に、上着の中からピコン！ と音がした。

「うおっ！」

「うわっ！ 何!？」

「あ、スマホの通知か……」

突然叫んで飛び上がった俺を睨むマーズに片手チョップで佐びながら、スマホのロツクを解いた。

「え？ あ、マジかあ……」

「何？ どうしたの？」

心配そうにこつちを見るマーズにも見える場所にスマホを持っていく。

その画面には『東四の奥でドローンにポイント券向けた客が救援呼んでるけど、どうする？』という、姫からのメッセージが表示されていた。

## 第29話 ドーナツと猫とコールセンター

「これ誰だろ？ フェイスガード取ってくれないとわかんないな」

「あー、でつかい段差下りたら設置してた縄梯子が落ちて戻れなくなっただね。」

姫からスマホに飛ばされてきたドローンの映像を見ながら、俺達は要救助者の状況を確認していた。

「さすがに放置できないし、通話して話聞いたりできないかな？」

『その前にどうすんのか決めとかなきゃでしょ』

「でも助ける以外ある？ さすがにここで見捨てたら外聞悪すぎるよ」

「トンボさあ、姫が言ってるのは多分、会社としてどこまでやるのかって事だと思おうよ」  
どこまでやるのか……

あ、なるほど。

助けるのはいいいけど、この一回目の対応が今後の対応にも関わってくるからよく考え

ろよつて事か。

たしかにこのパーティにした対応を、同じ状況になった他のパーティにはしないとなると、きつと文句が出るだろう。

もちろんそんな契約などないのだから、本当ならば無理筋のクレームとして処理することもできる。

だが、ここは地の底、バトルフロント。

そんな娑婆の理屈は通用しない。

ダンジョンではどんな事でも命がけ、故に冒険者ができる範囲で助け合う事は契約以前の不文律だ。

そしてそれをしなかった事で買う恨みも、恨みを買ってしまう相手の強面度も……ハ  
ンパじゃないのだ。

だが、企業として全ての冒険者を助けられるかどうかというのはまた別問題。

俺は今、バランスの必要な決断を求められていた。

「……通報。管理組合キルドに要救助者ありとして通報しよう」

「それぐらいもう自分達でやってるんじゃない？」

「ダンジョンの奥なら電波が届いてない可能性もあるし、してたならそれでいい。二元々

そういう契約してたならまだしも、今回はたまたま見かけたただけなんだから、詳しい場所と状況だけ伝えればこっちの義理は果たした事になる……よね？」

「……俺は、トンボがいいならそれでいいよ」

『通話はどうする？』

「……しない。助けに来てって言われて拒否したら、それはそれで揉めそうだから」

俺がそう言い切ると、マーズは何も言わずに口の端をにと上げた。

『……んじゃ、場所言うね』

「あ、待ってね、メモ取るから」

こうして俺は、自分以外の誰も責任を取ってはくれない決断を下し。

その繰り返しで会社を経営している、世の社長さん達の大変さをひしひしと感じながら……

自分の背骨と同じようなふにやふにやの字で、しっかりとメモを書き付けたのだった。

俺の決断は正解だった部分もあり、やはり少々軽率だった部分もあったようだ。

結局あのパーティが立ち往生していた場所はWifiの圏外だったようで、うちの通報のおかげで数時間後にきちんと組合の救助隊に救助されていた。

組合からも冒険者からも感謝され、これでバツチリOKと言いたいところだが、そうは問屋が卸さなかった。

俺達がダンジョンで店を出していると、これまでの常連さんだけではなく新規のお客さん達からも、緊急時の救援要請についての問い合わせをされるようになったのだ。

どこが震源かは全くわからないが、どうもどこかでねじ曲がった話が拡散されているようだった。

「このの会員になると、いざって時に組合に連絡してくれるんだって？」

「いや、その件につきましてはまだ検討中でして……」

今日もこれまで話しかけられた事もないようなワーウルフの冒険者にそう尋ねられ、俺はここ数日で何度も何度も使った断り文句を返した。



「え？　ほんと？　それあるんならポイント会員になろうと思つてたのに……」

ワーウルフは失意にしつぽをだらんと垂らし、なぜかホットドッグを買つて帰つていった。

しかしポイント会員つて……うちはガソリンスタンドじゃないんだけど……

まあでも、これを期に魔石を売つてくれる人が増えると美味しいのは違いないんだよな。

それに、正式にサービスとして提供していなくとも、どうせきつとドローン探索中に要救援者を見つけたらうちが救援要請をする事になるのだ。

よし……やるか！

俺は救援要請を正式にサービスにする方向で姫とマーズにお伺いを立て……

纏まった話と大量のお土産のドーナツを持って、うちの発送場のボスである阿武隈部長を直撃したのだった。

「救援要請業務？　つまりコールセンターみたいなもの？」

従業員をやってくれている冒険者の奥様方の手で花瓶やテーブルクロスなんかを置かれ、そこそこ華やかな内装になった元工場の事務所。

その一角に対面型に置かれた革張りソファに座った彼女は、壁の木目調エアコンが吹き出す冷風に髪を靡かせながら、チョコがけのオールドファツションドーナツを片手にそう尋ねた。

「そうですね……それで、一応こういうものを作りまして……」

俺はソファの間にあるローテーブルの上に、バックパックから取り出した防犯ブザーのような装置を置いた。

紐を引っ張るとピンが抜けてデカイ音になるアレだ。

「これって防犯ブザーとは違うの？」

阿武隈さんはそう言いながら不思議そうに装置を手にとって、ピンの先についている紐をちよいちよいと動かした。

「それは特殊な信号を出す発信機です」

「特殊って？」

「まあざっくり言うと、超遠くまでSOS信号を出してくれる無線機って事。しかもMGRS式で今の居場所も送信してくれるの」

ピンク色のチョコでコーティングされ、更にその上に色とりどりのチョコスプレーのかかったドーナツを持ったマーズが、俺の隣からそう補足する。

駅前にドーナツ屋があるからうちの家でもよく食べるのだが、彼はなんかこう……こういうキラキラとしたドーナツがことのほか好きなのだっただ。

「MGRSって、軍隊とかが使う座標の指定法でしょ？ まだざっくりした地図しかないダンジョンの中でそんな事しても……」

「いやいやそれが、地図はもう出来上がってるんですよ」

「えっ!?!」

俺の言葉に目を見開いて驚いた阿武隈さんは、机の上にぽとりとドーナツを取り落とした。

まあそりやそうだろう。

ドローンを飛ばしはじめてからまだ二週間ほどなのだ、仕事が早すぎて普通は面食らうだろう。

「まあそれを作ってる途中で今回の救援要請の業務が生えたんだけど。地図自体はAI使ってドローン飛ばしまくって作ったんだよね」

「なんか社内チャットでダンジョンにドローン飛ばすって話は聞いてたけど、AIって凄いのね……」

まあ、本当は姫の仕事なんだけど、こういう話はAIのしわざって事にした方が通りがいいだろう。

だいたいドローンを寝ながら千台飛ばせる脳を持つてる人がいるなんて、誰も信じてくれないからな。

「とりあえずその地図を管理組合と共有しまして、こちらから救援を要請させてもらうという形にさせて頂くかと思っております」

阿武隈さんはそう言った俺の顔をまじまじと見つめて、なんだか安心したような顔を見せてため息をついた。

「姉さん、どうかした？」

「え？ いや、救援チームを組織しろなんて話じゃなくて良かったかな〜と思って……」  
「やだなあ……そんな現場に負担のかかること、相談もなしにやるわけないじゃないですか……はは……」

隣のマーズからジト目で見られている気がするが、俺だって日々反省はしているのだ。

「じゃあさそのコールセンターの所長に、うちの元リーダーなんかどうかな？」

うちのというのは多分、解散した阿武隈さんの冒険者パーティ『恵比寿針鼠』の事だろう。

そしてそのメンツは全員、今この配送場で働いてくれた。

「飯田さんですか？ いいですけど」

「最近はお心の方もだいぶ落ち着いて、ここの仕事にもやる気出してるみたいだからさ。社員登用の話してもいいかなって思ってる」

「いいんですか？ ありがたいです」

「飯田は元バレー部主将だし、元々一部上場のシステム開発会社で働いてたぐらいだから、下に人つけても全然大丈夫だからさ」

えっ？

そんな凄い人材がなぜ冒険者に……？

前から思ってたけど、なんか世の中世知辛すぎるような……

「前の会社も飯田に問題があつて辞めたわけじゃないから、そこは心配ないよ」

「いえいえ、そこは全然心配してませんから」

「それよりさ、もう一人の姉さんはどうなの？」

「あ、高井の事？ OK出るかわかんないけど、一応一緒に誘ってみようか？」

「ぜひぜひ！」

俺達は涼しい事務所で色々と話をして、ドーナツを食べてから帰路についた。

汗だくで電車に乗っている最中に入った『姫の分は?』という連絡で、また駅前のドーナツ屋に寄ることになり……

マーズの選んだキラキラしたドーナツと、<sup>キ</sup>激<sup>テ</sup>安<sup>コ</sup>の<sup>ロ</sup>御<sup>テ</sup>殿<sup>デ</sup>で買ったかき氷を持ち、俺達は蒸し暑い夕焼けの中を歩いて今度こそ家に帰ったのだった。

## 第30話 実家と姫とロボの足首

「うおーっ！ かつけえーっ！」

「まだ足首ができただけじゃん」

川島総合通商の配送担当者が頑張っている作業スペースの隣、過去には加工機械等が置かれていた工場部分で、俺はマーズと戦闘ロボットを作っていた。

「こんなもん二人でやる事じゃないんだから、こっから大変なんだよ？」  
「いやそれは、たしかにそうなんだけど……」

戦闘ロボット作りは魔石から物を造る製造機械を何台も並べて、まるで工場系のシミュレーションゲームみたいに魔石からパーツを作っていく事から始まった。

もちろん機械は姫の遠隔操作だが、そこからの組み立ては全部俺とマーズの人力だ。でも部品の精度が完璧で手直しも必要ないし、ハンディクレールン反重力装置とかいう物を軽くする銃みたいな装置を使って気軽に部品を動かせるから、多分普通の組み立て工場と比べるとめ



ちやくちや楽なんだよね。

「いやでも、やつぱかつこよすぎるわマジで。これ俺のかあ……俺専用機かあ……何色に塗ろうかなあ」

「えーっ!? 色塗るの? あれつてエースパイロットがやるからかつこいいんだよ」

「地球には俺しかパイロットいないんだからいいんだよ。やつぱ金色かな……」

「なんで?」

それはもう、浪漫としか言いようがないな。

俺は軽自動車よりも小さいぐらいのサイズのロボットの足首をじつと見つめ……深い満足感と共に、一人頷いたのだった。

八月半ば、お盆シーズンがやってきた。

川島総合通商もこの時期はお盆休みで、あらかじめ取引先には通達して社員やバイトの人達もお休みだ。

もちろん社長の俺だって実家に帰る。

とくに今年は「ぜひともマーズと一緒の帰省を」という、川島本家からの熱い希望もあり、俺達は三人揃って俺の地元へとやって来ていた。

姫は未だに夜は俺と手を繋いでないと眠れない状態だし、何なら帰省自体取りやめようかとも思ったのだが……

「いちおー挨拶しとく」という姫の言葉もあり、こうして全員参加で日帰りの帰省となった。

「トンボの実家、こういう感じなんだ」

街のファッションセンターで買ったサングラスを外した姫が、俺の引き戸の実家を見てそう呟く。

前々から「ちゃんとした服を買おう」という話をしていた事もあり、今回の帰省に合わせて色々服を買い揃えたんだが、淡い色のワンピースを清楚に着こなした姫はまるでお姫様のようなだった。

ん？ まるで……？

いや、地元では普通にお姫様なんだったっけか。

「電車は電車で疲れるけど、タクシーもタクシーでしんどいね」

宇宙ではああいう狭い座席に何時間も詰め込まれる事はないんだろうか、マーズはうんざりした様子で首をポキポキと鳴らした。

「でもここ、車で一時間半ぐらいだし全然近いよ。ここらへんから東京に通ってる人もいっぱいいるんだから」

「毎日通うの？ 往復三時間だよ？」

「車じゃ通えないから、通うなら往復四時間だね」

げーっと嫌そうな顔をするマーズを横目で見ながら、俺は引き戸の鍵を開けて「ただいまー」と中に入る。

正月とほとんど変わらない玄関には、マーズ用のゼブラ柄のスリッパと見た事のないピンク色のスリッパが並べて置かれていた。

「あれーっ？ お兄ちゃん帰ってくるの今日だけ？」

台所の方からテレビの音と共に妹の千恵理チエリの声が聞こえてきた。

「先週から言つてたじゃん。マーズ、姫、上がつてよ」

「おじやましまーす」

「おじやまします」

「お昼どうする？ お母さんがスーパー行くつて……え？」

話しながらガラツと台所の扉を開けて出てきた妹は、姫の顔を見て固まった。

「お……」

「おっ」

「お兄ちゃんが女の子連れてきたーっ！」

妹が叫びながらリビングに繋がる廊下を走り去ると、すぐにリビングから父と母が一緒に出てきた。

「ほんまやー！」

「え？ ていうかお兄ちゃんの彼女!？」

「トンボあんた、一緒に住んでる人連れてくるって言わなかった?」

大混乱に陥った三人の視線を一身に受けた姫は曖昧に微笑み、俺とマーズは「まあまあ」と川島家の面々をリビングへと押し戻す。

ごまかしたカバーストリーにしたって長くなる話なのだ。  
さすがに蒸し暑い玄関で説明するのはごめんだった。

「なるほど、お国元にいられんようになって縁のあったマーズさんを頼って……そらあ……そらあ大変でしたねえ」

浪花節の男である親父は、休日でも酒も入っている事もあってか……

実家が巻き込まれたトラブルを避けるため単身地球に避難してきた、という姫のカバーストリーを聞いて速攻で瞳ウルウルの状態だった。

この人は元がもうそうなのに泣き上戸なところまであって、子供のお使いの特番とか

でもめちやくちや泣くのだ。

「せせこましい家ですけど、良かったら実家やと思つてゆつくりしていつてくださいね」  
親父、マーズの時にも同じような事を言つてたな。

「あ、ユーちゃんユーちゃん、お昼お寿司取るけど食べられる？」

「ありがとうございます友子さん。お寿司大好きです」

「ねえねえ、一緒に会社始めたつてのは聞いてたけどさ、ユーリさん個人はお兄ちゃんと  
どういう関係なの？ あ、てかイイスタやつてる？ ユーリさんめっちゃオシャレだし  
絶対フォロワー数多いよね？」

「それやつた事ない、千恵理チエリはやつてるの？」

しかしなんか姫、馴染みが早い、早くない？

銀河系のアイドルの如才のなさに恐れ慄きながら、俺は地元名産の二十世紀梨を齧つていた。

そんな俺のTシャツを、隣で座椅子に座つた銀河系の猫がちよいちよいと引く。

「ねえトンボ、お盆ってお寿司食べるものなの？」

「え？ いや、そんな事ないけど」

「じゃあ、何か特別な物は食べたりしないの？」

「お盆は何にもないんじゃない？ 何で？」

「だって日本人って、イベントに絡めて何かと物を食べたがるじゃん。大晦日はそば、正月はおせちでしょ、節分は太巻き食べてたよね、ひな祭りとか言っちゃらして寿司食べたし。だからお盆も何かあるのかと思ってさ」

「マーズが不思議そうにそう言うと、うちの親父が缶ビール片手に話に割って入ってきた。」

「マーズさん、お盆は精進料理っちゅうて、お肉を使わん料理を食べますねん」

「精進？」

「まあ仏教の行事ですから。この時ぐらいいはお坊さんと同じもん食べましょかって、そういう事ですわ」

「へえ、仏教の宗教家って肉を食べないんだ。あ、だから今日も寿司なんだね」

感心したような顔でそう言うマーズには悪いけど……必ずしもそういう事ではないと思うな。

俺がなんとも言いあぐねていると、親父が訂正してくれた。

「いや、多分ですけど、お寺さんもお肉は食べてはると思いますわ」

「え？　なんで？」

「なんて言うたらええんやろなあ……食べはらへん人も、おるにはおるんやと思いますけど……」

外国人にそこらへんの感覚を説明するのは結構難しいのだ。

親父はしどろもどろに話すがどうにも纏まらず……

なんとも言えない顔で、麦でできた般若湯を飲み干したのだった。

「友子さん、お夕飯手伝いますよ」

「え？　いいのいいの、ユーちゃんはゆっくりしてくれたら」



「私日本に来たばかりなんで、良かったら日本風の味付け教えてください。トンボがお母さんの料理は美味しいって言ってたんで気になってたんです」

「あらやだあの子、そんな事言ってたの？ 普通の家庭料理なのに恥ずかしいわ」

「私も手伝おつか〜？」

「あら、あんたいつつも手伝いなさいって言ったら逃げるじゃないの」

「いいじゃん、千恵理チエリもいっしょにやろ」

昼から夕方までの僅かな間で、姫はすっかりこの家に馴染んでしまった。

母と妹とノンストップで喋り続け、今ではとても今日をはじめて会った関係とは思えないぐらいに仲良くなっていた。

それにひきかえ我々男三人組は寿司を食ってリビングに寝そべって酒を飲み、しょーもない話をしながら競馬の中継を見ていただけ。

やはり女性のパワフルさは凄い、勝てる気がしない。

俺は少しだけ残っていた缶ビールを最後まで飲み干し、台所で楽しそうに話している女性陣の背中をちらりと見て……

そこに割って入って冷蔵庫に行くことを、さっさと諦めた。

うちの女手三人が作ってくれたオムライスと味噌汁はいつも通りの母の味で、それを

食べた後、俺達はうちの親戚が作っている梨と落花生を山ほど持たされて家路についた。

タクシーの後部座席に三人並んで何も喋らないでいると、ほどなく真ん中に座っているマーズの鼻から静かな寝息が聞こえてくる。

時々高音の混じるそれをなんとなく聞いていると、俺の右手の親指を姫の小さな手がギュツと握った。

俺はその手を両手で包み、なんとなく遠くに見える気をする地元の風景を、車の窓からじっと見つめていたのだった。



## ・迷歴

世界が一つではないという強烈なパラダイムシフトによって、世界の暦はグレゴリオ暦から迷歴へと切り替わった。

移行については未だに揉めていて、使っていない国もある。

## ・ダンジョン

二十二年前に突然見つかった、異世界と繋がってる謎の穴。

最初は魔物が出てくるそこを埋めたり塞いだり爆破したりと色々やっていたが、ほどなく世界中にポコポコ出来まくって管理不能に。

中から異世界人や魔物がやってきた事もあり、二十年経った今でも各国絶賛混乱中。

日本その他の比較的被害の少ない穏健派諸国は異世界人たちを受け入れ、ダンジョンから富を生み出そうと躍起になっている。

もちろん全ての異世界人を拒絶している国もある。

## ・冒険者

迷歴以前と違い、ダンジョンに挑む者、又は魔物と戦う者を指す言葉となった。

日本に初めてダンジョンが発生した時、バットや包丁などの装備で挑んで帰らぬ人と

なった者も多いが、生還して物資を持ち帰った者、そのまま異世界に突き抜けて異世界人を嫁として連れ帰った者、魔物から老人ホームを守るために手製のロボット戦車で戦った者等もいた。

日本中大混乱の中、凶器を準備して勝手に魔物と戦っていた彼らの中には警察に逮捕されたりした者もいたが、状況が明らかになった時点で全員釈放されている。

今やその混迷期の英雄がそのまま政治家になったり、映画スターになったり、玉の輿に乗ったり、異世界で貴族となったりしているため、冒険者は人生一発逆転チャンスに非常に夢のある職業だ。(大本営発表)

実際のところは迷宮シヨックから二十年経って危機感も薄れ、もはや都会では3K仕事としてバカにされがち。

なお一部地方では、槍の一つも振れなければ学校にも行けない地域もあり、冒険者達は未だ現役のヒーローである。

#### ・異世界

現在地球の国家が国交を結べている異世界は数えるほど、その中で定期的な貿易ができているのは三ヶ所程度。

ダンジョンが険しすぎて通商団も命がけ & ダンジョンを安定して行き来できる

高位冒険者にいちいち金払ってたら大赤字のダブルパンチで貿易やる人がいない。

国策として高位冒険者を無理やり公務員にして交易させようとした国があるが、高位冒険者はどこでも生きていけるので異世界や他の国に亡命されてなかなか上手くない。

・異世界人

ダンジョンを渡ってこれる異世界の高位冒険者達なわけだが、地球の娯楽や食事にはマったり、柵のなさに惹かれたりして地球に居着く人もいる。

居着いた地球で地球人と混ざって冒険したり、商売したり、サラリーマンになったり、色んな人がいる。

地球人との間に子供は残せたり残せなかったり、そこはまだまだ研究が続いている分野である。

成長の早い獣人系だともう第三世代が生まれてたりする。

地球で一番有名なのは薬剤師のエルフで、日本で一番有名なのはオーク族二世の相撲取り。

・スキル（地球）

ダンジョン出現と共に人間が使えるようになった超常の力。

ライターの代わりぐらいの火しか出せなかったり、ちよつと体の皮膚が固くなる程度の力しか持たない者が大多数。

しかし、ダンジョンが出現したての混乱期にスキル持ち達が大活躍したおかげで、地方では対魔物対策の切り札として見られ、様々な勧誘の対象となっている。

勧誘だけではなく、スキル持ちに異性をあてがって血を取り込もうとしたり、スキル持ち同士で血を残させようとしたり、人権無視の行為が普通に行われている。

人が多く、スキル持ちに頼らなくても大丈夫な都会と違い、地方は常に人手不足なのだ。

なお、実際にスキル持ちカッブルからスキル持ちの子供が生まれてしまった例も存在して、スキル遺伝説は今だに広く信じられている。

### ・スキルオーブ

ダンジョンの壁や床に析出するビー玉ぐらいの宝玉。

色や形である程度スキルの種類が判別でき、飲み込むとそのスキルを得る。

今のところマーズが懸念したように狂ったり死んだりした人はいないが、飲んでもスキルを得ない人もいるらしい。

・ダンジョン管理組合キルド

全国展開の組織ではなく、基本的には各都道府県や自治体別に運営されている。下手に組織を纏めて、都会基準で方針を決められると地方は壊滅してしまうからだ。まだまだマシな日本ですら冒険者の争奪戦は激化の一途を辿っており、地方の管理組合では冒険者になるとその日から衣食住がタダになったりする。

・賞金稼ハンぎダイ

冒険者の中でも、特に賞金のかかった魔物を狙う者たち。

それを狙う理由は様々で、金、名誉、献身、そしてスリルなどが挙げられる。ある意味一番冒険者っぽい人たちだ。

## ・激安の御殿キテコーテ

関西資本のデイスカウントストア。

深夜まで営業しているため、夜型の若者からの支持が厚い。

東京のとある店舗には、白いジャージのめちやくちや可愛い女の子が頻繁に訪れるらしい。



〔宇宙用語〕

・リンド

銀河で使われているお金の一つ。

別に銀河の共通通貨というわけではなく、あくまで地球のドル的存在。場所によっては普通に使えない。

・ポプテ

宇宙の猫、ポプテ族。

基本的に個人の名前を持たず、嗅覚と毛皮で人を見分ける。

死んだポプテは同じ毛皮のポプテに生まれ変わるといふ信仰を持つが、これはポプテ族だけの特色ではなく、個人の名前を持たない毛皮系の種族にはよく見られる宗教観である。

地球ではケット・シーとして大人気な彼らだが、宇宙ではそうでもない。

金にがめついポプテが銀河中を荒らし回った時期があつたのも原因だが……

多分宇宙にはもっと可愛い動物系の種族がわんさかいるのだろう。

・ウエドソン人

地球人と同じ見た目の種族、猿型人種の事。

環境適応力と繁殖力が高く、銀河でもそこそこ多数派。

・魂魄

魂魄とは人の魂の事、宇宙的に言えばその人のアイデンティティを司る不可視の物体の事である。

魂魄は流転し、肉に宿る。

銀河の科学ではそう認識されている。

基本的に前世の功罪は次の人生には持ち越せないが、そんな事知るか俺が生きてる限り恩は返すぜって人も、何回殺しても恨みは晴れねえ！って人ももちろんいる。

前世の特定を法律で禁じている星系もある。

・異能（銀河）

魂魄に紐づく力、と銀河では言われている。

ぶつちやけ星の海を航海する段階まで技術が進むと、九割のスキルは他の技術で代替可能。

だからといって他の人にはできない事には違いないので、スキル持ちはたとえそれがどんな小さな力でも割と選民思想こじらせがち。

基本的に普通の人からも白い目で見られがち。

そんなスキル持ちの中でも上澄みの中の上澄みの残り一割、他の技術で代替不可能な異能者ジャグラーと呼ばれる高位異能者達はそれはもう驕り高ぶりがち。

そのため、その隙を商売人につけこまれるのだ。

ジャグラーは曲芸師、奇術師、詐欺師の意。

魔術師のタロットの別名でもある。

### ・ヤパブリンカ

汎用麻薬。

「どの種族でも楽しめる」というのが売り文句のソフトドラッグだったが……

別の麻薬と同時に接種することにより、樹木系の種族を感染性のある凶暴なゾンビに変化させる効果が見つかった。

超巨大な資源採掘船がウエドソン人のエンジニア一人を除いて全滅するという大事件が起き、所持しているだけで死刑が決まるレベルの麻薬となった。

## ・銀河通商機構

一つの惑星系を丸ごと使った、何でも揃う超巨大なマーケットを管理運営する組織。様々な特許や利権、実働部隊を握っており、勢力間の調停も担う。マーズの所属していたマージョーハ輸送連隊もここの紐付きだった。

## ・冷凍処置

生体を超急速冷凍して保管しておく技術。

人に使うのはゴリゴリの違法。

とはいえめちやくちやに枯れた技術で、滅多なことでは死亡しないどころか障害もほぼ出ない。

解凍は自然解凍で行えるのも経済的。

## ・パラス 分子置換波射出装置

缶詰に偽装された銃。

光線を当てた物を何でも無に帰してしまう銃と考えると強く見えるが、所詮は個人の携帯武器。

大質量には勝てないし、宇宙にはこれを無効にする装備も山ほどある。

・銀河ギャラクシー総合商社

銀河通商機構の一部で、各星系に支店を出して莫大な利益を上げている。この支店がある星系は都会として扱われ、他の星系から羨まれるという。

・空間転写装置

ホロヴィジョンを発生させる装置。

地球で言うところのHDMIやDP端子のついたプロジェクターのようなもの。

・銀河ネットヤカタ

銀河の大半で配送料を無料にしてくれちゃう凄い企業。

その分割り高だったり型落ちだったりするが、銀河の田舎者は割とみんなこのユーザーだったりする。

・安定化マスタースターチャンネルマオハ

トンボに宇宙の金塊と呼ばれる、変換効率のいい安定した物体。

世が乱れば乱れるほどこいつの相場が高くなる。

黄金は食えないが、安定化マオハは食える。(変換すれば)

ギヤラクシーポリス  
・銀河警察

古い古い組織で、一時期は世界最強として恐れられた時期もあったぐらいなのだが、今は見る影もない。

ちよつとした事なら動いてくれるが、宇宙海賊に追われている時に救助を要請したりしても「民事不介入」とか言つて来てくれなかつたりするので嫌われている。

彼らにも言い分はあるが、ここが機能不全を起こしているせいで自力救済に走った勢力が千年戦争を長引かせた経緯もあり、一部地域では海賊よりも嫌われている。

ゴールデンヘッドドラゴン  
・金頭龍商会

高レベルの異能者を多数抱えた、そこそこ老舗の商会。

一度交わした契約は遂行率いまだ100%、信用度は銀河トップクラス。

誰に何でも売ると言つて憚らず、立入禁止の星系も多い。

創業者が高次元体と契約を交わした証文が銀河最大の大学の奥深くに保存されているらしい。

この創業者は他にも色々な商売を興しており、第二世代戦闘機で4000機の敵機を

落とした記録を持ち、頭を撫でるだけ、微笑むだけで異性を惚れさせ、160人の妻を持ち、一時は一つの星系を丸ごと有する王でもあった。

創業者の没後、最も期待されていなかった創業者の末子が継いだ金頭龍商会以外の商売は全て失敗、所有していた星系は他勢力に併合され、一族のほとんどは皆殺しの憂き目に合った。

銀河にはこういう商会がいくつもある。

・レドルギルド

海賊行為も行う武装勢力。

そこそこ力があり勢力も大きい、あくまでそこそこレベル。

・ヴァラク財閥

戦闘機から惑星級空母までを開発、製造、販売する銀河の大物。

このクラスの財閥となれば自前の暴力装置の一つや二つは普通に持つてる。娘に舐めた事をしてくれたレドルと戦争中。

・マージーハ輸送連隊

バリバリに武装した輸送船で宇宙を駆け回る屈強な運び屋。

普通の海賊はマージョーハの船には近づかないが、逆に落とせば実入りは大きいので積極的に狙う者もいる。

業界シエア3位なのが自慢。

「川島家」

・川島トシボ翔坊

地球人、男。

普通すぎるぐらい普通のゲームや漫画好きの大学生。

憧れの東京で一人暮らしをしていたら、変な異能スキルに目覚めて宇宙の猫を拾ってしまった  
た駆け出し異能者ジャグラー。

将来普通にサラリーマンになるつもりだったので基本ふわふわ。

大学デビューに普通に失敗し、普通に友達がいらない中、普通に真面目に大学に通っていた。

やる時は覚悟を決めて命を賭けるが、それで女性から惚れられたりはしないぐらい普通の人。

マーズと共に日用品や食品をダンジョンの中で高値で売り捌く調達屋を始め小銭を



稼ぐ。

ピザ屋の配達バイトをやっていたが、調達屋を法人化し川島総合通商を起こしたのでさすがに辞めた。

1話〜30話まで20歳

他人と品物を取引する市場マーケットスキルの亜種であるジャンクヤードスキルを持つ。

観光バスぐらいの大きさなら何でも入り、今のところ容量の底が見えたことはない。

もうお前運送会社やれよ。

宇宙人からレベル4の異能者と言われたが、本人は特に自覚なし。

というか単純に比較対象がなさすぎてよくわからないらしい。

川島家が過去に飼っていた猫のマーズにクリソツの宇宙猫のマーズを宇宙に帰す事が目標。

・マーズ

宇宙の猫、ポプテ族。

銀河と地球では年の数え方が違うため年齢不明。

マージーハ輸送連隊所属の船乗りで、船では曹長の地位にあった。

海賊に捕まって冷凍され、トンボのジャンクヤードへミカンの皮と交換されてきた。宇宙人でも普通の人はあんなに色々知らないよ。

生まれはポプテの星の一つ、ポピニヤニア。

故郷に戻る事が目標。

・ ユーリ・ヴァラク・ユーリ

義体化ユーザーのウエドソン人。

銀河と地球では年の数え方が違うため年齢不明。

元銀河級のアイドルで、人気絶頂の時に身内の裏切りで海賊に攫われた。

全部剥ぎ取られ脳殻のまま放置され、トンボのジャンクヤードへドラゴンの死体と交換されてきた。

軍事企業であるヴァラク財閥の長女で、前世はパロットという王家の夭折した姫君。

一人称も姫、あだ名も姫。

演算特化の高級脳殻を装備していて、地球程度のインターネットじゃ敵なし。

寝ててもドローン千台ぐらいなら飛ばせる。

深刻なトラウマに悩まされており、トンボの手を握っていないと眠れない。

買い物なんかに行くときよくナンパされるが、元々最強のモテ属性を持つ彼女は歯牙にもかけない。

実は義体でも遺伝子情報から卵子を合成すれば普通に子供を作れるが、彼女はこれまで未婚で子供もいない。

・川島隆志

川島家の父。

トンボの二十四歳年上。

独特なセンスを持ち、川島家の子供達をキラキラネームにしてしまった。

大の猫党だが犬も好き、アニメや漫画も好きでゲームも好き。

ちよいボロいが関東に一軒家を構える。

・川島友子

川島家の母。

トンボの二十二歳年上。

あんまり細かいことは気にしない。

家を出て東京の大学に行ってしまったトンボを気遣って、色々仕送りをしてくれる。

・川島千恵理<sup>チエリ</sup>

トンボの妹。

トンボの二歳年下。

元々千恵理<sup>チエリ</sup>も東京の大学に行くつもりで、その時一緒に暮らす予定もあつてのトンボの一人暮らしだったのだが……気が変わって地元<sup>チエリ</sup>の大学に就学してしまった。

〔冒険者〕

・吉田

プレートキャリアを付けた眼鏡の冒険者。

堅物で、責任感が強い。

彼の妻は川島総合通商でアルバイトをしている。

・雁木<sup>ガンギ</sup>

金の拵えの日本刀を二本差ししたイケメン冒険者。

二十代で、まだまだ現役バリバリ。

『抜刀』スキル持ちで、スキルオーブで『料理』も手に入れた。

いつもパーティーメンバーが女ばかりのハーレム系ラノベ主人公。  
実は豪運。

・気無久作きなし

バラクラバをつけた四十代のおじさん冒険者。

元水道屋さんで、会社の倒産を機に同僚を集めて水道管と金属バットを持って冒険者になった。

息子と娘がおり、息子と同世代のトンボを割と気にかけている。

大学生の娘が川島総合通商でアルバイトをしているが、そこで溜まったポイントのほとんどは化粧品に使われてしまっている。

・阿武隈あぶくま

目の下に濃い隈のある女性。

女性冒険者。パーティー『恵比寿針鼠』の元メンバー。

『高速思考』のスキルを持つ。

元々銀行員で、スキルが発現した後無理やり結婚させられそうになって東京に。

その後は冒険者として活動し、パーティーを解散してからはトンボに請われて川島総合

通商の部長となった。

・吉川久美子

眼鏡をかけた女性。

女性冒険者。パーティ『恵比寿針鼠』の元メンバー。

『恵比寿針鼠』が解散する原因となったドラゴン襲撃事件で重傷を負った。

今は川島総合通商の課長。

・飯田

普通の美人。

女性冒険者。パーティ『恵比寿針鼠』の元リーダー。

学生の頃はバレー部の主将、その後は一部上場のシステム会社に就職したが、激務に心をすり減らし自分で仕事のペースを決められる冒険者に転身、そこそこの成功を収めていた。

今は川島総合通商の社員。

・高井

黒髪おさげの女性。

女性冒険者。パーティ『恵比寿針鼠』の元メンバー。  
今は川島総合通商の社員。

・岡

禿頭の冒険者。

コンパウンドボウを背負う。

ピザの焼き加減にうるさい。

## 第31話 地図と猫と映え効果

打ち水が一瞬で消えてなくなる灼熱のお盆明け、俺とマーズは防衛装備庁の佐原さんの呼び出しで、東京都ダンジョン管理組合キルド本部へとやって来ていた。

太陽から親の仇のように照らされてヘトヘトになった体を、ガンガンにかかった応接室のクーラーで急速冷却し。

世間話をしながら大ぶりの氷が入ったアイスコーヒーを飲んで、ようやく一息ついた所で佐原さんがおもむろに話を切り出した。

「ところで、風の噂で聞いた話なのですが……何でも川島総合通商の方ではダンジョンの詳細な地図を入手なさったとか？」

「まあね」

基本的に、この人と話す時はマーズが主体で俺は置物だ。

俺では知識も経験も足りなくて、率直に言っただけなら話にならないのだ。

相手もそれがわかっているから、いつも専務相手に話をしてくれていた。



「さすがの技術力ですな、あやかりたいですなあ。ああそうそう、物は相談なのですが……そちらの地図、自衛隊でも参考にさせて頂くことなどできませんかな？」

「地図は高いよ〜？」

「それは勿論、重々承知の上でのご相談なのですが……どうでしょう？ 御社の技術を疑うわけではありませんが、地図の正確性を確認する必要もある事ですし、今回のところは善意でのご提供というわけには？」

マーズはそんな佐原さんの言葉に大げさに肩をすくめた。

ぶつちやけあの地図、救援要請業務のために管理組合キルドに提出してる時点でもう自衛隊にも提出してるようなもんなんだけど……

自衛隊としては大手を振って使えるように、ちゃんと仁義を切って許可を取りたいって話なのかな？

「どうもこの国の人って回りくどいよね。ここには三人しかいないんだからズバツと言つてよ」

「いや、こりゃあ失礼。私普段は国内企業担当なもので、外国の方と話す時はどうしても

緊張してしまいました」

「川島も国内企業だけど？」

「こりやまた失礼。他意はありませんとも」

全く緊張してない様子の佐原さんはアイスコーヒーを一口飲んでにこりと笑った。

「いかがでしょう。御社のあのドローンの運用について、わが国はひとまず干渉しないという事ではどうですか？」

「別にうちは遵法でやってるけど」

「法というものは時節に合わせて変わっていくものでありますからなあ。ダンジョン内でのドローンへの制限緩和はAIを用いた大量運用に対応した物ではない、とだけ……」

「ふうん、お墨付きをくれるってわけじゃないんだ？」

「いやはや、わが国の国民はそういう特定企業に対する特別扱いという物に大変に敏感でして……」理解頂きたいところですねあ」

まあ、それはわかる。

うちだけ特例貰って得してるなんて事がバレたら、ワイドショーで二ヶ月ぐらい叩かれると思うもん。

マーズはチラツと俺の顔を見て、訝しげに右の目尻を下げた。

「……ま、いいか。ひとまず地図のデータを回せば、当面ドローンの使用への掣肘はないって事ね。いいよ、OK」

「ご協力に心よりの感謝を。それと、あのドローンや他の製品についても、また時期を見て導入のご相談をさせて頂きたいのですが……」

「特殊な製品が多いから、軍隊で使うほど数が揃うかなあ？ ま、どちらにせよ強化外骨格の後でしょ？」

「ええ、そういう形になると思います」

佐原さんの腹の底の読めない笑顔をぼんやりと見つめながら、俺は汗をかいたグラスを持ち上げてコーヒーを吸い込んだ。

腹の探りあいみたいな会話をずっと聞いていて、一言も喋っていないのに喉がカラカラだ。

来る途中でかいた汗はすっかり引つ込んでいたはずだが、俺はなんとなくポロシャツ

の背中 of 裾を引つ張った。

暑さでかくのとは別の種類の汗で、ポロシャツの背中がじとつと濡れているような気がしたのだった。

凶つたようなタイミングというのは、世の中に案外あるものだ。

夏休みが終わり高校生冒険者たちがいなくなつて多少静かになつた東四で、俺達が真面目な顔をした気無<sup>きな</sup>さんに受けた相談は、まさにそういう物だつた。

「パッケージの投下を頼めねえか？」

「え？ 何ですかそれ？」

「物資輸送だよ。奥までついて来いなんて言わねえ。お前んとこのドローンあるだろ？あれでなんとかなんねえか？」

俺とマーズは、思わず上と下から目を合わせあつた。

盆明けにちようどローンの話を政府側としたばかりで、正直言つてちよつとタイムリー過ぎる頼み事だつたからだ。

「それって何キロぐらいのもの？」

「逆に何キロぐらいのものを運べるかで物が決まってくる。しばらく東一で籠もる事になりそうだな」

バラクラバを半分めくった気無さんは、煙草の煙を吐き出しながらそう答える。

「東一でなんかあつたんですか？」

「いや、学者先生からの定点観測の依頼だよ。かなり険しいところに入るから最低限の荷物しか持つていけなくてなあ」

なるほど、学者さんからの依頼ね……

なんとなく姫も聞いているかなと思つてスマホを取り出してみると、案の定聞いていたようで、勝手にメッセージアプリが立ち上がつて姫とのトーク画面が開いた。

『ダンジョン内だからあんまりデカイの飛ばせないし、今使つてるのよりちよつと大きいので一台につき三キロぐらいかな』

今調査用に使っているドローンは二百グラムの物だからな、運送用に使うならやつぱりサイズアップは必要か。

「あー……運送用のドローンを飛ばせば一度に三キロぐらいは運べると思いますけど……」

「そんなぐらいあればいいなあ」

気無さんは襟にクリップした個人用エアコンの風向きを調整しながら、ウンウンと頷いた。

「そんじゃあ詳しい話はメールで送って頂いて……」

「おお、送る送る。……あ、そうそうお前ら知ってる？ 草加のダンジョンの奥の方で死人が出たって」

「え？ そうなんですか？ 草加って言ったたら埼玉の四番目でしたっけ」

「そうそう玉四たまよん、真夏なのに凍死してたってよ」

「え!? 凍死!？」

「あそこはスライム系が多いから、もしかしたらアイススライムにやられたのかもな」

スライム系の魔物は金にならないのに倒すのが大変で、しかも毒を使ってくるようなものもいて冒険者からはかなり嫌われていた。

地球では見られない生態のため熱心に研究する人が多数いたり、どうにかして飼育しようとしているチャレンジャーもいたが、研究も飼育も未だ上手くいっていない。

煮ても焼いても食えない魔物、それがスライムだった。

「お前らも玉四行くときはよ、用心してカイロぐらい持つてった方がいいぜ」

「いや、僕ら東京専門なんで」

ニタニタと笑う気無さんにそうは言いつつも、俺達はその晩すぐに玉四へと調査ドローンを送る事を決めた。

不審な死体があるという事は、ダンジョン内に異変があるのかもしれない。

そして異変がある所には、ヤバい魔物がいるかもしれないのだ。

宇宙船と交換するためにヤバい魔物を探している俺達に、それをスルーするという選択肢はなかったのだった。

そんな自衛隊関係もダンジョン関係も色々動きがあった迷暦二十二年の夏、もちろん川島総合通商の方にも動きがあった。

ただそれは動きというか何というか……

とにかく、俺が全く予想していなかった方向からの一撃なのだった。

「ねえ社長、副社長ってどういう人？」

街中に陽炎が立ち上る、ひときわ暑い日の事だ。

ロボットの組み立てのため、川島総合通商の荷物発送場でもある元工場にやって来た俺に、阿武隈部長がそう尋ねた。

「え、何ですか？」

「なんか最近、イソスタで見たんですけどって人から化粧品についての問い合わせがいっぱい来てて……これってほんとにうちの副社長でいいの？」



彼女がそう言いながら見せてくれたスマホの画面には『姫』という名前のアカウントが表示されていた。

イソスタというのは写真を主体としたSNSで、キラキラした男女がキラキラ写真を投稿するところだ。

。。。
   
 そういや姫、うちの妹から薦められたとか言っ始めて料理の写真とか撮ってたな

「プロフィールに川島総合通商副社長って書いてあるし、めちゃくちゃ商品の宣伝してくれてるから本当にそうなのかなーって」

「ほ、本人です……」

阿武隈さんが何件か投稿を見せてくれたが、なるほど姫は会社の宣伝としてイソスタを使ってくれていて、うちが出してる調味料で作った料理の写真やスキンケア用品、便利グッズの使い方なんかを主体に投稿しているようだ。

だが問題は、その写真が全部が全部めちゃくちゃ映えすぎてるって事だろう。

ふりかけをかけただけの卵かけご飯も、姫の白く細い指に塗り込まれた化粧水も、姫が時々作る銀河のヘンテコ料理も、とてもうちの1LDKで撮ったとは思えないくら

い、完璧に映える写真となっていた。

完全にオーバークオリティだ、スタジオで撮ったってこうはいかないだろう。

「凄いよねー、副社長ってプロの写真家かなにか？ 顔出しもしてないのにもうフォロワー五万人超えてるよ」

「プロってどうか……まあ専門家かな……」

姫の写真に本当に感心しているらしい阿武隈さんに、マーズは言葉を濁してそう答えた。

まあ、元超銀河級のインフルエンサーとは言えないもんな……

「とにかく、副社長のイソスタからうちを知ったつばい人からどんどん発注が来てるから、それを共有してきたかったの」

「あ、こりゃご迷惑を……」

「ご迷惑って何言ってるの？ 商品が売れてんだから万々歳じゃん」

あ、そっか……普通はそうか。

川島家にとってこの会社は宇宙っていう目標までの布石でしかなくても、川島総合通商からすれば商品を売りまくって金を儲ける事こそが本義だもんな。

「いやいや、もちろん、イソスタの運用を共有してなかった事についてですよ……」

「あー、それはねー。ご多忙かもしれないけどさあ、副社長にも今後こーゆー事あるなら社内チャットで共有願いますって言つといてね」

「了解です」

俺はそう答えてから、以前よりもいくぶん限の薄くなつた阿武隈さんの顔を見た。

この会社に関わってるのはうちの三人だけじゃないんだもんな、俺ももつとしつかりしなきゃな。

どうせならこの会社も姫に作ってもらつた物売るばかりじゃなくて、いつかは自社力で商品を用意できるようにしたい。

そんなある意味泥縄な決意に拳を握る俺をよそに、阿武隈部長はちよこんとしゃがんで専務のマーズに話しかけていた。

「専務専務」

「え？ 何？」

「なんか専務と同郷のケット・シーの人達にバイトしたいって言われてるんだけどどうする？ 今のところ日本に国籍がない人は一律お断りしてるんだけど」

「えー、うちでバイト？ なんてだろ、ポイント目当てなら魔石持つてくるよね？」

「多分だけどさー、ケット・シーが役職についてる会社つてのが珍しかったんじゃないかな」

そう言われればそうかもしれない。

異世界の人つてそもそも絶対数が少ないから、サラリーマンになる人はいても、役職についてる人つてなかなかいないよな。

たしかに同じ国の出身……に見える人が出世した会社つてのは気になるかな。

「そういう会社ならチャンスがあるつて思ったのかな？ まあ多分同郷じゃないし、普段どおりの採用でいいよ。条件合つて面接でオッケーなら採用で」

「ん、わかった」

まあ、うちはわざわざ帰化手続きしてまで働きに来たいと思うような会社じゃないだ

ろうし、それならうちの会社にケット・シーの社員が入る事はないかもな。

なーんて事を考えていた俺だったが……

この数日後にバツチリ日本に帰化したケット・シーと、ポイント交換でだけ手に入る化粧品の噂を聞きつけたイソスタ女子がアルバイトに応募してきてひっくり返る事になるのだった。

## 第32話 手巻きと猫とサードアイ

涼しい秋風が東京を優しく撫でる中、俺は至上の幸福を味わっていた。

「やっぱクソかつこいいって！ マジで！」

「まあ好きな人は好きなんだろうね」

クリスマスの子供かってぐらいに盛り上がる俺に対して、猫型宇宙人のマーズはあんまり興味なさそうに頷いた。

「いやいや！ 男なら誰でも好きでしょ！ 戦闘ロボだよ戦闘ロボ！ カッコよすぎるでしょー！」

「これの十倍ぐらいのサイズを見慣れてるとなあ……」

「それはそれで見てみたいけど、ないものねだりしてもしょうがないじゃん。とりあえず！ 俺にとっては！ 今あるこのロボットが！ 一番最高なんだよ！」

俺は膝立ちをした全高八メートルの巨大ロボットの前で、拳を握ってそう言った。

そう、川島総合通商の配送センター横の元工場部分でコツコツ組み立てていた戦闘ロボットの、ついに完成したのだ！

全体を白く塗装された角張ったクールなボディには、俺が小遣いで買ってきた缶スプレーで入れた金のラインのワンポイントが光り、かっこいい。

トラディショナルなヘルメット型の頭部には凸型のバイザーがはめられていて、深緑色のバイザーの奥には薄っすらと三つのカメラが見えてかっこいい。

額部分には渋るマーズに頼み込んで特別に付けてもらった一本角フレードアンテナがそそり立ち、機能性はともかくかっこいい。

三メートルぐらいあるビームライフルも、俺の太ももぐらい太いビームソードの発生装置も、超厚手でめちゃくちゃかっこいい。

かっこいい……いや、かっこ良すぎる！

これが俺の専用機か！

「……ッ……チョエ〜！」

「もう『かっこいい』とも言えてないじゃん……それでトンボ、名前は何にするの？」

「え!!? 名前? これって機体名とかないの?」

「機体名っていか型番はあるけど、それじゃ味気ないんじゃない？ こういうのって導入先でペットネームつけたりするもんだからさ」

「うーん……そういうもんか」

そうとわかっていれば、しっかりと名前を考えておいたんだけどな。

川島総合通商のロボだからカワシマン……は、ちよつと違うか……

凸型のバイザーがあるからジ○……いやいや、さすがに既存のロボットの名前はまじいよな。

金のラインが入ってるから、ゴルダイン……それにしても予算不足で金色の割合が少なすぎだしな……

額にも目があるし、三つ目……いや三つ目はダサイか……うーん……三つ目を英語で……

「そうだ、サードアイ！ このロボットの名前はサードアイにしよう！」

「サードアイね、いいんじゃない？」

うん、しつくりきた！



そうと決まれば肩に三つ目のパーソナルマークをステンシル塗装しないとな。

いや、まあでもそれは別の日にじっくりやるとして……

「それじゃあ名前も決まったところで、早速試運転を！」

「あーダメダメ、歩かせたりしたら天井突き破るよ。今高さギリギリなんだから」

「え?!? なんて?!? ここつて天井十メートルぐらいなかつたつけ？ 基本訓練はここでやるつて言つてなかつた？」

「そりゃアンテナがついたからでしょ。だからアンテナはいらないつて何回も言ったじゃん、あれがなきゃあ歩行訓練ぐらいならギリできたのにさ」

「そういえばマーズ言つてたな……「後で付ければ？」つて。」

そこをかつこよさ重視で「なんとか付けてくれ」とお願いしたのは俺だった……

俺は自分の浅はかさに打ちのめされ、工場の緑色の床に両膝をついた。

「くうくう……それでも……それでも俺のロボにアンテナは欲しかった……」

「まあ今はしまつといてさ、姫にどっかダンジョンの中の広いところ探してもらつて動かそうよ」

マーズにそう言われ、俺は床に正座で座ったまま、うなだれるように頷いた。

「あ……でもちよつと待って」

そう言いながらすすくと立ち上がった俺に、首を斜めに傾けたマーズは訝しげに「何？」と尋ねた。

「言つとくけど、アンテナはすぐには取れないよ。あれは飾りじゃなくて専用のハーネス引いてメインコンピューターに接続してあるんだから」

「違う違う、ちよつと何枚か写真取ってほしくて」

「まあ、それぐらいなら……」

ちよつとだけ頭を冷やした俺はサードアイの足に座った写真を撮ってもらい、全ての機材を収納した。

これからも何か大きい物を作るときにお世話になるであろうこの工場には、今はどこからか吹き込んできた砂と枯れ葉が残るだけ。

俺とマーズは箒でそれらを掃き清め、改めて工場を後にしたのだった。

朝夕がめつきり涼しくなり、こたつ布団が戻ってきたILDKのリビングで、俺達は手巻き寿司を巻いていた。

姫の用意してくれた具材はイクラや刺し身なんかの定番品から、メキシコのチップスやコーンマヨ、アボカドや人参のスティックなんかの変わり種まで、バラエティ豊かに揃っていた。

「秋はさあ、このサーモンっていうのが旬なんだってさ」

「たしかに脂が乗ってて美味しいね。この手巻き寿司？　って言うやつはちよつと難しいけど」

マーズは手と口の周りを手巻き寿司からはみ出た具材でベタベタにしながら、俺がきれいに巻いた末広巻きの手巻き寿司をじつと見た。

「あー、マーズこれ食べる？」

「食べる食べる」

俺からイクラとサーモンの親子手巻きを受け取った彼は、小さい猫の口を精一杯大きく開けてそれを頬張った。

しかしやはり末広巻きではマーズの口には大きいようで、端から具材がポロリしてしまっている。

うーん、もっと細く巻いた方が良さそうだな。

「この手巻き寿司っていうやつさあ、日本の伝統的な家庭料理なんだって。イソスタでバズっていると見たから今日はこれにしてみた」

「伝統的……まあたしかに言われてみりゃあそうだけど……」

「食べるにくいけどさ、結構いけるよこの料理」

マーズはそう言いながら、俺が作ってあげたまぐろと卵ときゅうりの細巻きを頬張った。

うんうん、細巻きなら普通に食べれそうだな。

次はツナマヨ巻きでも握ってあげようかなと海苔を取ったところで、姫の人差し指が

俺の右手の甲をズビシと突いた。

「え、何？」

「おいおいトンボ、姫ちゃんにも巻いて差し上げろよ」

姫はニヤけた顔でそう言いながら、俺の手を突いた人差し指でマーズの頬張っている寿司を指さした。

「あ、はい……」

もちろん、姫様のためならいくらでも。

俺が卵とサーモンとツナマヨの手巻き寿司を作って姫の皿へと献上すると、代わりに姫も俺の分を巻いてくれていたようで、あちらからも寿司が来た。

けっこうデカい姫の末広巻きの先からは、何やら緑色の物がチラチラと見えている。

「姫、これって何巻きなの？」

「それはね、えーっと、エビとアボカドと、ウインナーのジエノベーゼソース巻き」

「ボ、ボリユーム満点だね……」

まあ、別に食えない物じゃないだろう。

俺はずつしりと重いそれを口に入れながら、なんとなしに付けっぱなしのテレビを見る。

『埼玉第四ダンジョンでは本日も四名の行方不明者が出ており、今朝より大宮駐屯地の探索部隊による調査が……』

テレビの画面の中では、草加にある埼玉第四ダンジョンの入口が自衛隊の部隊でごつた返している所が映されていた。

「あー、やっぱ玉四大事おわじとになつてんだ」

「うちで調べた時は何にもなかったのになあ」

「きな無の兄さんが言つてた通りアイススライムが原因なら、ドローンが来た時は岩の間とかに隠れてたんじゃない？」

玉四で凍死者が出たという情報を掴んでからすぐ、俺達は大量のドローンを送り込んで玉四の中をくまなく探索していた。

だがその時はそれらしき大型モンスターも発見できず、ただ玉四の地図が埋まっただけ。

— その後も玉四の死亡者と行方不明者は増え続け、今回ついに自衛隊の部隊の出勤に至ったらしい。

こりやあ玉四も閉鎖になって、冒険者がいくらか東京に流れてくるかもしれないな。この時の俺は、なんとも不思議な味の寿司を食べながら、呑気にそんな事を考えていた。

そして玉四から文字通りの火柱が天高く吹き上がったのは、この一週間後の行楽シーズン真っ盛りの日曜日の事だった。

### 第33話 カラオケと姫と音声認識

『本日未明に爆発事故のあった埼玉第四ダンジョンから突如巨大な双頭の蛇が現れ、周りの建物をなぎ倒し、口から火や氷を放ち始めました！ 現場では自衛隊がダンジョンの周りを取り囲み……ああっ！ 今自衛隊の車両が爆発！ 爆発しました！』

街を涼風が吹き抜ける、行楽日和の秋の休日の午後。

夏の残りのそうめんを食べながらつけたテレビの中では、大変な事が起こっていた。

『蛇の吐き出す炎の熱波がここまで届いております！ とてつもない熱量です！』

画面の中では玉四の入り口を吹き飛ばして現れた蛇の化け物が、両方の口から炎や氷の塊を四方八方に向けて吹きまくっている。

炎に巻かれた自衛隊員が凍った地面をゴロゴロ転がって、服に燃え移った火を必死に消そうとしているのが見えた。



『シホちゃん！ やばいやばい！ 避難避難避難！』

『それでは我々も一旦避難させて頂きます！ 皆様も決して外には出ず……あーっ！ 発砲です！ 今自衛隊が発砲を始めました！』

機関銃を撃ちまくる音と戦車の主砲の発砲音が数秒続いたかと思うと、その直後に一瞬画面が真っ白になるぐらいの大閃光が蛇の口から放たれた。

大閃光は一瞬でダンジョンの周りを火の海へと沈め、何かが発射する音が連続して聞こえてくる。

『戦闘が始まりました！ 戦闘です！ 街が燃えております！ 街が燃えております！ 一体あの蛇はどういう魔物なのでしょう！ どうぞ皆様……あーっ!! 御覧ください！ さい！ 自衛隊の戦闘ヘリが火を吹いて落ちていきます!!』

『いいから逃げなきゃ！ ここいたら死んじやうつてえ!』

カメラが揺れて天を向き、何かがガチャガチャ鳴る音と共に画面はスタジオオへと戻り、昼の帯番組のコメンテーター達はすぐさま政府の不手際を批判し始めた。

俺は画面を指さしながら、一緒にテレビを見ていた姫とマーズの方へ顔を向けた。

「やばくない!!? あれってうちの実家のすぐ近くじゃん」

「あれって異世界の蛇かな?」

「玉四の中に置いてたドローンは全滅してたから調べられてないけど、多分そうじゃね?」

落ち着き払った二人とは違い、俺はもう、気が気じゃあなかった。

なんせあの蛇が焼いている場所は、俺の地元からちよこつと離れただけの場所だったからだ。

あれが都市破壊級の魔物だったならば、うちの地元ごと焼き払われる可能性は十分にある。

なりふり構っていられる場合ではなかった。

「それどころじゃないって! 職権濫用で悪いけど地元の危機なんだ! 二人がどう言おうと俺はサードアイで行くからね!」

「まあ落ち着きなよ」

今すぐにも部屋から出ようとする俺にマーズはそう言って、手の先からニュツと出た爪でこたつ機の天板をチャツチャツと叩いた。

「誰にとつても故郷つてのは一つきりなんだ。俺も川島家の皆には世話になってるし、うちのロボットならあの蛇には負けない。別に駄目だなんて言わないよ」

「じゃあ、すぐに行こう！」

「あのさあ、行ってくたつてどっから出発するつもり？」

未だこたつに入ったままの姫は、立ち上がったままの俺のズボンの裾を掴んでそう聞いた。

「…………え？ そりゃ、前の道路から……」

彼女はそんな俺の答えを聞いて頬を膨らませ、口の端からふうーつと息を吐いた。

「あのさあ、このアパートつて常に見張られてんだからさ。家の前で道路塞いでロボツ

トなんか出したらソツコー取り押さえられるっつーの」

「え!? そうなの?」

「そりゃ俺たち色々疑われてんだから、見張りぐらいついてるよ。日本人は礼儀正しいから令状無しでは屋内には踏み込んでこないけど、さすがに武装付きのロボットなんか出したらそのまま御用だと思う」

渋い表情でそう言ったマーズの横から、ちよつと怒った表情の姫が俺の顔を指さしながら続ける。

「言つとくけどさ、バレたらトンボ一人が捕まるだけじゃないんだよ? あたしらも捕まるし、阿武隈<sup>マ</sup>さんとか、それこそ実家のお母さんとかにも迷惑かかるんだよ?」

「じゃ、じゃあどうしたら……」

勢いよく立ち上がったまま結局どこへも行けない俺は、姫にズボンを引つ張られてまたコタツの中へと収まった。

「あのロボットにはステルス機能も飛行能力もあるからさ、出発場所さえ確保できれば

バレずに行つて帰つてくる事もできると思う」

「怪しまれはするだろうけど……ま、それはいつも通りだしね」

「じゃあ、一旦工場かいしやに移動してから……」

「あの工場の中で出しても、多分搬出口のサイズの外に出せないよ」

そういえばそうだ、工場の搬出口は二メートルぐらいしかない……

肩幅三メートルぐらいあるロボットは床を這つても出せないだろう。

どうしよう……と両手で抱えた俺の頭を、ちよつとひんやりした姫の手がポンポンと叩いた。

「大丈夫大丈夫、場所さえ選べば行つて帰つてくるだけなら近場でもなんとかなるって。

でもどうせなら、ついでにアリバイも確保できるところにしよう」

「え？ それ……どうやって……？」

俺が尋ねると、彼女はにっこりと笑つて「カラオケ行こ」と答えた。

三十分後、俺とマーズは駅前のアミューズメントビルの屋上に不法侵入していた。

「これ、ほんとによそからは見えてないのかな？」

「大丈夫大丈夫、見えてないって。ちゃんとアンカー打って光学迷彩フィールド張ってるんだから、外からは誰もいない屋上に見えてるはずだよ」

俺とマーズは姫が用意した光学迷彩用の3Dホログラフ発生装置のアンカーを屋上の四隅に設置し、その結界の中で堂々とサードアイの最終調整を行っていた。

ビルの屋上に立つ三つ目の巨人の開放されたコックピットの中は、姫が走らせているシステムの診断プログラムでピカピカと光っている。

姫の本体はビルの中のカラオケ店でヒトカラ中だが、監視カメラの映像では俺たちも一緒にカラオケをやっている事になっているらしい。

こっそり発進もできて、アライも作れる、なるほどいい場所だ。

『トンボ、まーちゃん、オツケーだよ』

コックピットから姫の声でOKが出たので、膝立ちの機体の前面装甲に設けられたく

ぼみ型のステップを使って操縦席へと登っていく。

「五メートルぐらいの高さでもさ、登る時はおっかないんだよな」

「もうちよつと新しいのなら操縦席の前面装甲がリフトになってんだけどねえ」

肩にしがみついたマーズの毛皮がふわふわと首元に当たる。

しかし俺、銀河警察の生体維持装置はつけてるけど、普段着で戦闘ロボに乗っていいんだろうか……？

なんとなく不安なままコックピットに入ると、自動で前面装甲が閉まった。

クッション素材の内装に囲まれた操縦席に座ると、背中から尻がガチツと椅子に吸い付いたように固定され、俺の顔の前にタブレットサイズの薄緑色のホログラフが表示された。

『OSは弄って日本語にしてあるけど、最初の起動だけはボイスコントロールだから』

「何て言えば？」

『エンザーキー！』

「どういう意味？」

「銀河連邦万歳って事」

宇宙の事はよくわからないけど、言えば動くならそうしよう。

「エンザークー！」

『認証完了。起動シークエンス開始。母艦との接続が確認できません』

「はいはいパスパス」

『スタンドアロンモードで起動します』

俺の顔の前のホログラフをマーズが肉球で操作していくと、コックピット内のクツシオン素材が魔法のように消え失せて外の景色が映った。

視界の真ん中には、でっかく『STAND ALONE』という薄緑色の文字が表示され、数秒でフツと消えた。

『複合迷彩起動してるよ。だいたいステルスの事は大丈夫だけど、飛行機と正面衝突したりしたらさすがにバレちゃうから気つけてね』

「じゃ、行こうかトンボ」



「よし、よし、よし！……で、どうやって動かすの？ 今更だけど、よく考えたら俺って訓練とかしてないけど大丈夫かな？」

「できたら訓練もしたかったんだけどね……まあ、視線コントロールと思考コントロールのハイブリッドだから、ずぶの素人でもでつかい蛇の駆除作業ぐらいなら大丈夫だと思う。肘掛けの前にある握り棒握って、させたい動作を頭で念じて」

「よし……よし！ 飛べっ！」

その瞬間、ぐわつと屋上の地面が遠くなつたかと思うと、視界がグルグルと回り始めた。

「おわーっ！ どうなってるんだ！」

「膝立ちのまま飛び立ったりするから……静止するように念じて」

「生まれ生まれ生まれ！」

口に出しながらそう念じると、視界はビタッと静止した。

さっきまでいたビルの屋上と一緒に、沢山の人が行き交う駅前がくつきりと見える。

ゴクンと、自分が唾を飲む音が大きく聞こえた。

俺とサードアイは、まるで神様のように無音のまま東京の空に静止していた。

## 第34話 無謀と猫と怪獣退治

「そんで、どつちに向かったらいいの？」

『ナビゲート出すからそつちに向かつて』

姫がそう言うのと、全周囲ディスプレイの俺の目の前に3Dの矢印が浮かび上がった。

なるほど、これを辿ればいいのか。

ゲームみたいでわかりやすいな。

「はい出して、ゆっくりね、ビルにぶつからないように」

「教習所みたいだな」

俺が頭で行きたい方向を念じると、サードアイはチキチキと高く小さい音を立てながらゆっくりと移動を始めた。

『もつと早く』と意識をするだけで速度はスルスルと上がり、遠くにあるビルがぐんぐん近づいてきて凄いいスピードで後ろに吹っ飛んでいく。

だというのに、俺の体には何の負担もかかっていない。まるで部屋のテレビでドローンの映像か何かを見ているような感覚だった。

「これってさ、Gとか感じないんだけどほんとに飛んでるの？」

俺がそう聞くと、膝の上のマーズは不思議そうな顔で俺を見て、手の先から爪を出してちよいちよいと進行方向を指さした。

「重力制御で飛んでんだからさあ、コックピット内にGが生じてたら問題だよ。ま、ハッチでも開けてみればコックピット内の制御が切れてさ、Gも感じられるようになると思うんだけど……」

『絶対開けちゃ駄目だからね！ ステルス切れちゃうんだから！』  
「あ、うん……」

三人で話している間にも、サードアイは街の上空を音もなくかつ飛んでいく。温かい陽の光が差す東京の街をぼんやりと眺めていると、遙か遠くに真つ黒な煙が立ち昇っている場所が見えた。

「あの煙のどこ？」

『蛇は草加から東に移動中。自衛隊は市街地に向けてミサイルを撃つかどうかで揉めるみたい』

「そんなとこ突っ込んで大丈夫かな？」

「直撃は避けたいね、飛んでくる前に済ませよう」

「よし……よし！」

俺はパン！ と音を立てて両手で挟むように自分の頬を叩き、そのまま両手の人差し指をピンと立て、その先を左右のこめかみに押し当てた。

「それ何？」

「集中してるの！」

『トンボ、首の根元にちゃんと当てればレーザーキャノン一発で終わると思うから、落ちて着いてやって』

「この銃の事は……ビームライフルと呼んでくれ！」

俺はサードアイが右手に構えたライフルをぐつと引き付け、いつの間にか肉眼でも見えそうな位置に迫っていた巨大な双頭の蛇を睨みつけた。

双頭の蛇は幹線道路をゆつくりと移動しているようだが、どこにも尻尾が見えない。

「なんかあの蛇、体長くない？」

『長いよ、まだ草加ダンジョンから体が出切つてないんだから』

「え!? 何で!？」

『わかんない』

「この蛇といい、あのドラゴンといい、この星の生き物つて変なのばかりだね」

「いや、あれもこれもうちの星の生き物じゃないでしょ……」

まあ、どれだけ長い蛇だろうと、頭を潰してしまえばさすがに大丈夫だろう。

俺は集中のポーズのまま、もう一度二つある蛇の頭を見た。

「上から撃つと人が避難してるかもしれない地下街に貫通するかもしれないから、下に潜り込んで空に向けて首を撃つんだよね？」

「それでOK! 炎も冷気もまるで問題ないから気にせず近寄つて」

「よし……いぐぞっ!!」

口の端から泡を飛ばしながら、気合を込めてそう叫び、俺はサードアイを双頭の蛇に向けて発進させた。

一呼吸前まで点景に見えていた街が一気に大きくなったかと思うと、一瞬で道路が視界いっぱいになり、サードアイは足から火花を散らしながらアスファルトの上を滑走していた。

ガアアアアアアアアアアッ! と無人の街中に響き渡る爆音と火花を上げ、サードアイは足の裏で幹線道路のアスファルトを削りながら双頭の蛇の首元へと接近していく。

「トンボ! 浮かせて浮かせて!」

「浮け! 浮け! 浮けーっ!」

押し当てた指でこめかみを突き刺しながら念じると、サードアイは地面から少しだけ浮き上がり……

そのままの勢いで、道路の真ん中へ乗り捨てられていたワゴン車に激突した。

バツゴン! とでっかい音が鳴り、ワゴン車は横回転しながら二メートルほど跳ね上

がって吹っ飛んでいった。

「うわっ！ やっちゃった！」

『大丈夫、人は乗ってないよ』

「あんなところに置いとくのが悪いんだよ」

「後で保険会社から連絡来たりしないかなあ……って、来た来た来たっ！」

俺が頭を抱えている間にもサードアイは地面スレスレを飛び続け、俺達はあつという間に双頭の蛇に接敵していた。

八メートルの高さのサードアイに乗り込んでなお見上げる高さの蛇は、鎌首をもたげたままこちらへと向かって進んできていた。

「これ、マジであつちからは見えてないんだよね？」

「そうだよ」

「なんかさ、蛇には赤外線を見るピット器官つてのがあるんじゃないかなかった？」

『だから、その機体のステルスは目視でも赤外線でも超音波でも捕捉できないつつつてんじゃない。大丈夫大丈夫』



「でもなんかこっち見てる気がするけど……?」

気のせいだって、と笑う姫の言葉を信じたいが、俺にはどうしても蛇の二つの頭がじつとこちらを見ているようにしか思えなかった。

シウルシウルと舌を出し入れしながら、双頭の蛇は明らかにサードアイをめぐがけて近づいてくる。

「これマジで大丈夫!? 見つかってない!?!」

『おかしいなあ、ステルスはちゃんと動いてんだけど』

「トンボ、角度的にもう撃って大丈夫だよ」

ビームライフルを構えるために心を落ち着け、蛇の事をよく見ていると……

片側の蛇の喉元が、カエルのようにぷっくりと膨らんでいるのがなんとなく気になった。

そして次の瞬間、その口がパツと開く。

「あつ……」

眼の前が一瞬真っ白に染まり、画面の中央がゆらゆらと揺れたように見えた。

それが近づいてきた蛇の口から放たれた紅蓮の炎だと気づいたのは、サードアイの周りの物が一瞬で燃え上がったのが見えた時だった。

「のわーっ!! 火吹かれてる!」

『ええっ!? 何でだよーっ!? ステルスは動いてるのに!』

「大丈夫だから! 大丈夫! 大丈夫!」

「撃っていいの!? これ撃っていいの!?」

「撃っていいけど落ち着いて!」

どうしようもなくうろたえる俺の顔を、膝に座ったマーズの手がぴしゃんと叩いた。

「このぐらいの温度じゃ塗装も溶けないから、落ち着いて狙って」

「落ち着いて……落ち着いて……」

俺は息を整えながらビームライフルを構え、蛇の体が二股の首に分かれる前の根本の

部分にゆっくりと狙いをつけた。

そのまま深く息を吸って止め、頭の中でことりと引き金を引いた。

瞬間、グワツシャアン!! と爆音が響き、画面全体が土煙で覆われて何も見えなくなつた。

「当たつた!?!」

『……当たつてない! 寸前で蛇が避けて左のビルに突っ込んだ!』

「左い!?!」

姫の言葉に視線を巡らせると、サードアイの左側からは土煙を割るようにして巨大な蛇の頭が突っ込んできていた。

「おわあああああああつ!!」

ガゴツ!! と鈍く響いた音と共にサードアイは吹っ飛ばされ、視界がグルグルと回る。

そのまま耳をつんざくような破壊音が響き、飲食店のキッチンらしき場所や蛍光灯の

沢山並んだ天井などが一瞬見えた気がした。

「……あれ？ 止まった？ どうなった？」

「思いつきり吹っ飛ばされちゃったなあ……」

どこかのビルに突っ込んでしまったのだろうか、サードアイの動きが完全に止まった時には、視界が瓦礫で一杯になっていた。

今俺達が大穴を開けて破壊してきた先からはごうごうと響く風が吹き込んできており、風を受けた周りの瓦礫に霜が降りていくのが見える。

「霜……？ これ、テレビで言ってた氷のブレスってやつ!？」

「落ち着いて、大丈夫。宇宙で使うロボット冷やしたって何のダメージにもなんないよ」

マーズがのんきな感じでそう言うが、絶対見えないステルスを見破り、虎の子のビームライフルも避けた相手なのだ。

俺はなんだかあんまり安心できる気がしなかった。

「それよりさっき、あいつビームライフル避けたって言った？」

『あー……仮説だけだよ。あの蛇、もしかしたら荷電粒子そのものを感知できてるのかも知らない』

「ああ、たしかにそれならステルスを見破できてもおかしくないね」

「荷電粒子って何？」

「トンボがビームって言ってる奴の中身かな。ステルス系の根幹技術にも使われてるんだけど」

「え？　じゃあビーム効かないって事？」

「サードアイ、ビーム兵器しかついてないんですけど。」

『まあでも、もしかしたらさっきのはまぐれかもしれないから、もう一回撃ってみて！』

モニターしてる限りでは機体は全然大丈夫、ステルスもあっちの体当たりぐらいじゃ解けてないよ』

「あ……うん……」

俺はなんとなく不安な気持ちのまま、カラカラの喉を潤すためにごくりとツバを飲ん

だ。

「トンボさあ。どつちにしろ、やらないはないんでしょ？　荷電粒子兵装が駄目なら、殴つてもやつつけなきやいけないんじゃないの？」

「……当たり前じゃん！」

マーズの言う通りだ。

俺は誰のためでもなく自分のために、自分の手で自分の地元を守るために来たんだ。やらないはない。

なら、ビームライフルを見てから避けるような化け物相手でも、やるしかないのだ。

「行くぞー！」

俺の言葉と共に、サードアイは前傾姿勢で飛び出した。

破壊しながら来た道をもう一度かき混ぜながらかつ飛んで、三つ目のロボットは元いた幹線道路へと土煙と共に躍り出た。

さつきまで俺達がいいた場所へと冷気のブレスを吐いている蛇の首に向けて、腰だめの

ままライフルの引き金を引く。

奇襲をかけたにも関わらず蛇は凄まじい素早さで巨体をくねらせ、軽々とビームをかわした。

『やっぱり避けた!?!』

「なんでこの星つて変な生き物ばかりいるんだよ!」

「うちの星のせいじゃないって!」

また蛇に体当たりされないように、牽制の意味も込めてライフルを撃ちまくる。

撃ちまくると言ってもほとんど撃っている感覚はない、音もなければピンクの光線も出ないからだ。

「これほんとにビーム出てるの!?!」

『出てるよ! 当たってないだけ!』

「あんま適当に引き金引いてると変なとこ当たるよ!」

「いくしかないのか……うおおおおおおお!!」

俺は気合の声と共に飛び蹴りの姿勢で蛇の頭へと突っ込み……そのまま大きく開けられた口でバクンと足に噛みつかれた。

視界全体におっかない蛇の顔がドアップになり、振り回されて地面へと叩きつけられる。

「のわあああああつ！」

『トンボ今！ 今！ 今撃つて！』

「う、撃つ？ 撃つぞつ！」

無我夢中で引き金を引いた瞬間、ドツパン！ と破裂音がした。

視界が真っ赤に染まる中で、一瞬俺はその音の正体為何なのかわからなかった。

大量の血を撒き散らしながらのたうち回る蛇に振り回されながら、サードアイの足を啜えた口だけが残った、蛇の頭の残骸を見てようやくわかった。

あの音は、蛇の頭がビームに吹き飛ばされた音だったのだ。

「トンボ！ まだ頭は片側残ってるよ！」

「わかってるよ！」



俺は双頭の蛇のもう片側の頭に止めを刺そうとしたが、暴れまわる蛇になかなか空に抜ける照準を合わせる事ができずにいた。

「やばい、どつかに引きずられてる」

『草加ダンジョンに戻ろうとしてるみたい!』

「まずレーザーブレードで足を外して!」

「オツケー!」

しかし、俺が腰にあるビームソードの発生装置を取って足を啜えた口を切りつけたその瞬間、振り回されていたサードアイは幹線道路沿いにあつたデパートのビルに力いっぱい叩きつけられ……そのまま地面ごと下に落ちた。

視界の端に、蛍光灯に照らされた無人の飲食店街が映る。

どうやらサードアイはデパートの床をぶち抜き、地下街へと落ちてしまったようだった。

「やばい! 地下街に抜けちゃった!」

「でも足も抜けたよ」

「よし！ 後はもう片方の頭を……」

そう言いながら、ビームソードの発生装置を腰に仕舞った瞬間、ウサギのような耳のついたピンク色の帽子が視界に入った気がした。

ソードアイの体を持ち上げ、俺は恐る恐るもう一度同じ場所を見た。  
見間違いじゃなかった。

小さい小さい子供が、通路の真ん中にうずくまっていた。

「マーズ！ あれ！」

「えっ!? 子供!? 避難し遅れ!」

「やばいって！ なんかないの!?! バリア的なの!」

『そんな都合のいいものないよ！ 巻き込まないように早く離れて!』

すぐに外に飛び出て引き離せばこの子は助かるか……?」

そう考えた瞬間、デパートの外からこちらを眺めている蛇が首元を膨らませるのが、視界の端にはつきりと見えた。

「やばい！ 火が来る！ ……コックピットの中に！」

「トンボ！ 開けたらやばい！ バレたら大学も通えなくなるよ！」

一瞬、頭の中を親の顔がよぎった、自分の会社に入ってくれた人達の顔も、冒険者の人達の顔も……

そして子供の頃の、自分の後ろをずっとついて回っていた、泣き虫の、小さな妹の顔もだ。

「大学う……辞めた！」

その時の俺は無我夢中で、自分自身が何をしているのかもわかっていなかった。

人への迷惑だとか、今後の人生だとか、全部纏めて吹き飛んでいた。

ただ、蛇の吹き出した炎がデパート中を焼き尽くしていく中……

俺の膝の上には、これまで見た事のないような顔で天を仰ぐ猫と、泣きじゃくる子供がいたのだった。

『ハッチ開けたからステルス切れたー!』

「かけなおして! かけなおして! ト……」

『ダメーっ!! 社……いや、首領! ステルス再構築に二分かかる! その間に外出て蛇やつつけて安全なところで子供下ろして!』

「なんで二分なのさ!?!」

『最初起動するときもそんなぐらいかかったでしょ!』

俺はとにかく頭が混乱していて、とても二人に何も言う事ができなかった。

でも、あの蛇を倒さないと膝の上の子を下ろせないのはわかる。

燃え盛るデパートから飛び出したソードアイは、蛇の周りを滑るように移動しながら空に抜けるようにビームライフルを撃った。

頭を片方失った蛇はさつきまでのようには避けきれなかったようで、一部を吹き飛ばされた首から血を撒き散らしながら引いていく。

俺はホバー移動するように地面スレスレを飛びながら腰のビームソード発生装置を引き抜き、逃げ腰の蛇に斬撃を放つ。

身をくねらせる蛇の首を切り落とす事はできなかったが、浅く切ることはできたように蛇はボタバタと血を流しながらもどこからか引つ張られているようにバックで引き

続け……

何度目かの斬撃で、ついに首を切り落とされて絶命した。

「よし、一安心だね。ステルスは？」

『あと二十秒！ 監視カメラ類の死角にナビするから従って！』

俺は全周囲ディスプレイの真ん中に出てきた矢印に従ってソードアイを動かし、雑居ビルの前の道路で膝立ちにした。

『首領は外に出ちゃ駄目だよ、入れた時みたいにロボットのマニピュレーターで出して』  
「……………」

俺は涙と鼻水で俺の服をべちゃべちゃにしながら泣き続ける子供を引き剥がしてソードアイの手のひらに乗せ、どうにか外に出した。

『ステルス再起動！』

姫のその言葉に、ふうーつと深く息を吐いて、俺は一言「ごめん」とだけ言った。

「トンボさあ……」

『……ボーイズ！ まだ終わってないよ！ 蛇の体がどんどん草加ダンジョンに吸い込

まれていってる！』

「えっ!? まだ死んでないの!?!」

俺が蛇の方を向くとそこに胴はなく、血の海の中に切り離された首の残骸だけが残さ  
れていた。

## 第35話 姫と猫と宇宙海賊

『どうする？ トンボ』

「追いかける！」

「あれ追っかけて戦闘ロボでダンジョンの中に入ったこと？」

「東三のドラゴンみたいに再生してまた出てこられたら困るでしょ！」

「まあ、たしかにそうかも」

俺はサードアイの高度を上げ、埼玉第四ダンジョンへと進路を向けた。

どういふ早さで引いていったのか蛇の体は上空からでもすで見えず、めちやくちやに破壊された幹線道路にはべつたりと血の跡が残っていた。

「そーいや姫さあ、さつきトンボの事を首領とか言つてたけど……」

『しょうがないじゃん。あの子に話を聞かれてるかもしれないでしょ？ できるだけ情報は渡しただけなかつたの』

「泣きじゃくつてたから大丈夫だとは思うけど、たしかに子供って意外と周りの大人の

話を聞いてるからなあ……」

首領か……なんだか悪の秘密結社の長のような呼ばれ方だけど……

俺が我を通した結果だ、この件に関して俺が文句を言う権利はない。

むしろ、とっさに気を回してくれた事に感謝しなければいけないだろう。

「姫、ありがとうね」

『やっちゃった事はもうしゃーないけど、後で説教！』

「うん」

俺はそう答えながらサードアイの高度を下げ、未だ消火活動の続く街へと飛び降り玉四へと突入した。

入り口を吹き飛ばされて大穴と化したダンジョンの中には、蛇が通ってきたトンネルのような道がしつかり残されていた。

これを追っていけば迷う事はなさそうだ。

ビームライフルをダンジョンの奥へと向け、サードアイは所々に崩落して積もった瓦礫を避けるようにスーパーマン飛びで蛇を追いかけた。



「全然いないね」

「結構飛んできたよね？」

暗視モードのまま真つ暗闇のダンジョンの中をひたすら飛び続けるが、蛇はおろか他の魔物も一切出てこない。

俺はなんだか不安になって膝の上のマーズを見る。

ちようど彼の方もこちらを見ていたようので、暗闇に浮かぶ瞳にぱちりと目が合った。

「トンボこれさ、このまま行ったら異世界に抜けちゃうんじゃない……？」

「まさか、流石にそれはないんじゃない……」

『……つて……くが……』

「あれ？ 姫……？ 姫!？」

「……もう遅かったみたいだね。多分これ、異世界に入っちゃってる」

暗視モードで青みがかっていた全周囲ディスプレイの色が徐々に変わっていく。

真つ暗だった洞窟の向こうに、ゆっくりと光が射してきていた。

「なんか来る!」

「えっ!?! 水……?」

風の音だけが聞こえていたダンジョンに、突然地鳴りと轟音が響く。

俺達の進む光の射している方向から、こちらに向けて大量の水が流れ込んできていた。

サードアイは宇宙用の戦闘ロボットだから水に浸かってもどうなるという事もないけど、生身の人間なら普通に流されて溺れ死ぬ水量だ。

「どういう事だろ?」

「とにかく光ってる方向に行ってみて」

推進力を上げて水流に逆らって進み始めると、全周囲モニターの一部にパツとお知らせが浮かんだ。

なにになに? 感電注意……?」

「え？ 電氣流されてるって事!？」

「水で濡らして電氣を流す、なるほど理に適ってるね」

「パワードスーツで来てたら完璧死んでたなあ……」

そんな事をマーズと話している間にもどんどん光は近くなり、ついにダンジョンの終わりが見えてきた。

「このまま出るよ!」

「気をつけてよ!」

サードアイは水しぶきを散らしながら巨大な横穴になっているダンジョンの入口から飛び出した。

まず目に入ったのは、口から水流を放つ巨大な蛇の頭、そしてその両脇で口を開けている同じサイズの蛇の頭だった。

双頭の蛇の胴体を追って来た先で待ち構えていたのは、三つ首の蛇だったのだ。

「三つ首!」

「これ、もしかしてあの二股蛇の尻尾側かな?」

サードアイが三つの頭の根本の首に向けてライフルを発射すると、三つ首の蛇は双頭の蛇と同じように身をくねらせてそれを躲した。

だがしかし、頭が一つ増えている影響だろうか……

完全回避とはいかなかったようで、ビームが掠った部分からは噴水のように血が吹き出していた。

「いけるいける! このままライフル撃ちまくって!」

「よっしやああああ!」

双頭の蛇と戦った時とは違い、ここは人家はおろか人工物すら見当たらない鬱蒼とした森の中だ。

ビームライフルはどの角度でも撃ち放題だった。

最初は元気にビームを避けていた蛇も、だんだん首を削られるうちに動きが鈍くなり

……

三つの首はろくに反撃もできないまま胴体から切り離され、吹き出した血でできた池の中では蛇の胴体だけがびたびたとのたうち回っていた。

「他の頭は!？」

「ない……と思う……他の生き物も今のところいない。あ、そうだトンボ! 回収!」  
「え?」

聞き返した俺の顔をマーズの手がびしゃんと叩いた。

「蛇の頭! 回収しとこう!」

「あ、そうか!」

この蛇との戦闘はイレギュラーだったけど、元々俺達の目標はこういう大物を手に入れたら宇宙船と交換する事だった。

「でもさすがにジャンクヤードのサイズ的に、あの頭丸ごとは入らないな……」

「三つに裂いちやえばどう?」

「そうしよつか」

俺はビームソードで頭を三つに裂いて縦の長さも調節し、サードアイの手の上に乗ってそれを回収した。

落ちないように恐る恐るコックピットへ戻り、ハッチがプシュッと閉まった瞬間、ふうーっと長い溜息が漏れた。

「この蛇の胴体、先まで追いかける？」

俺はマーズにそう尋ねる。

だがこの蛇の胴は無茶苦茶に長く、ダンジョンの前から森の奥深くへとずうつと続いていて、探索は難しそうだった。

「いや……やめとこ。元々異世界にまで追っかけてくるつもりはなかったんだからさ」

たしかにそうだ。

止めを刺す！ と息巻いてやってきたはいいが……

正直、異世界にまで突き抜けてしまうとは思っていなかったのだ。

このまま深追いするには、装備も……心も、あまりに準備不足だった。

「二股の頭を落とした時みたいに胴体がどこかに引きずられていく様子もないし、これで倒したという事にしておこう。姫も心配してるだろうしね」

「そうしょ！ そうしょ！」

俺はマーズの言葉にコクコクと頷き、飛び出てきたダンジョンへとソードアイを向けた。

「ただ、また同じようなのが来ないようにこの入口は塞いでおきたいね」

「ビームライフル撃ちまくって崩落させる？」

「天井撃つてこんなところで生き埋めになるのは御免だから、ライフルを暴走させて爆破しよう」

そう言うが早いのか、マーズはジェスチャーで呼び出したタブレットサイズのホログラフを操作し始めた。

「トリガーを引いたら一分後に爆発するように設定したから、ちよつと行つたとこに設置していこう」

「くう……大活躍してくれたこのビームライフルともここでお別れか……」

「ジャンクヤードに同じのがあるでしょ」

俺は入り口から百メートルほど奥でトリガーを引いたライフルを投棄し、そのまま未だ水の引いていないダンジョンの中を戻っていく。

『……ぼ……繋がった！ どうなったの!?!』

「あー！ 姫ー！」

姫との通信が繋がった瞬間、ズン！ と響いた音と振動に続いて重低音が鳴り続け、天井から岩がボロボロ落ちてくる。

投棄してきたビームライフルが爆発し、崩落が起きたようだ。

『何!?! 何が起きたの!?!』



「いやー、異世界まで行っちゃってさあ。入り口崩落させて帰ってきたんだよ」  
「蛇も倒したよ!」

行きと同じようにサードアイで暗闇の中をかつ飛びながら、交信の途絶えていた姫に状況を報告していく。

『それで、二人とも無事なわけ?』

「元氣元氣! ダンジョンの向こう側にも蛇がいてさ、そいつが三本頭で……」

『三本頭!? なんて一本増えてんの!?!』

「それは後で話すよ。これから戻るけど、玉四の入り口はどうなってる?」

『自衛隊が囲んでるけど、まだ中には踏み込んでないからそのまま出て大丈夫だよ』

「じゃあもつと速度上げてオツケーだね」

「了解」

俺はマーズの指示に従ってスピードを上げ、両手を上げてぐつと伸びをした。

背中がバキバキと鳴り、喉から「ううつ」と声が漏れる。

マーズも俺の膝の上でお尻を突き上げてぐつと伸びをしながら、口を大きく開けてあ

くびをした。

「疲れたね」

「ほんとだよ。トンボの膝つて座り心地悪くてさ、早く帰って寝たいね」

そんな勝手な事を言いながら猫のマーズは香箱座りになって、尻尾をゆらゆらと揺らした。

俺は疲れた頭でぼんやりと見つめていた彼の背中になんとなく手を伸ばしかけ……

その手をニヤツ！ と猫パンチで叩き落されたのだった。

翌日、俺は結局大学にいた。

辞めたつていいと思つた大学だったが「まだバレるとは限らないから」と姫に言われ、卒業に必要な必修の授業を受けに来たのだ。

今のところうちの家にも会社にも警察は踏み込んでおらず、自衛隊からも問い合わせは来ていない。

姫曰く、俺達が撤収した後カラオケ店には調査が入つたらしいのだが、三人でカラ

オケを歌っている監視カメラの捏造映像を見て引き下がったそうだ。

アリバイ様々だ。

俺は大学の中庭のベンチにだらんと座り込み、パツクのジュースを飲む。

俺はもう、ヘトヘトだった。

身体はそうでもないが、心の方が疲れていた。

俺が一人で背負うには、故郷も会社も重すぎる荷物だった。

社長でも、戦闘ロボのパイロットでもなく……

行き交う学生の中の一人、誰でもない一人になりたかったのだ。

「見た？ 昨日のアレ」

「ガン〇ムだろ？ マジでスゲエよな」

「あれやっぱ自衛隊じゃないよな？ 異世界の兵器かもってマジかな？」

「まとめサイトでは川島総合通商じゃね？ って言われてるけど、ネットで調べてもふりかけの画像しか出てこないんだよな」

「ブツ！」と、パツクのジュースを吹き出した。

周りを歩いていた学生たちが一瞬チラッとこちらを見て、すぐに視線を戻して歩き

去っていった。

「どういう事だよ！」

「なんでうちの会社が疑われてんだ!？」

俺はカフェオレ塗れになった服を拭うのもほどほどに、スマホでそれっぽいまとめサイトを検索した。

たしかに、それっぽい書き込みがいくつもある。

『パスワードスーツの川島じゃね?』

『川島総合通商ならリアルガ○ダム持ってもおかしくないかも』

『川島は異世界の紐付きだから』

……ひとまずホツとした。

好き勝手書かれているようだが、核心に迫るような書き込みはないようだ。

うちのパスワードスーツの動画なんかも貼られているみたいだが、同時に「こんなのがン○ムと一緒にするな」という否定意見も出ている。

一気に気が楽になった俺は、駅前でケーキを買って家へと帰った。

昨日、危険な事に突き合わせてしまった二人への、せめてものお詫びの印だった。

その夜、夕食を食べ終えた川島家の食卓で、俺達はスマホをじつと見つめていた。

「じゃあ、かけるよ?」

「トンボ、練習した通り、余計な事言わないようにね」

「わからなくなったらこっち見てよ、指示出すから」

そう言いながら、姫は小さな顔の隣に掲げた宇宙製のタブレット端末を指でトントンと叩いた。

俺はそれに頷きを返し、スマホの画面に表示された『ゴールデンヘッドドラゴン金頭龍商会 ティタ』という連絡先のコールボタンを押した。

『これは川島様、川島翔坊様、トンボ貴方様からのご連絡を一日千秋の思いでお待ちしております』

「あの一……」

『皆までおっしゃらなくともわかっておりますとも。蛇の頭と、宇宙船との交換のお話

でございましょう』

「あ、そうです」

『我々の技術部門からも、早く解析させてくれ、早く解析させてくれと矢のような催促が届いております。どうですか？ あの蛇の頭三本と、大気圏突破機能を持つ宇宙船との交換という事でいかがでしょうか？』

「あ……」

「待った、その宇宙船はすぐにぶっ壊れるボロ船じゃないだろうね」

『おやこれは、曹長ポプテ様。いえ、死亡認定が出ておりますので、元曹長ポプテ様。どうも我々を誤解していらつしやるようで、悲しい限りでございます……後ろ暗い所がない証拠としてスペックシートをお送り致しますよう。どうぞ、十分に納得されてからご契約くださいませ』

電話の向こうのテイタがそう言う……

机の上に置いていたスマホに、俺には読めない文字のデータがビーツと送られてきた。

同時に姫が顔の横のタブレットをちよんちよんと指差す。

『確認するから、何も言わずに離れてて』

俺は姫に頷きを返して、そろそろとコタツから離れた。

「出力、推進力、ステルス機能、居住区、いいね。船のサイズは小さいけど」

「なんでこんな武装とかステルス機能が充実してんの？」

『現在川島様御一家は孤立無援の状態。でしたらば必要になるのは、外敵から身を守る機能……そう愚考し、この船を選別した次第でございます。ミズ』

「うん、機能は問題ない。建造年も新しいから、汎用品や消耗品も今の世代のがそのまま使えると思う」

姫とマーズが、こちらに向かって頷いた。

「ティナさん……蛇の頭と宇宙船、交換します」

『グッド、商談成立ですね』

十秒ほど無言が続き、俺達三人はその間もじつとスマホを見つめ続けた。

『お待たせ致しました。異能をご確認ください』

俺がジャンクヤードを確認すると、そこには見慣れない矢印のような形のもが増え  
ていた。

交換されないようにKEEP設定を行い、説明文を見ると『圧縮済み』とだけ書か  
れている。

『その宇宙船は圧縮されており、異能から取り出して百秒後に元の大きさに戻りま  
すので……今取り出すのはお勧め致しかねます』

「わかりました」

『それでは川島様、川島翔坊様トシボ、今後も良き取引を。ご連絡をくだされば、あなたアナタのテイ  
タが誠心誠意ご対応致します』

プツと電話が切れた。

同時に緊張の糸が切れ、俺は床にゴロンと転がった。

ぐつと両手を上にあげてゆっくりと息を吐いた俺の顔に、バサリと布のような何か



かけられた。

「わっ、何？」

上体を起こして見てみると、それは俺の外出用のジャケットだった。

「トンボ、行くよ」

「え？ どこに？」

「会社。あそこの駐車場ならギリギリ宇宙船が取り出せるから」

「今から行くの？」

「昼間に出したら即バレるっしょ？ 大丈夫、あそこは借りた当初から迷彩アンカー仕込んであるから、すぐ使えるよ」

「最悪蛇退治がバレたら宇宙船で逃げるんだから、使えるかどうかはさっさと確かめとかなきゃまずいんだよ」

マーズにそう言われ、俺はバツと立ち上がった。

たしかにそりゃそうだ、すぐやらなきゃな。

俺達三人はすぐにタクシーに飛び乗り、川島総合通商の本社兼工場へと向かったのだった。

「トンボ〜！ 迷彩オツケー、吸音装置も動いてるから、出して大丈夫だよ〜！」

川島総合通商の工場、その軒先につけられた照明で薄暗く照らされた駐車場。

その工場側の端っこに立った姫が手で丸を作るのに、俺は駐車場の真ん中から手を振って答えた。

「じゃあ、取り出すよー！」

「出したらすぐこっち来てよー！」

姫の隣にいるマーズにも手を振り返し、俺は宇宙船を取り出した。

まるでプラモデルのような手のひらサイズのそれを砂利の地面の上に設置し、走ってマーズたちの元へと向かう。

「方向は大丈夫？ 横向いてたらお隣さんのボロい車にトドメ刺しちゃうよ」

「ちやんとこつち側に触先が向くように置いたよ」

「あと三十秒だよ」

「どんな船かな……」

そこからはなんとなく三人とも黙ったままで、じつと宇宙船の方を見つめ続けた。

この宇宙船は、これまでやってきた事の総決算だ。

宇宙の果てへと流されてきたマーズが、やっと地元に戻れるのだ。

俺はなんとなく、ちらつとマーズの方を見た。

俺の視線に気づいたマーズもこつちを見て、牙を見せてにっこり笑った。

ドン、と駐車場の真ん中からポリタンクでも落とすような音がした。

そちらを見ると、グレーに白のラインの入った紙飛行機のような形の宇宙船が地面から少しだけ浮いた状態で佇んでいた。

「うおっ……すつげえええ！」

「……これ、まさか……」

「まーちゃん、これって……」

「あれ……？　凄い……凄くないの……？」

興奮する俺とは相反するように、姫とマーズはなんとも言えない顔で船を見つめていた。

あんまり人気ない船だったのかな？

「あの……どうしたの？」

「してやられたね……船は船でも、これは海賊船だよ……」

「海賊船!？」

「宇宙には海賊専門の造船所つてのがあるの……これはその作った単独強襲艦。そりや武装も豊富でステルス機能もしっかりしてるわけだわ……しかし、ここまでやるかあの女……」

猛禽類の嘴のように尖った宇宙船の舳先の両脇には、まるで竜の瞳のように鋭いビーム砲の銃口が開いている。

たしかに海賊船と言われればそんな感じにも見えるかも。

でもなんかかっこいいし、結構強そうだし、別にこれでも問題ないんじゃないだろう

か？

「あの……それで、海賊船って何か駄目なの？ 普通に動くんでしょ？」

そう尋ねた俺に、両手の肉球で頭を抑えたままのマーズが答える。

「銀河一般法で海賊船は警告なしで撃墜していい事になってるんだ。だからこの船に乗ってる限り、俺達は海賊扱いでどこにも近づけないんだよ」

「え!？」

「つまり、うちはあの女にどこにも行けないどうしようもない船を押し付けられたって事」

「シャ……シャークトレードじゃん！」

「なんだか改めて、あの金」

ゴールドデンヘッドドラゴン

「頭龍商會が嫌われている理由が良く理解できた気がし

た。」

「ま、まあまあ！ とにかくさ、一回乗って見ない？ 最悪避難信号だけでも出して、海

賊船はどっかの海に沈めといてもいいんだからさ」

「ま、そうだね……流石にここらへんで宇宙に上がって即撃墜って事はないだろうし、一回宇宙に上がってみようか」

「ちよつと待つててね、飛ばすにしてもウイルスが仕込まれてないかスキャンしてからにしよう」

そう言いながら腹の部分のハッチから船に乗り込んでいった姫を見送り、俺はスマホのライトを付けて、マーズと一緒に船の周りを色々見て回る。

「なんかほんとに紙飛行機っていうか、まんま矢印みたいな形の船だね」

「ステルス性能が高くてね、輸送やつてた頃はこの艦に散々煮え湯を飲まされたよ。まさか自分がこれに乗ることになるとはなあ……」

「表面が紙やすりみたいにザラザラしてる」

「耐ビームコーティングだよ。しっかり力場で減衰できてればそれで十分散らせるんだ」

やたらと詳しいマーズの解説を聞きながら歩いていると、腹のハッチがパカッと開い

た。

「ボーイズ、準備できたから乗って」

「はい」

「やれやれ、さすがに中に入るのは初めてだな」

階段になつていいるハッチを登り、人がギリギリすれ違えるぐらいの廊下を姫の後ろについて進んでいくと、壁に向けて椅子が四つ据え付けられた部屋に出た。

「メインブリッジが艦橋、特に変なソフトも仕込まれてなかったから起動するね」

ヴン……と小さく音が鳴ったかと思うと、さつきまで壁だった所が全周囲ディスプレイに変わり、駐車場と工場が映し出された。

俺の顔の前三十センチほどに透明なタブレットのような物が出現し、そこには読めない文字で何かが書かれていた。

「トンボ、それを手で触れて」

「あ、うん」

俺が触れると、タブレットの文字はまた切り替わった。

「副船長は姫とまーちゃんでいい？ いいならもっかい触れて」

「うん……つて、え!? じゃあ船長は誰？」

「そらトンボでしょ」

「トンボ以外いる？」

不思議そうな顔で二人はそう言うが、普通にマーズか姫の方がいいと思うんだけど。

「俺何にも知らないんだよ？ マーズか姫の方がよくない？」

「俺は国に帰っちゃおうし……」

「姫、こんなダサい船いらなーい」

しよ、消去法なわけね……

俺はタブレットにもう一度触れ、一番後方の席へドスンと音を立てて座った。



成り行き任せで宇宙海賊か……

俺はなんとなく、自分の左腕をじっと見つめた。

「そーいや、この船の名前ってあるの？」

「んーつとね、日本語に直すと……サイコドラゴンかな」

「サ、サイコドラゴン……」

あんまりにあんまりな名前に、俺は椅子からずり落ちそうになった。

見た目はカッコいい船だと思ってたのに、サイコドラゴンはないよなあ。

……まあでも、俺程度の海賊にはお似合いの船か。

「ステルス展開完了だよ」

「機関良好、不具合なし。そんじゃあ、ちよつと宇宙に行こうか。船長、いい？」

俺はきちんと椅子に座り直して、生身の左腕の裾をぐつと捲った。

宇宙船で颯爽と現れ、左腕に仕込んだマシンガンで敵をなぎ倒し、美女の危機を救う。漫画に出てくるそんな宇宙海賊になるのが、俺の子供の頃の夢だった。

でもきつと今の俺と彼との間には、それこそ大気圏よりも分厚い隔たりがあるだろう。

それでも、俺は今、成り行きだが、消去法だが、たしかに宇宙海賊なのだ。

絶対になれなかったはずのものになっちゃったんだから、細かい事は一旦置いておくか。

俺は前の席に座っている姫とマーズを見て、大胆不敵なつもりで笑みを作った。

「大負けに負けて、夢ひとつ叶ったって事にしよう」

俺は人差し指を立てた左腕を、天高く掲げた。

「サイコドラゴン、発進！」

漫画のような加速も、激しいGもなかった。

機首が持ち上がって空が見えたと思ったら、数秒後にはもう俺は宇宙空間にいた。

「すんげえ……」

俺が暗闇の中に煌めく地球の夜景に見とれていると、サイコドラゴンからビービーとエラーっばい音が響いた。

「あれ？ マップからエラーが出てる」

「え？ なんで？ 現在位置特定不能？」

「測位システムは？」

「レーダー打ってみる？」

前の席からマーズがこちらを覗き込んだ。

「トンボ、ここらへんに他の船はまじないと思うけど、レーダー打っていい？」

「何でも好きなようにやっちゃって」

「ありがとう」

姫が何かを操作すると、全周囲ディスプレイに小さく矢印型の船体が表示された。

「レーダー打ったよ」

姫がそう言うと、その矢印の周りにどんどん星が表示されていく。

感心しながら見つめている内に、目の前にはあつという間に銀河地図ができあがってしまった。

「えーっ!? これ……マジ?」

「汎用地図インプリント脳内転写に全く記載のない星系ばかりだ……ここ……どこ? 姫はわかるの?」

「あのね、まーちゃん落ち着いて聞いてね……」

姫はマーズの方を向いて、物凄く嫌そうな顔でこう続けた。

「ここ、修羅人の庭……」

「……………えっ!? 嘘でしょ姫!」

「マジなんだわ……」

俺は立ち上がって、なんだか深刻な顔をした二人のところに向かって歩く。

重力制御で飛んでいる船だからだろうか、無重力にならずに普通に重力があるよう  
だ。

しかし、二人が話してる修羅人の庭つてのは一体何なんだろうか？

「あの……その修羅人の庭つて何？」

俺がそう尋ねると、マーズは口をパクパクさせながら「ヤバいところ……」とだけ答える。

それを見た姫は俺の右手の袖を引いて、耳元に口を近づけて話しかけてきた。

「あのね、修羅人の庭つていうのはね……」

「うん、うん」

「彼女たちがいた銀河の、隣の、そのまた隣の銀河なの」

「え？　じゃあめちやくちや遠いじゃん」

姫は俺の右耳をちゃんと引っ張って、更に小声で話す。

「それだけじゃないの。これまで姫たちの銀河から修羅人の庭に行つて、帰つてきた船つてほとんどいないの」

「え!?! じゃあサイコドラゴンでは……?」

「帰れない……帰れないんだよ」

絞り出すように答えたマーズの言葉が、メインブリッジ艦橋に静かに響いた。

帰れると思つていたのに、どうやっても帰れない場所にいたのだ。

彼の無念は俺には計り知れない物だった。

無力な俺は悲しむマーズに、なんと声をかけていいのかもわからなかった。

だが、姫は違つた。

銀河一の元アイドルの辞書に『できない』という文字はなかったのだ。

「ま、今はしょうがないよね。もっとでっかい船作ろつか」

あつけらかなとそう口にした姫を、俺とマーズは半ば呆然とした視線で見つめていた。

「なに？ 他にもっといい方法ある？」

「いや姫、でつかい船って……どれぐらい？」

「たしか修羅人の庭まで行って帰ってきた船は惑星級だったらしいけど、こちらはとてあえず隣の銀河に出ればいいわけだから……今の主力艦ぐらいの推進力と戦力があればいいんじゃない？」

あつげに取られていたマーズが、姫に尋ねる。

「それってまた金ゴールデンヘッドドラゴン頭龍商會に頼むのかい？」

「頼まないよ。あつちから持ちかけてくるならともかく、こつちから取引を持ちかけるのは絶対駄目。この船の取引でよくわかったでしょ、金に魂を売った悪魔みたいな連中なんだから」

「じゃ、じゃあどーすんの……？」

「作んの」

「どーで？」

姫がなんでもないような顔で「んっ」と指をさした先には……

大地の端から頭を出した太陽にゆっくりと照らされ始めた、青く輝く惑星があつたのだつた。



## 第36話 都会と猫と地殻変動

俺達が宇宙海賊船サイコドラゴン号で宇宙に出てから一週間。

周辺地域に甚大な被害を及ぼした玉四ダンジョンの蛇のおかげで、これまでずっと棚上げにされてきた東京近郊のダンジョン周辺地の国有化が発表された。

『政府の強硬な用地取得に対し、地権者団体では集団訴訟の準備が進んでおり……』  
「あんないつでつかい魔物が出てくるかわからん土地にでも住んでいたいものなのかな」

「違うっしょ、ああやって補償金を吊り上げてんのよ」

コタツの中で三人一緒にテレビを見ながら、姫の作ったフライドポテトの炊き込みご飯の朝食を食べる。

外にどれだけ嵐が吹き荒れようとも、うちの朝のルーティンは全く変わらなかつた。

「トンボ、おかずもちゃんと食べなさい。栄養あるんだから」

「ちよつとこれ、食べ慣れない味で……」

「そう？　美味しいけどな」

俺が二口目を躊躇している柿とニラの卵とじも、マーズと姫はバクバクいつている。

まあ、異国や異世界どころじゃなくて異宙の人達なわけだから、味覚は違つて当然な  
んだけどね。

『これに対し、近畿地方のダンジョン対策の中心人物である大阪府の鬼戸島府知事は厳  
しいコメントを……』

「地方は東京みたいにごちやつとせずに閑散としてるんだっけ？」

「行つたことないけど、ダンジョン周りには街がないつて習つたなあ」

地方では、ダンジョン周りの住民の排除なんて二十年も前に終わつている事らしい  
……

というか地方はダンジョンの周りには誰も住みたがらないから、ダンジョンを避ける  
ように都市が再構築されている。

県庁所在地も変わりまくり、土地に根付いていた人も流出しまくり。

そして人の流れ着く先である都市圏の土地の値段は更に上がり続け、またダンジョン周りの土地に手を入れにくくなるという負のループができていた。

そんなこれまで何度も何度も議論されては様々な障害に阻まれてきた都市圏の大病巣に、今回何百人もの被害者を出してようやくメスが入ったのだった。

そんな地殻変動真っ只中の東京で、うちの会社はその余波の一部に振り回されていた。

「え？ バイト募集に大量の応募ですか？」

『そうなんだよねー。なんか東大卒とか京大卒とか、凄い人がいっぱい応募してきてて困っちゃってさあ』

「東大!? なんて!？」

『わかんないけどさあ、こないだの埼玉の蛇の件で外資系がガンガン撤退してるじゃん。そのせいもあるのかな、あとネットで色々言われてるのもあるんじゃない？ あの大蛇倒したロボットが川島のロボットじゃないかって噂になってるらしいよ』

「そんな根も葉もない噂で応募してくる人もいるんですね……」

もちろんほんとは根も葉もビームもあるのだが、証拠なんかどこにもないのだ。

「チャットでも回したけど、会社に『ロボットありますか?』ってめちやくちや人が来てるんだよね。バイトの冒険者組が追っ払って来てくれるけど、そのうち対策必要になると思う」

「あー、やっぱりそうですよね。警備員雇うしかないですかねえ」

「訪ねて来てるのも求人に応募してきてるのも男の子ばかりだからさー、やっぱりみんなロボット大好きなんだねえ」

「そんな期待されても、うちにはフォークリフトぐらいしかないんですけどね」

俺は採用担当を引き受けてくれている阿武隈部長に、警備員雇用の相談とバイトの採用は定員で打ち切りにする事を伝えて電話を切った。

「トンボ、東大って何?」

駅前で買ったベビーカステラを肉球でつまみながら、横を歩いていた猫のマーズが俺に聞いた。

足元を枯れ葉混じりの冷たいビル風がぴゅうぴゅう吹き抜けていくが、毛皮を着た彼は気にもならないようだ。

「東大つてのはこの国で一番偏差値が高い大学だよ」

「偏差値つて、何の偏差値？」

「え？ 何だろ？ 学力を測る数字的な？」

「ふうん、トンボの学校はどれぐらい？」

「ないしょ」

「トンボは家でも勉強してないし、あんま高くなさそうだね」

ほつといてくれよ。

そんな事を話しながら、俺達は東京都ダンジョン管理組合本部キルへと向かっていた。

そう、あの事件から一週間が経ち、ついに俺達と自衛隊との窓口である防衛装備庁の佐原さんから呼び出しがかかったのだ。

アリバイが完璧だったから一週間後になったのか、証拠を固めるのに一週間かかったのかはわからないが、こっちもどう転んでもいいようにこの期間で覚悟は決めてあった。

拳銃弾を防ぐ程度の低出力の力場発生装置（パリア）を入手して身につけているし、フル装備の戦闘ロボはジャンクヤードに収納済み、宇宙船はステルス状態で宇宙空間に待機中だ。最悪の手段を取られても、逃げ出すぐらいの余裕はあるはずだ。胸を押さえて深呼吸をする俺を見て、マーズは髭を揺らして笑った。

「そんな緊張しなくてもいいと思うよ。本気ならアパートに踏み込んで来てるって」  
「無理言うなよ」

「大丈夫大丈夫、なるようにしかならないよ」

余裕綽々にそう言って、彼は食べ終わったベビーカーの紙袋を俺のジャンパーのポケットに押し込んだのだった。

マーズが言った通り、本部についてもいきなり拘束されるような事はなく、俺達はいつも通りの応接室に通されたのだった。

いつも通りなんとなく信用できない佐原さんがいて、いつも通り美味くも不味くもないコーヒーが響かれ、いつも通りの調子でいきなり鋭角に切り込んだ話が始まった。

「お国元と日本で正式に国交を結ばませんか？」

つまり、お前らのバックと話させろという事だ。

「お国元と言われてもねえ」

「淡路島の亀が問題ですか？」

うちの会社は一応表向きには、巨大な亀に支配された淡路島の野良ダンジョンの向こうから来たマーズたちが一般人の俺を社長に担ぎ上げて立てた会社という事になっていた。

その亀さえ排除できれば、ダンジョンの向こうの本国と手を組む余地はあるのか？と聞きたいのだろう。

自衛隊も、まさかマーズたちが宇宙の彼方から来た遭難者だとは夢にも思っていないだろうな。

「そうじゃなくてね、別にうちはどこかの国のひも付きじゃないって事。社員の異世界人は俺も含めて全員仮帰化してるし、税金も払ってるでしょう」

「そりやあもちろん、承知してますよ」

全く承知していないのだろうが、佐原さんは一旦その話を引つ込めて、もう一回り小さな話を出してきた。

「ではどうでしょう、もし強化外骨格レイバースーツ以外の何かもつと大きいものがあればぜひお取引頂きたいのですが」

直取引が駄目なら、あのロボットだけでも売ってくれという事だ。

そりやまあ、あるなら欲しいよね。

あれ一機あるだけで、たいいていの都市破壊級には対応できるだろうし。

でももし、あの蛇を我々が倒したという事が確定したら……

たとえ日本が法で罰さなかつたとしても、俺たちはどのみち地球にはいられなくなるだろう。

都市破壊級の魔物は災害ディザスターそのものだ。

災害を止められる力を持った個人なんて、災害よりもタチが悪い。

そんなものの存在を認められるほど、人間は強くないのだ。



「今のとこないかなあ……なんでそんな事を？」

「いえ、これは笑い話として聞いて頂きたいんですがね。世間ではちよつとした噂になつていまして。あの大蛇、埼玉六号を倒した謎のロボットがありましたね、あれが川島さんのとこのロボットじゃないかっていうんですよ」

「そりや笑えるね、あんなのあつたら真つ先に自衛隊に売り込んでるよ」

「ええ、ええ、そうであつて頂きたいものです。ああ、これもまた噂なんですが……どうもその噂を真に受けた諸外国の情報機関が、そちらの会社やその社員の近辺を探つているといふ話がありました」

これは噂ではなく本当だった。

サードアイで出撃したあの日以降、会社のデータベースには幾度となくハッキングが仕掛けられ、姫が各地に放つている昆虫大のドローンが様々な国籍の不審人物を確認していた。

うちの実家や会社の社員やアルバイトの家庭の近くには、一応暴徒鎮圧能力を持ったドローンを忍ばせてはあるが……

正直頭の痛い問題ではあつた。

「そりや大変だ。社員たちにはちやんと戸締まりをするように言つとかなきゃね」  
「それだけでは不安に思う社員もおられるのでは？」

「……………」

佐原さんとマーズは腹を探り合うように無言のまま見つめ合い……

なんとなく具合が悪くなりそうな緊張感の中で、マーズが先に口を開いた。

「……………佐原さんさあ、はつきり言いなよ。自衛隊はうちにどうしてほしいわけ」

「議員の先生方は色々とお考えでしょうが、自衛隊<sup>うち</sup>としては是非ともお願いしたい事が取り急ぎ二つだけ」

「言ってみなよ」

「一定以上の武器武装類の自衛隊への専売、それと日本に本拠地を置いて頂く事ですな」

佐原さんの言葉に、マーズは悪そうな笑みを浮かべてこう聞き返した。

「それで佐原さん個人は、うちに貸しと借りどっちを作るのが都合がいいわけ？」

その言葉を聞いた佐原さんは、これまたマーズと同じような悪どい笑顔を浮かべたのだった。

そうして、この後ろ暗い取引のおかげで川島総合通商は社員や家族の密かな保護と、撤退した外資系のロジセンターの跡地を手に入れる事になり……

逆に川島から自衛隊へは、ある程度の火や氷を防ぐ程度の能力がある力場<sup>バリア</sup>発生装置の納入が決定したのだった。